リリカルなのは～夜天を受け継ぐもの～

蒼影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは〜夜天を受け継ぐもの〜

【Nコード】

N6570N

【作者名】

蒼影

【あらすじ】

家族も友人も何もかもを失った男…八神蓮は彼の妹…八神ハヤテから死に際に夜天の魔導書と守護騎士を託される。

その後蓮はその世界から別の世界に転移した。その先は…並行世界の自分の故郷…海鳴市だった。

その世界で彼は並行世界の妹と出会う。

彼は誓った。『自分に与えられた力と妹から託された力で今度こそ彼女を守る』と……

E P O . . . 始まり〜降りしきる雨の中で〜（前書き）

処女作です。

暇つぶし程度な気持ちで読んでください。

何とか完結させたいです。

ではごっご〜

9 / 1 1 少し本文を修正しました

E P O . . . 始まり〜降りしきる雨の中で〜

雨が降っている……

まるで世界が泣いているかのように雨が降り続けている……

管理世界第0番世界：《ミッドチルダ》……その首都クラナガンから外れも外れの郊外の丘の上で一人の男が膝をついていた。

男の手の中には10代後半と思われる栗色の髪をした女性が抱かれていた。

しかし、その女性の腹部はその女性の鮮血で真っ赤に染まり、既に息は無い。

男の周りには男女を問わない死体、死体、死体、死体、死体、死体、死体。

頭が無くなっている死体、動物のミンチ肉の如くグチャグチャになった死体、胴と頭が真っ二つに切り裂かれた死体、言葉には形容しがたいほど酷たらしく惨殺された死体。まさに地獄絵図と言う表現がぴったり合うような惨状だった。

男は声を殺し、嗚咽を漏らす。

「クソ！どうして……どうしてこいつが……どうして、ハヤテが殺されなければならぬ！？妹はただ、俺や家族と一緒に過ごしたかっただけなのに！？」

女性：ハヤテの両親は物心がつく前に事故で亡くなり、彼女にはふたつ年の離れた兄しか家族はいなかった。

さらに彼女は生まれつき足が不自由だった。その為彼女は学校にも行けず友達もほとんどいなかった。

しかし、彼女の9歳の誕生日に変化が起きた。突然、家族が増えたのだ。

増えた家族の人たちは少し特殊な人たちだった……

聞けばその人たちは彼女の家にあるとある魔導書から生まれた騎士だと言いさらに《魔法》が使えるといった。

そして騎士たちの主である彼女にもその才能があると言った。

その魔導書は他者から魔力を蒐集し、全666ページを埋めれば強大な力を主にもたらす物だった

彼女が望めば、もしかしたら世界を手に入れることも可能な力だった。

しかし、彼女はそれを望まなかった。彼女はこう言った

「うちは皆と仲良く平和に暮らせたらそれで幸せなんよ……」

しかし、そんな幸せも長くは続かなかった。

強い力にはそれ相応の代償が必要だった。

彼女の足が動かないのは魔導書が幼い彼女の魔法の力……魔力を奪っていたためだった。

魔導書に一定量の魔力を蒐集させなければ彼女は足の麻痺だけではなく、全身に麻痺が広がり、やがて死に至ると言った。

騎士たちは自分たちを責めた。自分たちのせいで主である彼女を苦しめていたのだと。

騎士たちは彼女を救うため彼女との約束を破り、魔力の収集を始めた。

しかしその年のクリスマスイヴに悲劇が起きた。

その魔導書は長い年月と心無い先代の主たちのせいで主を取り込み、破壊をもたらす魔導書に変わり果てていた。

運よく彼女は、その後彼女の友達になる少女たちによって助けられた。

そして翌日のクリスマスの日に魔導書の管制人格……リインフォースを失った。

リインフォースは自分はこのままだとまた暴走し、彼女を取り込んでしまうと言い、自ら消滅することを選んだ。

「アカン！！勝手に消えるなんて許さへん！！聞きわけのない子は嫌いや！！」

「主ハヤテ。駄々をこねては嫌われてしまいますよ」

「うちは夜天の主や！うちが！うちが！しっかり抑えるから！だから……消えんといてよ……」

「主ハヤテ。わたしはたぶん……いいえ。間違いなく世界で一番幸せな魔導書でした」

リインフォースはそう言って彼女の前から消えてしまった

そして彼女は友人たちと共にとある組織に所属することにした。

組織の名は《時空管理局》。無数に広がる様々な世界を管理する組織

彼女は先代の主たちがやったとはいえ、彼女の持つ魔導書で家族や友人を失った人たちはたくさんいた。

彼女はその人たちに少しでもいいからその人たちに罪滅ぼしがしたかったのだ。

彼女の兄も彼女たちの助けになれるのならばとその組織に入った。

しかし、様々な思惑と不運により彼女は……ハヤテは皮肉なことに彼

女の兄……八神蓮の手によってその生涯を閉じた。

EP0・・・始まり〜降りしきる雨の中で（後書き）

いかがだったでしょうか？

もし、良ければ感想やご指摘をください。

感想で作者のやる気が上がり、指摘で作者の気が引き締まります！

EP0-2・・・始まりその2〜新たなる書と騎士と共に〜（前書き）

連続投稿です。

これ投稿したら寝ます。

それではどうぞ！

9/11 一部表現を修正しました。

11/21 内容を一部追記しました

12/9 一部修正しました。

EP00-2・・・始まりその2〜新たなる書と騎士と共に〜

「此処にいましたか…蓮。主を抱えてどこに行っただかと思えばやはりここでしたか……」

男：蓮の背後から声がかかる。ピンクの髪をポニーテールに束ねた女性。夜天の魔導書の主である八神ハヤテの騎士たちの将。

《烈火の将》シグナムだった。彼女はバリアジャケットを纏い、蓮に向けて愛剣であるアームドデバイス…レヴァンティンを突きつけていた。

「なぜ……主を……」

「シグナムか……身も蓋もない言い方をすれば、『不運の巡り合わせ』だろう」

とそこに

「ふざけんな兄貴！どうして！？どうしてハヤテを！？」

やってきたのは小柄な赤毛の少女。ハヤテを慕い、ハヤテのために戦ってきたといっても過言ではない程ハヤテを大切に思っていた子…

《鉄槌の騎士》 ヴィータがシグナムと同様にバリアジャケットを着て自分のデバイス、グラーファイゼンを構え、蓮を射殺さんばかりに睨みつけていた。

「蓮さん……」

「蓮……」

ヴィータに遅れてやってきたのは、金色の髪の女性。《湖の騎士》 シャマルと蒼い狼の姿をした、《盾の守護獣》 ザフィーラだった。

「夜天の守護騎士……全員集合か……」

「蓮……この惨状は……」

「薄汚い管理局の上層部が寄越した奴らだ。目的は俺の抹殺らしい」

「だけど！兄貴！どうしてなのは達まで!？」

ヴィータが言うそこには鮮血で赤く染まった白いバリアジャケットの胸……心臓の部分に穴が空いて息絶えた女性。高町なのはの死体だった。

近くには同じように心臓を一突きにされた蓮やハヤテの友人たちの姿があった

「俺と同じで脅迫され、その後、洗脳されたい。相当性質の悪い洗脳を受けたらしく、解除は不可能だった。」

「蓮はこれからどうするのです？」

「こいつ等を《取り込んだ》後、ハヤテを地球に埋葬する。埋葬と言っても、管理局の連中に利用されないように形だけの埋葬になるがな……その後、ランダムにどこかの世界に転移する。」

「そうか……ところで蓮、ひとつ聞きたい。どうして我々は消えぬのだ？いくら我らが夜天の書から半ば独立していても、主が死んだ以上、我等は消えるはずなのだが……」

シグナムの言うことは尤もだ。守護騎士達は元々夜天の書に組み込まれたプログラム、半ば独立したシステムとは言え主は死んでしまえば消滅するはずだった。なのに自分たちはまだ消滅せずにいる

「ハヤテがな、死ぬ前に俺にお前たちを任せると言っつて、夜天の書の所有権を無理やり俺に渡してきてな……今の夜天の主は俺ということになっている。」

「そんなことができるはずがありません!」

「その通りだシャマル。最終的に夜天の書の所有権を移したのは俺のスキルを使って……だ。」

「なぜ、そのようなことを……」

「ハヤテの最後の頼みだからだ。さて……いくぞ。」

俺は長距離転移の魔法でハヤテと俺が過ごした町、地球の海鳴市に
跳んだ

.....

.....

.....

.....

.....

海鳴市の郊外の一角にハヤテの墓を建てた。と言っても墓の中に遺体は無い。

「さて、これから俺はどこかの世界に跳ぶ。おまえたちはどうする？望むなら夜天の書の契約を破棄することもできなくは無い」

「いや……主ハヤテが兄上を信じて私たちを兄上に託したのだろう……私は蓮についていく」

「わたしも付いて行く！ハヤテが兄貴を最後まで信じたんだもの、わたしも兄貴を信じてみようと思う」

「私もいきます。今の蓮さんを放っておけません！」

「私も蓮についていくぞ」

守護騎士の皆がそう言ってきた。

「みんな……濟まない。」

俺はシグナムたちに頭を下げた

「気にするな。新たな主。」

「主か……シグナムにそう言われるのは違和感あるな、今まで通りでいいんだぞ?」

「そうだぞ、シグナム。兄貴は兄貴だろ?」

「ヴィータ……お前な……いや、そうだな蓮。」

「ありがとう、シグナム。それと皆、悪いんだがしばらくは書の中で待機していてくれないか?」

「どうしてですか?蓮さん」

「まだお前たちは気持ちの整理がついてないだろう?特にヴィータ」

「あ、あたしが?……」

「ああ……かなり無理している顔だ」

ヴィータは誰が見ても無理をしている顔だった。当然だ。突然自分の主が殺され、管理局の策謀のせいとはいえ、ハヤテを殺した本人である。

ハヤテの兄の蓮が新たな主など、頭では納得していても、心はそう簡単に納得できるわけもなく、今のような無理やり納得しているような状態になっているのだ。

「言われてみればそうかもしれない……」

「だから、気持ちの整理がつくまでは書の中に入れてくれ。ちなみにリインは先に書の中だ。」

「あいつ、姿が見えないと思ったら……」

「あいつはハヤテが死ぬところを間近で見たから……ショックが大きかったんだ。お前たちも書の中でしばらく休んでいてくれ」

俺が言うと皆はどうにか納得して

「わかった。」

「わかったよ。」

「わかりました。蓮さん」

「承知した。」

と了承の返事を返した

「それじゃあ俺も始めるか……夜天の書、起動。」

すると俺の目の前に夜天の書が出現する。

「スキルナンバー6 リバースシックス 《醜悪》解放」

俺は管理局の腐った上層部たちによる人体実験で無理やり取得させられた能力を発動させる。

解放した能力は《醜悪》…僅かであるが世界の根源…アカシックレコードに介入し、ありとあらゆる魔法具の製作、改変を可能とする能力…

スキルが発動すると俺の左目に鏡に映したように反転した6の数字が浮かび上がり、黒い革のようなローブが現れた

頭の部分には牛のような意匠の仮面が現れ、俺はそれを被る

俺が手を翳すと夜天の書が光り、書が開き、ページに書かれた文字が次々と書き直されていく

『夜天ノ書。守護騎士システム以外ノプログラム変更完了。及び、各情報入力完了。∴プログラム変更二伴イ、名称ノ変更ガ必須デス。新タナ名称ヲ入力シテクダサイ。』

夜天の書のページがバラバラと捲れ、最終ページに行きつくと無機質な音声が流れる

「新たな書の主が命ずる。これからお前の名称は《暁の書》だ。」

『名称ヲ夜天ノ書カラ暁ノ書ヘト変更サレマシタ。』

その音声と共に夜天の書は姿を変える。

所々表紙の部分に金の装飾が施されたが、おおまかな部分は元の夜天の書とは変わらない。が、最も変わった部分と言えばベルカの紋章である剣十字が上下に反転していることだろう。

「超長距離転送魔法発動。……座標はランダム。」

『現在、次元空間ノ状態ガ非常ニ不安定デス。小規模デスガ、次元断層ガ起キル危険モアリマス。転移ノ中止ヲ提案シマス』

「構わない、続行だ」

『了解。超長距離転送魔法発動。：転送座標ハランダム』

そうしてこの世界からひとりの魔導師が消えた。

EP0・2・・・始まりその2へ新たなる書と騎士と共に（後書き）

どうでしたか？

感想待ってます。

主人公の設定（前書き）

この小説の主人公の設定です。
話が進むにつれ、内容をどんどん追加していきます。
ずいぶん厨二臭いです。

2010/10/19：設定を一部追加

11/10：設定を追加。

2011/1/11：設定を追加

主人公の設定

オリキキャラ設定

・八神蓮

年齢：21歳

身長：179?

体重：58kg

髪の色：白

容姿：『クロム・ブレイカー』の主人公、高城黔を大人っぽくした感じのイメージ

性格：誰にでも優しい好青年

魔力色：黒に近い紫

デバイス：暁の書：蓮のスキル《革変》によって夜天の書が変化した大容量集積型ストレージデバイス。

見た目は夜天の書に金の装飾が本の縁や表紙に施され、ベルカの剣十字が逆さになっている

デバイスその2：神威：蓮の本来のデバイス。

待機状態は銀色の腕輪に翡翠色の宝石がついている。男性型のAIが搭載されているが、言葉使いが堅い。

デバイス形態の形状は全部で3つ。
バリアジャケットは簡素な神主服。

形状：槍そう・神威の基本形態。形は三つ又の朱色の槍。柄尻の部分に6発のカートリッジが搭載されている。

技名：砲天臥撃・穂先から3つの砲撃を打ち出す。砲撃の大きさはなのはのデイバインバスターの半分ぐらい。

：崩纏牙撃・槍に電気を纏わせて敵に切りかかる。イメージはシグナムの紫電一閃の電気バージョン

ケラウンス
：雷霆・神威を完全に雷化させて投擲する技。現在の蓮の魔力ならなのはのスターライトブレイカと同威力。技命名はハヤテ。由来はギリシャ神話の最高神ゼウスの雷霆から

：弓しゅう・神威の射撃形態弓の大きさは和弓と洋弓の中間ぐらい。
朱色の弓
右手の籠手の部分にカートリッジが搭載されている

技名：飛翔燕弾・燕の形の魔力弾を1発高速で放つ

：弾雨葬送・50〜100の魔力弾を周囲に展開し、相手に一斉に発射する。イメージはフェイトのフォトンランサー・ファランクスシフト

『弓』には弓形態と『仕込み剣+盾』形態と二つの形態がある

衣いそせ・神威の防御形態。形状はプラチナの大きな長方形の布

神威はカートリッジを1発消費することに技の威力・範囲・規模が倍加していく

蓮のスキル：管理局上装備の実験によって付加させられた特殊スキル。本策ではスキルの表記は《〜》となっている

《かくへん革変》：現存する魔道具を好きなように作り変える能力。しかし魔力消費が大きく使用後は最低3日は魔力回復のために休まないといけない。

《ぶんかい分解》：物質、魔力構成物関わらず触れたものを分子レベルまで分解する能力。手に触れないと分解できないという欠点があるが凶悪なスキルなのは変わらない。

《どんか鈍化》：目で見た対象の速度を10分の1にする。持続時間は最低30秒。対象の制限は特にない。一度の発動で速度を遅くできるのは最大1つ

蓮の持つてる資格：蓮が元いた世界で持っていた資格。資格は以下の通り

・デバイスマイスター資格・デバイスを開発・改良等の資格

簡単な紹介：本編の主人公。妹のハヤテを管理局の陰謀で殺された後、夜天の書をハヤテから受け継ぎ、夜天の書を暁の書に革変、その後ランダムに超長距離転送魔法で並行世界の海鳴市に来て、そこで並行世界の八神はやてに出会う。

主人公の設定（後書き）

どうでしたか？

ちなみに蓮の元の世界のハヤテと本編のはやてがごっちゃんにならな
いように、蓮の世界のハヤテの名前をカタカナで表記します。
ご感想、ご指摘お待ちしております。

EP1・・・降り立つ世界〜そこは並行世界〜(前書き)

いよいよ本編突入です。

と言っても導入部みたいなものなので原作キャラは出ません
それではどうぞ！

9/11 一部本文を修正しました。

EP1・・・降り立つ世界〜そこは並行世界〜

転移が完了すると俺は森の中にいた。

「此処は…森の中か？とするとこの世界は少なくとも自然はあるんだな…」

俺はとりあえず森の中を歩くことにした

森自体はあまり大きい森ではなかったらしくすぐ俺は森から出ることに成功した。

「なんだ、案外小さな森だった…な…」

森から出た俺の目に飛び込んできた光景に俺は絶句した

そこに広がっていた光景はまさしくたった今転移したはずの海鳴市だった。

「どうなっているんだ？これは………」

『マスター。』

そこへ待機状態となった暁の書がぎこちない音声で声をかける

「どうなっている？俺は確かにランダムで転送したが、海鳴市に戻ってくることはありえないはずだ」

超長距離転移とは結局、世界間の瞬間移動みたいなものでA地点からB地点、又はA地点からC地点といった感じに転移する。決してA地点からA地点と言つのはありえないのである。

『ハイ。スキャンの結果。ココハ先ホドマデ主ノイタ海鳴市デハアリマセン。』

「根拠は？」

『マズ、最初ニ時代ガ違イマス。此処ノ時間軸ハ先程マデ主ノイタ時代カラ約10年前ニナリマス。正確ナ月日ハ現在6月1日デス。』

「10年前の6月1日だと!？」

「サラニ、スキャンニングノ結果。此処ノ海鳴市ハマスターノイタ海鳴市ト比較シタ結果。酷似シナイ点ガ約1、2%アリマス。以上ノ観点カラコノ海鳴市ハ並行世界ノ海鳴市ダト、ワタシハ判断シマス。

「

並行世界……それなら海鳴市から海鳴市へ転移した理由も納得できる

並行世界ならA地点からA地点への転移ではなく、A地点からA、
地点への転移となるのだから

『マスター。ヒトマズ海鳴市ノ探索ヲ行イマシヨウ。』

「そうだな……やっぱりこの世界にもはやてはいるのか？」

『ソレハ分カリマセン。シカシ、ソノ可能性ハ高イデシヨウ。』

そうだとしたら……今度こそ俺は何があっても彼女を守ろう。

管理局から与えられた力とハヤテから託された力で今度こそ……

そう心に決めた。

EP1・・・降り立つ世界〜そこは並行世界〜(後書き)

どうでしたか？

転移については作者の独自解釈です。

感想待っています。

EP2・・・邂逅、夜天の主と暁の主（前書き）

見てみたらPV7000超え、ユニーク1200超えでした……これは夢か？

なのはのネームバリューのおかげなのでしょうか？

見てくださった皆様には感謝です。

最新話を書きあがったので投稿します。

いよいよ原作キャラのはやてさんの登場です。

今後もリリカルなのは、夜天を受け継ぐものをよろしく願います

それではEP3、どうぞ！

9/10 誤字があったので修正しました。誠に申し訳ありません。

9/11 脱字と本文を一部修正しました。

EP2・・・邂逅、夜天の主と暁の主

俺は私立図書館に来ている。理由は俺のいた海鳴市とこの海鳴市の歴史や地理などに違いはないか、それと……

「ここに来れば、はやてに逢える気がしたしな……（ボソッ）」

これが一番大きな理由だったりする。

…調べた結果。俺のいた海鳴市と歴史、地形、各所の名称は変わっていない。限りなく俺のいた海鳴市と同じな世界。

俺がふと顔を上げると……

「ん〜ん〜ん〜！後もうちょっとなのに〜届かへん〜」

車イスに乗った栗色の髪に赤いバツテンの形をした髪飾りと黄色の2本のラインの髪飾りを付けた少女……俺が見間違っはさすがない。元いた世界で失ってしまった大切な妹…八神はやてがそこにいた

どうやら手の届かない場所に目的の本があるらしく、はやては必死に手を伸ばし本を取ろうとしていた

(まったく……並行世界でもはやてははやてか…迷惑をかけたくな
いからってなんでも自分一人でこなそうとする)

元の世界のハヤテも蓮に迷惑をかけたくないからとなんでも自分一
人で解決しようとして逆に蓮を心配させてしまうことがあった

(とにかく手を貸してやらないと…)

俺ははやての元へ行き

「この本か？」

本を取ってやり、はやてに手渡す

「あ、ありがとうございます。とってもろって」

「いや、目の前で本を必死に取ろうとしている姿を見せられたら助
けずにはいられないからね。他に取る本はあるかい？」

「大丈夫です。これで最後なんで」

はやてはそう言っただ冊の本を持ってカウンターへ向かって言った

.....

.....

.....

.....

.....

「すみません……買い物まで手伝ってもらった上に荷物まで持ってもらって」

本を借りた後、はやては買い物をしてから帰るといふことだったので、俺は買い物の手伝いを買って出た

「そんな、本を取ってもらったのに買い物まで手伝ってくれるなんて悪いですよ。」

「まあまあ。この際だから手伝わせてよ。あ、名前言ってなかったね……俺は運って言ったんだ」

「あ、わたしは八神はやてって言います。じゃあ、お願いします。蓮さん。」

という会話をしながら、俺は荷物を持ってはやて一緒に彼女の家へ向かった

やがてはやての家が見えてきた

「ここが私の家です。荷物ありがとございます。」

「いやいや…気にしないでいいよ。じゃあ俺はこれで……」

と俺が立ち去ろうとすると

ガシッ！……！！……！！

少女とは思えない力ではやてに腕を掴まれた

「どづしたの……？はやてちゃん」

「せつかくなんで上がってってください(ニッコロ)」

なぜだろう…笑顔が怖いぞ、はやて

「いやでも、会って間もない男を家にあげるのには「上がってってください」「……はい」

怖かった……あれは『顔は笑っているが目は笑っていない笑顔』だった
結局、俺ははやての家に上がることに

「ちょっと待っててください今お茶入れますんで」

「ああ、しかし俺を上げてよかったのか？親が心配するだろう？」

俺がそう言うとはやてのがわずかに暗くなる

「両親いないんですよ。昔事故で……」

並行世界だからもしかしてと思って聞いてみたが、やっぱり両親は亡くなっていたか

「すまない、無神経なこと聞いて」

「そんな、蓮さんのせいじゃないよ」

「それでもだ…すまない」

「蓮さん…ああもう！この話は無しや！ところで蓮さん、どこに住んでるんですか？」

「俺？最近この町に来て住むところないから、野宿（予定）」

「野宿！？ダメやそんな風邪引いてまう！！」

野宿（予定）だと言っただけはやてに怒られた…：まあ優しいはやての事だから何となくこの展開の予想は付いていたが…

「いやでも…ホテルに泊まるうにもそんなにお金ないし…」

「それでも野宿はダメや！」

「しかし、そうなる俺はどこで過ごせばいいんだ？」

その時はやては『いい案を思いつきました』みたいな顔をして俺を

見た…なんかいやな予感がするようないような…

「そや！蓮さんこの家に住みませんか？」

なんてことを言い放ちました。並行世界の我が妹よ…もう少し人を疑ってください…orz

「年頃の女の子がホイホイ男を住ませるのはどうかとおも」蓮さんはそういうことする人なん？」……断じてしない」

いくら並行世界とはいえ、自分の妹に手を出すバカがどこにいる

「ほんなら大丈夫やん！……それとも嫌なん？」

はやてが上目で聞いてくる

世界は違ってても我が妹だよ……こうなったらテコでも意見を変えな
いだろう

「分かった。降参だ」

俺は両手を上げ、降参のポーズを見せる

「これから世話になるよ。はやてちゃん」

「よろしくな。それと「ちゃん」付けはやめてください。もう蓮さんと私は家族みたいなもんですから」

「わかった。じゃあ“はやて”。これでいいか？俺のことも」さん
付けじゃなく好きに呼んでいいから」

「じゃあ……“蓮兄い”って呼んでもいい？」

偶然か必然か今はもういない妹の呼び方とまったく同じだった

「ああ…構わない。んじゃ、家族になった挨拶代りに俺が夕食を作ろう。」

「え、そんな悪いよ」

「気にするな。ほら、リビングで待ってな」

「じゃあ、おねがいな、蓮兄い。」

「任せろ。」

そう言って俺は料理に取りかかった

闇の書覚醒まで……あと3日

EP2・・・邂逅〜夜天の主と暁の主〜（後書き）

作者「どうだったでしょう？」

蓮「おい。なんだこのあとがき」

作者「いや、原作キャラのはやてさんも出てきたし、こんなあとがきもいいかなって。」

はやて「なるほどなあ〜所で作者さん。話の展開とか、蓮兄が私の家族になる話とか結構強引なところとかあらへん？」

蓮「それは同感だな…どうしてだ作者？それがお前の限界か？」

作者「すいません。それが私の限界です。」

蓮「そうか…ダメ作者め。この作品を読んでくれた皆さん。どうかこのダメ作者を許してやってください」

はやて「ください」

作者「お前らなんか嫌いだ〜〜〜」

ダダダダダダダダダ！！！！（ものすごい勢いで作者が走り去る音）

はやて「行ってしもつた……」

蓮「まあいいか…次の更新はいつだろうな？」

はやて「わからんなあ〜作者さんはテンションが高いと執筆が進む
人やかなあ〜」

蓮「気長に待つしかないな…」

はやて「そやな。」

2人「それでは次回をお楽しみに〜」!

EP3・・・誕生日前日〜出会う暁の主と魔王の母〜(前書き)

PV10000を突破していました。

こんな作品を見てくださった皆さんに感謝です。

それではEP4どうぞ！

会話文の中に「〜〜」と書かれています。

これは念話による会話です。

9/26念話の表記を「〜〜」から「〜」に変更しました。

EP3・・・誕生日前日、出会う暁の主と魔王の母

俺がはやての家に世話になって2日が立った明日は6月4日…そう
闇の書覚醒の日だ。

はやての家に世話になるその日のうちに闇の書の有無は確認済みだ

(やはり闇の書の覚醒は确实だな…はあ…これからが大変だ 主…
どうした?)

突然暁の書が念話で呼び掛ける

やはり主は闇の書が覚醒したら、管理局と敵対なさるのですか？

気になっていたAIの言語機能を改良したおかげか、スムーズに会
話ができるようになったようだ

ああ…どちらにしても闇の書が覚醒したら、いずれ守護騎士達が
はやてを助けるために行動するだろう、俺も少しではあるが手助け
をするつもりだ……とここで、書の中のシグナムたちの様子はどう
だ？

やはりショックが大きかったようです。シグナム、シャマル、ザ

フィーラは落ち着いてますがヴィータとリインフォース？がシヨックが大きく、塞ぎこんでいます

こればかりは時間をかけるしかない。

はい…

暁の書との念話を終え、俺ははやてに声をかける

「なあ、はやて、はやての誕生日っていつだ？」

当然はやての誕生日は把握しているが、この世界での俺ははやての家の居候なのだ。こうやって知らないふりをして聞くしかない

「私の誕生日？明日やけど？」

「なんでそれを早く言わない!？」

知ってたけど知らないふり……結構大変だな

「ゴメン……忘れてたんよ…」

自分の誕生日忘れんなよ…まあ元の世界のはやては俺がいたから俺が祝ってたけど、この世界は一人だったから無理もないか……

「ちょっと出かけてくる。」

そう言っつて俺は席を立つ

「ちょっと蓮兄い！……行っつてもうた……」

後ろではやての声が聞こえたがここはスルーしよう

.....

.....

.....

.....

.....

俺は家から出て商店街へ向かう。なぜっつて？はやてのプレゼントとケーキを貰うからに決まっつてるだろっ！

お金は問題ない。バイトしたから

え？戸籍の無いお前がなんでバイトできるのか？

…ふっ日本のセキュリティって甘いよね。暁の書のサポートを受けながらハッキングして戸籍を偽造するのがこんなに簡単なんて

その後、日雇いのバイトで金を稼いだ。

…俺はいつたい誰に言ってるんだ？

まあいいか…気を取り直していこう。はやてのプレゼントは既に購入済み、後はケーキだ。ケーキと言えばあそこしかないだろう。

俺は足早にある場所に向かった

〈喫茶翠屋〉

ケーキと言ったらここだろう！

ご存じの通り、未来の魔王こと、高町なのはの両親が経営している喫茶店…翠屋だ。

カランコロン

「いっしょにしゃいませ」

中に入ると桃子さんがカウンターにいた。当然なのははいない。平日と言うのもあるが、できれば闇の書事件が始まるまでできるだけ接触は避けたい。

そのためなのはがない時間帯を狙ってきたのだ。

「すみません。チョコレートのホールケーキください。誕生日のプレート付きで」

はやてのケーキの好みは事前（昨日）に把握済みだ！

「あら、妹さんか弟さんの誕生日ですか？」

「妹の誕生日なんですよ。義理ですけどね…あ、名前ははやてをお願いします。」

「はい。はやてちゃんですね。はいどうぞ。お会計は〇〇円です。」

俺はお金を払い

「それでは……」

「うふふ、また来てくださいね。お待ちしてます。」

桃子さんの台詞を聞いた後、俺は翠屋を出た。

EP3・・・誕生日前日〜出会う暁の主と魔王の母〜（後書き）

作者「はい。今回は高町家で一番怖いのではないか？魔王の母親、桃子さんの登場です。」

なのは「私は魔王じゃないよう〜」

作者「おや？なのはさんどうしました？なのはさんの登場はしばらく後ですよ？」

なのは「ええ！？？そうなの？」

作者「はい。この話はしばらくは八神家メインですので……」

なのは「うう……原作では私がヒロインで主人公なのに……」

作者「こらこら……メタな発言はやめなさい。」

なのは「ところではやてちゃんと蓮さんは？」

作者「呼んでない。あいつら俺の事馬鹿にするんだもん（イジイジ）」

なのは「えーと……作者さんが落ち込んでしまいましたので今回はこれにて……」

作者「グスン……この作品を読んでくださった皆様。心から感謝します。」

なのは「次回もお楽しみに！」

EP4・・・誕生日前夜、覚醒する闇の書（前書き）

今回も日常編です。

ようやくヴォルケンス登場です。

それではどうぞ！

9 / 1 3 本編の一部を大きく修正

9 / 2 6 本編の一部修正

EP4・・・誕生日前夜へ覚醒する闇の書へ

へ八神家へ

「1日早い誕生日おめでとう。はやて」

「ありがとう蓮兄い。せやけどまさか、あの後すぐこれの準備のために出かけるとは思わなかったわ……」

はやての言うこれとはそうはやての誕生日パーティのことだ

「準備と言ってもケーキ買ってプレゼント買って簡単にリビングを飾りづけしたただけだが……」

「それでも嬉しいよ蓮兄い。今まで私一人で誰も誕生日祝ってもらえなかったから」

平静を装ってはいるが、目尻に涙ためてちゃ意味ないぞ、はやて

「安心しろ。俺がいるうちは嫌がっても毎年祝ってやるから」

そう言いながら俺ははやての頭をなでる

「クス、ありがとう蓮兄い…」

「ほら、冷めないうちに料理食べちゃおうぜ」

「そやな。」

「いただきます!」「」

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

料理も食べ終え現在2人でケーキを食べている

「あ、そうだはやて。プレゼント買ってきてたの忘れてたよ」

「プレゼント！？ほんま！？」

「おう、ちょっと待ってる」

そう言って俺はプレゼントを取りに部屋に戻る

「はやてside」

「はい、はやて。」

リビングに戻ってきた蓮兄いはわたしの手に収まるくらいの大きさのラッピングされた小箱を渡してくれた

「ありがとな、蓮兄い。……開けてもええ？」

「ああ、いいぞ」

わたしは早速包みを開ける

「わぁ……蓮兄いこれ……」

箱に入っていたのは翼を模した銀のネックレス裏側には小さく『H
yate・Ygami』と彫ってあった

「いいの？こんな高そうな物貰って」

私はつい聞いてしまう

「当たり前だろ。つけてくれよ、はやて」

蓮兄いに言われて私はネックレスを付ける

「ど、どう？蓮兄い／＼似合ってる？」

うう…今までネックレスなんて付けたことないからちよっと恥ずかしい／＼

「おお！似合ってるぞ、はやて」

「／＼／＼／＼／＼／＼／」

蓮兄いが笑顔でほめてくれて、嬉しさと恥ずかしさで顔が真っ赤になっ
てまう

両親がいなくなっ
てしまっ
てからは誕生日なんて祝ってなかつたか
ら……

『安心しろ。俺がいるうちは嫌がっても毎年祝ってやるから』

元々はわたしが少し強引な感じで蓮兄いに住んでもらったけど、蓮兄いは嫌じゃないと言ってくれたし……

私、蓮兄いが家族になってくれて（厳密には違う）ほんとに嬉しい
わ。

.....

.....

.....

.....

.....

「おお、はやて湯加減はどうだった？」

「ほんまにええの？蓮兄いまだ片づけとるのにわたしだけ先にお風呂に入って……」

ケーキを食べ終わった後、蓮兄が

「片づけは俺がやっとかからはやては先に風呂に入ってきたな」

と言われ私だけ先にお風呂に入り、今上がってきたところだった。

「気にするな、今日…じゃないけど、はやては誕生日パーティーの
主役なんだから。」

「でも…なんか悪いわ」

「まあまあ…もう遅い時間だし、はやては寝た方がいいぞ？もう片
付けは終わったし、俺も風呂に入って寝るつもりだから」

蓮兄いは時計を指して言うので私も時計を見る

時計は今ちょうど11時を指していた

「そつやね。ふあ〜なんやそつ言われたら急に眠くなってきたわ
……」

「パーティの時、結構はしゃいでいたからなはやては…知らず知らずのうちに疲れがたまっていたのだろう。」

「そやね。じゃあ、おやすみな〜蓮兄い〜」

「ああ…おやすみ、はやて」

その後すぐに私は部屋に戻ってネックレスを外した

(久しぶりやな…誰かからプレゼントもらうの……)

そのままどれくらいネックレスを見つめていただろうか、机の上の時計を見るといつの間にか日付が変わろうとしていた。

急いで寝なきや…そう思いながら私はネックレスを机の上において布団に入り、明日に備えて寝ようとする、視界に光が入った。

今は電気を消して真っ暗なんやけど、何で？

不思議に思いながらも光が発する方に視線を向けると、そこには怪しい光を放つ一冊の鎖で繋がれている本があった。

あれは確か、私が小さい頃からあった本や。

いくらやっても鎖が干切れんかったからそのまま置いてたけどなんやの、この光は？

そして本の鎖が干切れてページが捲れて行くのを見て、わたしは恐怖を感じて後ずさる。

やがて捲れて行くページが止まり、その瞬間光が膨張し始め……

『起動』

本がいきなり喋ってその言葉と共に閃光が部屋を満たした。

あまりの眩しさに私は目を閉じて光が収まるのを待った。

やがて光が収まり目を開けれる状態になったから目を開けたんやけど

そこにはさっきまで光ってた本とは別に、私に向かって片膝をついている四人に人が居た。

「我ら、闇の主に集いし騎士」

桃色の髪をポニーテールにした凛々しい女性が最初に喋り。

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

金髪のショートボブが似合う女性がそれに続き。

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

蓮兄いより少し背が高い大人の男性が更にそれを続ける。

「我らが主、闇の王の下に」

最後に私と同一年か、それより少し下の女の子が喋り話が途切れる。

「……」

私は突然起きてしまった出来事についていけず、固まってしまふ。

ダダダダダダ！！バンツ！

「はやて！どうした！？なんかはやての部屋がものすごく光ってたけ……ど……」

そんなとき蓮兄いがものすごい勢いで私の部屋に入ってきた……

.....

.....

.....

.....

.....

（蓮side）

「ふう〜さっぱりした〜」

はやてが部屋に戻った後、俺は風呂に入ってきた

主…もうすぐ日付が変わります。

もつか…ついにはやての家族が来るのか…

現在時刻は11時59分…闇の書覚醒まであと1分になっていた

主、主もれつきとしたはやて嬢の家族ですよ。

まさかデバイスに諭される日が来るとは……

とその時日付が変わり、はやての部屋からここからでもわかるくらい
の光が漏れる

「うわっ！眩しっ!？」

前の世界の時は俺は寝ていたため、闇の書覚醒の瞬間のことはハヤ
テに教えてもらったただだったが、ここまで眩しいなんて……

主！行きましょう！

そうだな…ああ、それと俺の魔力にリミッターをかけておいてく
れ、Dランクくらいまで

なぜです？主

でかい魔力のせいで守護騎士ともめたくない。有事の際までリミ
ッターは掛け続けてくれ

わかりました。主

そう言って俺ははやての部屋に駆け込む

ダダダダダダ！！バンツ！

「はやて！どうした！？なんかはやての部屋がものすごく光ってたけ……ど……」

俺が部屋に入るとポカーンとした顔のはやてと守護騎士たちの姿だった

EP4・・・誕生日前夜、覚醒する闇の書（後書き）

蓮「はい。と言うことでいかがだったでしょうか？」

はやて「ついにシグナムたちが出てきたなあ」

蓮「そうだな…あいつらも次の話位にこのあとがきに出るかもな」

はやて「そう言えば作者さんは？」

蓮「にげた。そんなに俺にボロクソ言われたのが効いてるらしい」

はやて「そう言えば、本編でわたしが蓮兄いのプレゼントで顔を赤らめてたけどフラグ？」

蓮「作者曰く、ヒロインははやてとなのはのどっちからしいんだが、はやてエンドにしたかったらはやてから動かないとダメとか言ってたぞ。」

はやて「どういうこと？」

蓮「俺がはやては抱いている感情は妹としての感情だからはやてからアプローチしないとはやてエンドは無いらしいって作者が言った。」

はやて「わたしのことはわかったけどなのはちゃんがヒロインな理由は何なん？」

蓮「それに関しては作者が言うには俺と元の世界のなのはその関係

に設定があるらしい、それに関しては後々本編で明かすらしい。」

はやて「そうなんや〜そう言えば作者さん番外編作ってるらしいで〜」

蓮「ああ…かなりやりたい放題の番外編らしい…」

はやて「読んでる人達から苦情来るんじゃないん？」

蓮「覚悟の上らしいぞ」

はやて「いつ投稿されるかわからんけどな〜」

蓮「まあ…読んでくれる人達には待ってもらおうしかないな…」

はやて「そうやな…」

蓮「それでは今回はここまでか？」

はやて「次回は確かシグナム達と私達の買い物の話やな…」

蓮「そうだな、皆さまからの感想、ご指摘待ってます」

蓮・はやて「次回をお楽しみに〜!!」

EP5・・・買い物はやてと運と夜天の守護騎士(前書き)

やっと書きあがったので投稿します。

それではどござー！

EP5・・・買い物はやてと蓮と夜天の守護騎士

〔蓮side〕

大変だった……

あのあと何とかはやてと騎士達を落ちつけ、詳しい話は夜が明けてからだと言って騎士の皆に空き部屋を提供し、あわただしい時間が終わった

「それじゃあ……まずはお互いに自己紹介からだな……俺は蓮。」

「わたしは八神はやてです。」

「シグナムです。よろしくお願いします。」

「……ヴィータ。」

「シャマルです。」

「ザフィーラ……」

……なぜか騎士達の紹介がそっけない

「しかしなあ、この本、魔法の本やったんや」

はやては闇の書を縦にしたり横にしたりしながらへへやらほへとか言っている

するとはやては突然シグナムたちの方を見てから戸棚に移動。そこからメジャーを取り出した…

「とりあえずはみんな衣服やら何やらを買っことやな！」

「」「」「は？」「」「」

守護騎士の皆さんの頭の上にハテナマークが浮かぶ

「だってみんな…これから先そんな格好で街中歩く気なん？」

確かにはやての言う通り、守護騎士の皆はお世辞にも普通の格好とは言えない。

「今回は服買いに行くからその格好でもいいけど、いつもいつもそ

の服じゃおかしいやん。」

はやての言葉を聞いてザフィーラ以外の守護騎士達がバツの悪そうな顔をする

「そうと決まったら早速、買い物行くでえ！」

はやてがそう言うので俺ははやての車椅子を押し、シグナムたちは俺の後ろをついていく、

ついでにザフィーラは狼形態になってもらった。

流石に町の往来を犬耳生やした男が歩くのはなかなかシユールな光景だ。

そうして俺達は隣町の大型スーパーにやってきた。

スーパーに向かう途中はやてや俺の呼び方をどうするかをはやてが言いだし、結果…

シグナムは『主はやて』、『蓮』。

ヴィータはまだ俺のことを警戒しているのか『はやて』、『蓮』。

シャマルは『はやてちゃん』、『蓮さん』。

ザフィーラは『主』、『蓮』と呼ぶことになった。

そしてスーパーでの買い物が始まった…

此処からしばらく音声のみでお送りします

「蓮兄い、こっちとこっちどっちがええ？」

「そっちのチェックの方かな……」

「は、はやてちゃん…服は自分で選びますう」

「いや、わたしが選ぶ。これは譲れんなあ。」

「じゃあなんで蓮さんに聞いているんですかあ」

「いや…意外と蓮兄いってセンスいいから、それと蓮兄いが女物の服見て少しでもいつもと違った一面が見れるかも知れんやん。」

「そんな理由なんですかあ」

「まあええやん。あ、蓮兄い！シグナムの服な、こっちとこっちどっちがええ？」

「あ、主!?!今までシヤマルの…って!なんですかその服は!?!」

「シグナムに似合っと思っよ〜」

「似合っってそんな…む、胸が…その…」

「両方ともずいぶん胸が強調されるデザインですね…」

「いいじゃん。おっぱい魔人のリーダーにはぴったりだぜ!」

「ヴィータ!?!」

「うーん…どっちかって言うと左の方かな…」

「蓮も普通に答えるな〜!」

「あははははは」

「しゅぶぶぶ」

「主！ヴィータ！シャマルまで！」

蓮…俺の服も見繕ってくれないか？人型の時に着る服がないというのもあれだからな

いいぞ、ザフィーラ。はやて、少しザフィーラと一緒に男物の服を見てくるがそっちは任せていいか？」

「ええで蓮兄い。さて、シグナム、ヴィータ、シャマル……ここからもずっと私のターンや！」

「蓮さん！助けて（くれ）（ください）！……」

「スマン、無理だ。頑張ってくれ……はやて、ほどほどにな。」

「蓮さんそんなあっさり諦めないで！」

「ほら、いくでー！シャマル。」

「………いくか、ザフィーラ。」

ああ、そうだな……

.....

.....

.....

.....

.....

ある意味はやての独壇場とも言える守護騎士の服選びが終了し、スパー内のレストランで昼食を取った後、今は守護騎士達の日用品を選んでいる最中だ。

その時……

「どうした？ ヴィータ、何見てんだ？」

ヴィータが商品棚の一角を見つめていた。

そこにはウサギのぬいぐるみがあった

(…あれは確か『のろいうさぎ』だったか？俺の世界のヴィータも好きだったな……)

「ぬいぐるみか…ヴィータ欲しいのか？」

「べ、別に欲しくなんかねえよ！」

そう言うとヴィータははやてたちの方に行ってしまった

俺はヴィータが見ていたぬいぐるみを手に取り……

……

……

……

……

・

「蓮兄い、その紙袋どうしたん？」

「ん？ちよつとな…ああ悪い、ヴィータ。そろそろシャマルと車いす押すの替わるからこの袋持ってきてくれるか？」

「なんであたしが持たなきゃなんねえんだ。」

「頼むヴィータ。」

「……しょうがねえな……」

「じゃあ、はい。」

俺はヴィータに袋を手渡す

「じゃあシャル。替わろう」

「いいんですか？私なら大丈夫ですよ？」

「いいから、いいから。シャルもいろいろ見てみなよ」

「はあ……そうですね。蓮さん。」

俺はシャルからはやての乗った車いすを替わる。

その後、シグナムたちの食器などを買い、ついでに夕食の買い物
済ませ、その帰り道……

「なあ蓮、あたしはいつまでこの袋持っていればいいんだよ」

「ああ、そうだったな。ヴィータその袋開けてくれないか？」

「はあ？なんで？」

「いいから」

ヴィータがぶつぶつ言いながらも袋を開けて中身を取り出す。

その中には……

「あ…蓮、これ……」

スーパーの中でヴィータが見ていた『のろいうさぎ』のぬいぐるみ
だった

「ヴィータこれ物欲しそうに見てたからな、買ったんだよ。嫌だっ

た？」

「いや、その…」

ヴィータは急に渡されたぬいぐるみを抱えながら素直に喜んだらしいのかわからない顔をし

ている。

「よかったやん、ヴィータ。ちゃんと蓮兄いにお礼言っんやで。」

そこにはやてはニコニコしながらヴィータを見て言った

それを聞いたヴィータは照れたような顔をしながら

「蓮……その…ありがとう…」

とぬいぐるみに顔を若干、埋めながら言ったのだった。

「そうか…大事にしてやってくれ」

「うん！」

ヴィータは満面の笑顔を見せ、ぬいぐるみをしっかりと抱えてはやての元へ走って行った。

EP5・・・買い物はやてと蓮と夜天の守護騎士（後書き）

作者「はい！買い物編でした。」

蓮「やっと復活したか、作者。」

はやて「久しぶりやな〜」

蓮「しかしいつまで日常編続くんだ？タグにチートって書いてあるのに戦闘シーン皆無じゃないか……」

作者「もうすぐです。もうすぐ、シグナム達が蒐集に動くはずですよ！」

蓮「まだはやて倒れてないし、それ以前に俺の説明が先だろう……」

はやて「おまけに番外編も書いてるんやろ？大丈夫なん？」

作者「大丈夫です！」

はやて「ほんま？」

作者「大丈夫……だと思っ……」

蓮「自信なさげな発言だな……」

作者「……グスン……」

はやて「あ、いじけた」

蓮「最近このパターン多いな。」

はやて「次回の話はシグナム達と蓮兄いの話し合いの話やな。」

蓮「そうだな…て言うかこの話は外せないだろう…」

作者「感想、ご指摘お待ちしております。」

蓮・はやて「次回をお楽しみに〜!!」

EP6・・・尋問？〜守護騎士と蓮〜（前書き）

作者「やっと更新です!！」

蓮「やっとか…その割には短いな？」

作者「おのれ!八神蓮!!!ここ（前書き）でも俺に文句を言つか!」
「？」

蓮「はいはい。それではどげぞー!」

作者「俺の台詞を取るなあ〜!！」

EP6・・・尋問？～守護騎士と蓮～

（蓮side）

買い物を終えてその夜……え？時間が過ぎるのが早い？そうかもしれないけどスルーしよう。

はやてはすでに自室で夢の中……俺と守護騎士達はと言いつつ……

「蓮…聞きたいことがある。」

「洗いざらい吐いてもらっぞー！」

「ジーーーーーーー」

「……」

「…なんだこれ？」

上からシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ（狼形態）、俺の順番である。

こうなった経緯を簡単におさらいしよう……

1、家に帰り時計を見たらいい時間だったので夕食を皆で作って食べた。(この世界でもシャマルの料理はヤバかった。死ぬかと思っ
た。シャマルに料理禁止令が発令された。)

2、夕食後、はやてと一緒に風呂に入ろうと言われた。恥も外聞もなく土下座して、丁重に断り、シャマルと入るように説得した。(やましい気持ちはないが、シグナム達の視線がきつかった。)

3、その後、皆順番に風呂に入ったりテレビを見ていたが、はやてが睡魔にK/Oされたため、はやてを部屋に連れて行き、寝かした。

4、その後、リビングに戻ると、シグナム達が俺を睨みつけ、「そこに座れ。」と言われ床に正座。

5、「蓮…聞きたいことがある。」 今ここ

……である。…意味が分からない。なぜ俺が正座させられ今まさに尋問らしきものを受けようとしているのだろうか…?

「説明してやるう」

…シグナムさん、あなたは俺の心が読めるんですか？

「シャマルが主から聞いたそつだ。蓮、お前は我らが目覚める3日前にこの家に住むようになったと聞く。蓮、お前は何者だ？何の目的でここに居る？」

……なるほど、シャマルははやてと一緒に風呂に入った時にはやてから俺の事を聞いたのか……

「悪いとは思ってたんですけどその後蓮さんをこっそり調べてみたらごく僅かですが魔力の反応があったので……」

あちゃーこっちもバレてるのかぁ……リミッターかけたからDランクくらいの魔力しか感知されないと思うけど……

「蓮！どうなんだよ！？まさかはやてに何かしようとしているのか！？」

「落ち着け、ヴィータ。それをこれから蓮に聞くんだ。」

「……分かった。」

ヴィータは自分のデバイスまで取り出すほど怒りの感情を露わにしていたが、シグナムに止められ、下がった。

「……で？まず俺に何を聞くんだ？シグナム」

「では聞こう…蓮、お前は何者なんだ？」

改めて、シグナムが質問する。

「何者と言われても…はやての家に居候する男としか言いようがないんだが……」

「居候って……いいのかそれで……」

さっきまで警戒一色だったヴィータの顔が呆れ顔になる

「……まあいい、それで蓮。お前の目的は何だ？」

「目的？」

「惚けるな！言え、蓮！主に何をやる気だ！？闇の書が目的なのか！？」

シグナムの声が荒くなる。しかし、この世界のシグナム達ははやてを信用…いや信頼するのが早いな…

前の世界でもはやてとシグナム達の中が馴染むのは割と早かったが
…今回はまだ出会って1日経ってないぞ？

「目的……そんなものはない。」

実際は『はやてを守る』という目的はあるが、会って間もない…それ
れもはやてとは血の繋がりもない男がそんなことを言っても、かえ
って話がややこしくなるだけだ。

「なんだと…？」

「そもそも俺も偶然、はやてと出会ったんだ。闇の書の事なんては
やてのところに厄介になるまで、俺は知らなかった。」

「その言葉を信じるといふのか…？」

「ああ……」

「何を根拠に!？」

「根拠はない。」

「貴様！！」

ついにシグナムがレヴァンティンを起動させ、俺に切っ先を向ける。

「……けど、もし俺がはやてに危害を加えるような素振りをしていると判断した時は…遠慮なく俺を討つといい。」

「…分かった。信じよう」

そう言うとシグナムは剣を引く

「シグナム！いいのかよ！？」

「ああ、蓮の目は嘘をついていない。それに蓮が言ったように主に何かしようなものなら、その時はわたしが蓮を切ればいい」

「そうかよ。」

ヴィータが食ってかかる。が、シグナムの言葉で何とか納得したようだ。そっぽを向いてしまった

「今日のところはこの辺で終わりにしましょう。もうこんな時間で
すし……」

そこに今まで口を出さなかったシャマルが口を開く。

シャマルに言われ時計を見ると、既に日付は変わっていた。

「そうだな…明日も早いだろうからな」

シグナムが言うと皆部屋に戻って言った。

俺も部屋に戻ろうとした時、ザフィーラが傍に寄ってきて……

「蓮…先程の言葉、信じていいんだな？」

「ああ…俺ははやくに危害を加えない。誓ってもいい。」

「分かった。その言葉信じよう。」

「ありがとう、ザフィーラ。」

「……………」

ザフィーラはそのままリビングの隅に横になり眠ってしまった

魔法の事などはしばらくは黙ってるしかないな…一度に話しても話が拗れるだけだからな

願わくば、はやてに何事も起きなければいいんだけど……

闇の書が起動した時点でその可能性は低いだろう…

その時は俺がはやてを守らないと……………」

EP6・・・尋問？〜守護騎士と蓮（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

蓮「シグナム達のはやてに対する信頼がやけに厚いな……原作でもあそこまでの信頼関係はそれなりに時間がかかったはずだぞ？」

はやて「この話やとまだシグナム達が出て来てからまだ1日経ってへんで？」

作者「言い訳させていただくと、原作でもあった通り、今まで道具同然に扱われていた守護騎士達がセクハラまがいとはいえ、この話の前の話でさんざんはやてとの親睦を図り、ヴィータは蓮からとはいえプレゼントをもらっているのです、初めて家族のように振る舞うはやてを信頼した。と言うことです」

はやて「なるほど……ところで本編でも書いてたけど、シャマルの料理はヤバかったなあ……」

蓮「あれはヤバかった。並行世界だからもしかしたらと思っただけとそんなこと無かったなあ……」

作者「どんな味だった？」

蓮「昔、ハヤテが見ていた女の殺し屋が作る料理みたいなのを見た目だけまともにしたようなイメージをしたらうと助かる。」

はやて「それなんてポイズン ッキング？」

蓮「え？はやて知ってるの？」

作者「裏設定ですが、この作品のハヤテさんとはやては弱オタです。

」

蓮「マジで!？」

作者「マジです。」

はやて「所で作者さん。次回は？」

作者「次回は時間が進んでついにシグナム達が蒐集を開始する予定。

」

蓮「ようやくか…」

はやて「それではみなさん。感想、ご指摘お待ちしております。」

作者・蓮・はやて「」「次回をお楽しみに〜!!」「」

閑話 やがみけ（前書き）

はやて「この物語は八神家の日常を淡々と描くものです。過度な期待はしないでください。」

はやて「あと、部屋は明るくして、画面から少し離れてから見やがってください。」

作者「みなみけ乙」

閑話 やがみけ

閑話 第1話

『はやてと蓮と守護騎士達〜これがやがみけの日常〜』

今回の話は6月から10月までの八神家の日常の一部です。

『守護騎士&蓮〜石田先生と出会う』

ずっとはやてのターンだった八神家の買い物の日翌日……

はや「あ、今日病院で検査受けなあかんやった……その時、私の担当の先生に皆のこと紹介したいから皆ついてきてな？」

シグ「はい。」

シャ「分かりました。」

ヴィ「はい！」

ザファイ」……」

蓮「了解だ。はやて」

病院にて……

はや「石田せんせえ〜こんにちは〜」

石田「あら、はやてちゃん。いつもより早いわね〜……ところではやてちゃん、後ろの人たちは誰なの？」

石田先生が蓮と守護騎士達を訝しげな目で見ている

はや「石田先生。紹介します。こちら、外国から来た私の親戚なんです。」

石田「親戚？」

はや「はい。私が一人で住んでるって言うのを知って、誕生日に来てくれたんです。それから皆で内に住んでいますよ。」

石田「そう…はやてちゃんがそう言うなら…はじめまして、はやてちゃんの治療を担当している石田です。これからよろしくお願ひします。」

シグ「シグナムです。よろしくお願ひします。」

シャ「シャマルです。」

ヴィ「ヴィータです。よろしく…」

蓮「蓮です。石田先生、今後ともよろしくお願ひします。」

はや「あと、皆と一緒にザフィーラって言うおっきな犬も来たんですよ。今日は家でお留守番ですけど…」

石田「そう…じゃあ、ちょっと早いけどはやてちゃん。いつもの検査しちやいましょうか」

はや「はい。」

これが石田先生と蓮達の最初の出会いでした……

『シヤマル…料理教室に通う』

ある日の晩…

シヤ「はやてちゃん！私、お料理教室に通うことにしました！」

突然シヤマルが食事中に言った。

はや「どうしたん？シヤマル。急に…」

シグ「シヤマル、お前は確か主はやてから料理は禁止されただろう？」

シヤ「だからです！私も料理ができるように、お料理教室に通うんです…！」

これでもかと言っくらい真剣なシヤマル

はや「シヤマルがそこまで言っならええよ。頑張ってな。」

シャ「はい！」

……シャマルのお料理教室デビュー初日

P i R U R U R U R U R U ! P i R U R U R U R U R U !

はや「はい。もしもし、八神です。あつ…シャマル？どないしたん？……え？生徒さんも先生も倒れた！？」

蓮「どうした、はやて？」

はや「蓮兄い、なんか…シャマルの行ってる料理教室の人たちが皆倒れたって……」

蓮「はあ！？」

はや「シャマル！救急車は呼んだん？私達もすぐ行くから、待っててや！」

……その後……

はや「本当に申し訳ありませんでした……」

救急隊員「いえ、運ばれた人たちは命に別状は無いそうですので、しかし、どういう調理をしたら料理から“虹色のガス”が出るんでしょうね……」

これ以降、シャマルは家の中でも外でも料理関係の一切の行動を禁止させられた。

『シグナム達の騎士甲冑』

はや「騎士甲冑？」

ある日、シグナムがはやてに言った

シグ「はい。私達は武器は持っているのですが…甲冑は主から賜らなければなりません。」

はや「けど…どうするんや？その…騎士甲冑って」

シャ「大丈夫ですよ。形をイメージしてもらえばあとはわたし達が

自分の魔力で作りますから。」

はや「けど…私は皆を戦わせたくは無いし……あつ、服でええか？
騎士らしい服。」

シグ「構いません。」

はや「そうか、そうか…くっくっく……」

シグ「あ、主？」

今、はやてはものすごく怪しい笑みを浮かべている。

具体的には某運命に出てくる騎士王にどんなコスプレをさせようか
考えている魔術師の若奥様な感じである。

はや「私のイメージでシグナム達の服が決まるのかあ…やっぱりシ
グナムは胸を強調した感じでヴィータはゴスロリとか合いそうやな
…シャマルは男のロマンなナース服…いや、意表についてチャイナ
も…ザフィーラはベジー…の戦闘服でええか…」

蓮「騎士甲冑は皆で考えよう。はやて一人だとどんなのになるか想
像したくない…」

シグ「そうだな…私は今回ばかりは蓮に同意だ。皆もそれでいいか？」

ヴィ「ああ……」

シャ「賛成です……」

ザファイ「……（首を縦に振っている）」

その後、何とか皆で話し合い、何とか騎士甲冑のイメージが決まった。

途中はやてがブーブー文句を言っていたが、蓮が却下した。

『はやてとすずか』

はや「ただいま〜」

はやてとシャマルが病院から帰ってきた

蓮「お帰り。遅かったね？」

シャ「病院の帰りに図書館に寄ってきたんです。」

蓮「そうか、でもこれからはとりあえず連絡を入れてくれ、ヴィー
タが「はやてが帰ってこない！」と騒いでいたから」

シャ「あ、あはは……」

はや「でな…そこで友達ができたんよ。」

蓮とシャマルの会話にはやてが割って入った

蓮「へえ、良かったじゃないか、はやて。どんな子なんだ？」

はや「すずかちゃんって言うんよ。ホントすずかちゃんとは話があ
ってなあゝ盛り上がったわゝ」

蓮「それは良かったなあゝはやて、ちなみにどんな話をしたんだ？」

はや「えっと…本の話とか猫の話とか…後、アニメの話とか！」

蓮「そうか、そうか……ん？アニメ？」

はや「蓮兄い……もしかしてアニメ見ないん？」

蓮「いや……まったく見ないわけじゃない。」

はや「そっか〜じゃあ今度皆で見よう！」

蓮「そうだな……（俺の世界のハヤテもアニメが好きだったが……こんなところまで似てなくても……）」

蓮はそう思いながらはやとたちと一緒にリビングに歩いて行った

閑話 やがみけ（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

蓮「おい、作者。」

作者「なんだ？」

蓮「なんでこんな小ネタに1週間近く時間がかかった？」

作者「元々EP8の最初の方にこれがあったんだが、あまりにも内容を端折りすぎてよく分からない状態だったから書きなおした。」

はやて「すずかちゃんがオタクになつとるけど？」

作者「……やつちゃった。」

蓮「はやて「やつちゃった じゃねえ〜〜〜〜!!!!!!」」

作者「まあ、やってしまったものはしょうがない「しょうがなくなえよ」……次回はいいよシグナム達が動きます。」

蓮「やつとか」

はやて「やつとやな」

作者「それではみなさん。感想、ご指摘待ってます。」

蓮「はやて」「次回をお楽しみに!!」「」

EP7・・・ヴォルケンリッター〜全てははやくを救うため〜（前書き）

よ・う・や・く・更・新〜〜!!!!

よ・う・や・く・蒐・集・開・始・で・す。

そ・ね・ど・は・ど・し・い・ぞ〜!!

EP7・・・ヴォルケンリッター〜全てははやてを救うために〜

〈蓮side〉

例え世界が違ってても…運命とは変わらないものなのか？

なぜ、世界はこうも残酷なのだろう？

10月中ごろのある日、いつものようにはやては病院で検査を受けていた

石田先生はいつもと変わらないとはやてに説明していた

診察が終わり、はやてが診察室を出る時、石田先生は俺とシグナム、シヤマルは残るように言った。

そこで石田先生の口から出たのは俺達を絶句させるには十分な言葉だった

「はやてちゃんの足の麻痺が少しずつ上へと伸びています。このままだと内蔵にも麻痺が及んで死に至る可能性もあります。」

俺は失念していた。俺の世界でもあったではないか

壊れた夜天の書の…闇の書の呪いの事を……

俺の世界での闇の書事件が終わった後、シグナムと消えてしまった
リインフォースから聞いた。

はやての足の麻痺は闇の書が原因だと

闇の書は一定期間蒐集が行われないと持ち主のリンク コアから魔
力を吸収する。

はやての足の麻痺は未成熟なリンク コアから強引に魔力を吸収し
ていたため起きていたのだ

今までの闇の書は半分も覚醒していなかった、だからはやては足の
麻痺だけで済んでいた。

しかし、はやての9歳の誕生日に闇の書は完全に覚醒。 その時シグ
ナム達が現れた。

シグナム達は闇の書の中の『守護騎士システム』という名のプログ
ラムだ。

守護騎士と言うプログラムを維持するため、闇の書は今まで以上に
はやてのリンク コアから魔力を吸収し、リンク コアに負担を与
えていった……

その結果がはやての麻痺が広がった原因だ。

（なぜ忘れていたんだ俺は…いや、どこかで期待していたのかもし
れないな……）

ここは俺のいた世界とは違う。並行世界なんだからもしかしたらと
…俺自身、心のどこかで思っていたのかもしれない

俺は待合室ではやてと待っている。シグナム達は廊下の奥に言った
きり帰ってこない。

強化魔法で聴力を強化して耳を澄ましてみると…

「ごめ…さい…私…力じゃどう…な…ない…」

「…悔しい…我…に…で…ること……まりにも…ない…」

途切れ途切れではあるが何とか会話は拾えた

「蓮兄い？どないしたん？怖い顔して」

「いや…何でもない」

.....
.....
.....

•••

•

シグナム side

その日の夜、私達は家を抜けだしビルの上上集まった。

もちろん主はやてと蓮には内緒にしてだ

主はやてには真実を語るわけにはいかない、蓮は魔力はあるがドラック、デバイスもないから我々の今からすることは黙っていたほうがいいだろう。

「皆…分かっているな？」

「ええ…闇の書の所為ではやてちゃんが苦しんでいるなら、闇の書を完成させてはやてちゃんが真の主に覚醒すれば…」

「主の足の麻痺は治る。少なくとも麻痺の進行は止まる！」

「はやての人生を血で汚したくねえから人殺しは死ねえ……でも、それ以外なら何だってする！」

私達はデバイスを展開する。

「すみません、主……たった1度だけあなたとの誓いを破ります。」

私の言葉を皮切りに皆が甲冑を見に纏っていく

「では……いくぞ！」

私がそう言うとシャマルが転送魔法を発動させる。その時……

「待て、お前ら」

「……ッ!?」「」「」

突然私の後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

「なぜ……ここに居るんだ、蓮……」

蓮は家では決して見せない険しい表情で私たちを見ていた。

その見に膨大な量の魔力を纏わせながら……

.....

.....

.....

.....

.....

蓮side}

石田先生からの言葉を聞いた後のシグナム達の様子が違っていら
らもしかしたらと思っていたら…案の定その日の夜中、はやてが寝
静まった後、守護騎士達は家を抜けだしていた。

俺は気づかれないように後をつけると守護騎士達は町の一角のビル
の上に立ち、デバイスを展開させる。

(やはり…この世界でもシグナム達ははやてに黙って蒐集を行うの
か……)

主……やはり守護騎士達の手伝いを？…

ああ…何もできなかったあの時とは違う、それに世界は違えど管

理局の事が好きにはなれない……あそこはハヤテを……俺の妹を殺した組織だ！

主……………

そうだ、元の世界の時（あの時）とは違う。

元の世界で俺は闇の書事件には係わっていない……いや、関われなかった。

俺はその当時、シグナム達に魔法の存在をハヤテと共に聞かされはしていた。

しかし、当時の俺の魔力ランクはシャマル曰くB……今回と同じようにシグナム達は戦力にならないのとハヤテの兄である俺を巻きこまないために、ハヤテと同じように俺にも闇の書の事も蒐集の事も黙っていたのだ。

俺が闇の書事件の事を知ったのは闇の書事件が終わってから、クロノから聞いた。

クロノ曰く、いくら見家でも今回の事件の内容のすべてを聞かせることはできないと管理局内で通常公開される部分しか聞かされなかった

ハヤテから聞こうとも思ったが、ハヤテが「終わったことや、あまり蒸し返すことでもないと思うんよ。」と言ったので俺もそれ以降、闇の書事件の事は聞かなかった。

でも、今回はあの時とは違う、望んだ形ではないが俺は力を得た。

少しではあるがこれからの事も知っている。

戦う力も持っている。
デバイス

もう……何もできないでいるのは嫌なんだ。

それに誓ったんだ、今度こそ……はやてを守ると！

主！

俺が考えを巡らせていると暁の書から強めの念話がかかる

すまない、少し考え事をしていた。

それはいいのですが……守護騎士達が転移しようとしています、
どうします？

そうか……じゃあシグナム達と接触するぞ。魔力リミッターを安全
域ギリギリ……AAA+まで解放してくれ。

はい……リミッター解除します。

その言葉と同時に俺の体から高密度の魔力が溢れ出す。

「待て、お前ら」

「「「「ツ!?」「」「」

シグナム達は急に声をかけられ一斉にこちらを向く、その後俺からあふれ出ている魔力に気付き、警戒を露わにする

「なぜ…ここに居るんだ、蓮…」

シグナムが困惑と警戒の混じった表情で微かに声を絞り出す。

「お前らこそ、こんな夜更けになんだ？俺とはやてを置いてお出かけか？その割には騎士甲冑（その服装）は穏やかじゃないな…」

「ふざけるなよ蓮！なんなんだ、その魔力量は!？」

ヴィータが声を荒げながらデバイスを突きつける

「今まで隠していたが、これが俺の本来の魔力量だ。（本当はあと二つばかりリミッターがかかっているがな）」

「なぜ、今まで隠してたんですか？」

シヤマルはヴィータとは逆にオズオズした様子で聞いてくる。

「お前達と揉めるのが目に見えていたからだ。最初お前達がはやてと出会ったその日、はやての居候とういうことだけで俺はお前達に尋問紛いの事をされたんだ、高ランクの魔力を持っていたら、あの時余計にお前達と揉めていたはずだ。そうだろう？」

「蓮…なぜ今になって秘密を明かす？」

ザフィーラはシグナムほど困惑した様子ではないが、警戒だけはしっかりしている

「隠している状況じゃなくなったからだ。」

「それはどついつことだ…？」

「しらばっくれるな、シグナム。はやての麻痺…闇の書が原因なん
だろ？」

「！！蓮…お前は何を知っているんだ！？」

シグナムの顔が困惑と警戒から驚愕と敵意に変わる

「お前らの知っている事と大して変わらない。で、闇の書が原因だと
するなら病院から帰った後、お前らの様子がおかしかったのにも
頷ける。はやてを助けるために黙って闇の書を完成させるつもりな
んだらう？」

「そこまで知っているのか…それで蓮、お前は何をするつもりなん
だ？目的は何だ？」

「はやてを助ける。それが俺の目的だ。」

「「「「は？？」」」」」

俺の言葉を聞くと突然シグナム達の警戒が緩んだ……気がした

「？……どうした？変なことを言ったか？」

「いえ、この展開から言うと、蓮さんは私達を止めるのかと思っていましたから……」

「なぜだ？」

「だって！蓮さん怒ってるみたいだし……」

だんだん尻すぼみになっていくシャマル

「ああ……怒ってる」

「やっぱりい！……」

ついには涙目なシャマル

「……何を勘違いしてるのかは知らないが、俺が怒っているのは俺に相談してくれなかったからだ。」

「え？そうだったんですかあゝ良かったあゝでも相談しなかったのは巻き込みたくなかっただけなんです！」

「そうか…だがここまで来たからには俺もお前らを手伝う。何が何でもな」

俺の言葉を聞いてシグナムは完全に警戒を解く

「そうか…蓮の言うことは嘘ではないようだな」

シグナムの言葉でシャマルとザフィーラも警戒を解く

しかし……

「シグナム！いいのかよ！そんなあっさり信じて!？」

ヴィータだけはまだ納得していないようだ。

「ヴィータ、蓮は主の事を一番大切に思っていることは今まで過ごして分かってきているだろう…それに今の蓮は嘘を言っていない」

「そ、そうなんだけど……ダァゝわかったよ！蓮！！はやてを裏切ったらアイゼンの頑固な汚れにしてやるからな！」

「ああ……分かってる。安心しろヴィータ。俺は絶対はやてを裏切らない」

「だといいけどな！」

そう言うとヴィータはそっぽを向いてしまった

「さて…お前達を手伝うと言っておいてなんだが…俺は緊急時以外は蒐集には参加できない。」

「はあ！？何だよそれ！？」

「ヴィータ、話は最後まで聞け…それで運、今のどついう意味だ？」

「決まってるだろう…俺たち全員で收拾に言ったらはやてが一人になっちゃっただろう。はやてを助けたいが、はやてを悲しませるわけにはいかないからな…」

俺の言葉を聞くとシグナム達はあつとした顔をする

「忘れてたのか？」

「忘れてねえ！そつだよな！シャルル！」

「え！？ええ…もちろんよ、ヴィータちゃん。」

口ではシャルルはそう言っているが顔は明後日の方向を向いている

「そう言うわけだからよほど手こずる相手以外は俺ははやての護衛も兼ねてはやての傍に居る。いいか？」

「分かった。なら蒐集は私達がやるつ。」

「ああ…それともう一つ、蒐集はできるだけ魔法生物のみ、魔導師は襲つな」

「なぜだ？魔導師の方がページは早くたまる」

「魔導師を襲つと管理局に見つかる恐れがある。魔法生物の方がその可能性が少なくなる。」

「確かに管理局に見つかるのは面倒だからな…分かったできるだけ

魔法生物を優先して蒐集する。」

「今夜はもう遅い。蒐集は明日からにしろ。はやてには秘密にするんだからいつもと変わらない生活をしなければいけないから……」

俺が時計を見せると深夜3時を回っていた。シグナム達が家を抜けだしてここに集まったのは深夜1時だから2時間近くここに居たことになる。

「……わかった。」

シグナムがそう言ったので俺は家に向かう

それを見たシグナムも後をついてくる

ヴィータ達も渋々ではあるがシグナムの後をついてくる

この日からはやてに嘘をつき続ける毎日が始まった。

EP7・・・ヴォルケンリッター〜全てははやてを救うために〜（後書き）

蒼影「ようやく更新だあ〜〜〜！！！！」

蓮「時間がかかったな…」

はやて「何かあったん？」

蒼影「色々あったんだ」

蓮「此处でこの小説を読んでいる皆さんに間幕やがみけのネタを募集したいと思います。」

はやて「ほのほの日常系ならどんなネタでもかまいません！たとえば、やがみけで私が守護騎士達とアニメが見たい的な会話をしていたのを覚えていますか？その時見るアニメのタイトルだけでもかまいません！」

蓮「期限は特に決めません。」

蒼影「感想、ご指摘と一緒にお待ちしています。」

蓮「それでは！」

はやて「次回もお楽しみに〜！」

EP8・・・激突！〜戦地に降り立つ暁の主〜（前書き）

作者「やっと投稿！ようやく戦闘シーンです！」

蓮「ここまで来るのに長かったな……」

はやて「ほんまやね……」

作者「それではどうぞー！」

11/10：蓮の年齢の誤りを修正

EP8・・・激突！〜戦地に降り立つ暁の光〜

『激突！〜クロノ&フェイトVS蓮〜』

シグナム達が蒐集を開始して1週間近くが経ち、もう10月から1月に入っていた

「帰ってこんなあ〜」

はやてが時計を見ながらつぶやく

最近シグナム達の帰りが遅くなってきた

しかし、今回は特に遅い。夕食の時間になってもシグナムたちが帰ってこない。

おそらく闇の書の蒐集に躍起になってるのだろう。しかし、重ねて言うが今回は本当に遅いな…

蓮さん！

そこにシャマルからの念話が入った

から約束を破ってこのあたりで一番魔力がでかいこの白い魔導師を襲って……その後この魔導師にはやてと蓮からもらった帽子を壊されて、キレて、アイゼンでそいつをビルの中に叩き込んで今になっただ

「てめえの魔力をもらっ……」

そう言っつてアイゼンを振りおろそうとしたら、そいつの傍に魔法陣が浮かんで

ガキイイイイン!!

「な!?!」

あたしのアイゼンを黒い服の魔導師が服と同じ黒いデバイスが防いでいた

「なのは!大丈夫!?!」

「フェイトちゃん!?!」

「お前……そいつの仲間か!?!」

「友達だ！」

あたしはすぐに距離を取るためにビルから飛び出し、空に上がる

「ヴィータ！」

「シグナム！」

その後すぐにシグナムが合流してきた

「ヴィータ、なんで約束を破った？」

「だってよ…はやく「まで！」…っ！」

あたしの言葉を遮るようにさっきとは違う黒い服の魔導師が杖を向けていた

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ抵抗をやめて投降しろ！」

「っ！！管理局！」

あたしとシグナムが身構える

「抵抗しなければ弁護の機会があなた方にはある。武装の解除を…」

「クロノ！」

さっきの黒い魔導師も来た

「フェイトか、なのははどうした？」

「ユーノに任せてある」

「そうか…さあ、武装の解除を…」

「くっ！」

1分か2分くらいだろうか、お互いに睨み合い、いよいよ向こうが動こうとしたその時、

ヴィータ、シグナム。左右によける！

「っつー！」

その念話を聞いた途端、あたしは右にシグナムは左に飛んだ

するとあたし達がさっきまでいた場所を3本の黒みがかった紫の魔力光の砲撃魔法が通り過ぎた

「なに！？」

管理局の魔導師たちは何とか障壁を張って耐えたようだ

「まったく…夕食になっても戻ってこないと思ったたらこんなところで何をしている？」

振り返るとそこには白い服…はやてが前に和服と言っていた服に似ている服を着て、白い…前にテレビで見た狐？の仮面をかぶった男が赤い槍を担いで立っていた…

.....

.....

.....

.....

.....

〔蓮 side〕

シャマルの念話を聞いた後、はやてに皆を迎えに行ってくると嘘を
言って家を出て、シャマルのナビゲーションで転移魔法を使って封
鎖結界内に突入。

到着したときにはヴィータとシグナムはクロノとフェイトと対峙し
ていた。

「はあ……あれほど魔導師は襲うと言ったのに、しかもフェイト達
か……ともかく助けられないとな……」

俺はズボンのポケットからある物を取り出す。

銀色に翡翠色の宝石が埋め込まれている腕輪だった

「この世界では初使用だな……神威おきる。」

俺が腕輪に呼び掛けると腕輪の宝石がピコピコ点滅する

《承知した主。》

その言葉を聞いて俺は腕輪を左手にはめ、左手を上に掲げる

「神代の意思よ目を覚ませ。我は神の力を以って勝利を得る。この手に力を！」

俺が起動ワードを唱えると腕輪が強い光を放つ

「この手に力を……神威、甲冑展開！」

《了解。甲冑展開します。》

神威の言葉と共に俺の体に魔力で構築された甲冑が展開される

俺の甲冑の形は白の白衣びやくえに青みがかった黒の袴はかま、簡単にいえば巫女服を男性用にしたような服装（こういう風にしか表現できませんでした…by作者）そして正体を隠すために白い狐の仮面が現れる。

そして手には朱色の三つ又の槍…神威が握られていた。

俺は神威をシグナム達がいる方向へ向け振りかぶり、振りおろしながら念話を飛ばす

ヴィータ、シグナム。左右によける！

俺は念話が届いたどうか確認するよりも早く……

「砲・天・臥・撃ほってんがげき！！」

攻撃を放った。

3つの穂先に魔力が集まり、その後なのはのディバインバスターの半分くらいの大きさの3つの砲撃が飛んでいく

実はこの魔法、『砲天臥撃』は厳密には砲撃魔法ではない

名前をつけるなら『誘導砲撃魔法』この魔法ができた経緯はなののはの結界破壊の能力が偶然付加されたスターライトブレイカができた経緯に近い。

違いを挙げるなら、なのはのスターライトブレイカは魔法の構築式などを無視して感覚で組んだため偶然生まれたが、俺の砲天臥撃はは元々砲撃魔法として作りだした魔法だったが、

この砲天臥撃は俺が込めた魔力が足りなかったためとこの魔法を開

発中どころやらハヤテが俺がいない間に術式の一部を弄ってしまったことが原因で『誘導弾以上、砲撃以下』の魔法が偶然出来上がったのだ。

この魔法の利点は誘導魔法と砲撃魔法の特性を中途半端に受け継いだ事にある。

つまり誘導弾には劣るが、ある程度魔法の軌道进行操作することができ、さらに砲撃魔法には劣るが、誘導弾よりは威力がある。

そう言った特性を持つ魔法なのだ。

そして砲天臥撃はフェイト達との誤差を修正しながら向かっていく
どうやらシグナム達は無事に回避できたようだがフェイト達は回避
できず辛うじて防御したものの、後方へ吹き飛んだ

「まったく…夕食になっても戻ってこないと思ったらこんなところで何をしている？」

俺は神威を肩に担ぎ呆れた口調でシグナム達に声をかけた。

「その声…れ シグナム、俺との会話は念話で頼む …なぜだ？」

シグナムが俺の事をばらそうとしたので念話で話しかける

今俺の正体バラすところだっただろう…万が一に備えて俺とは念話で頼む。ヴィータにも言ってくれ

分かった…聞いていたな？ヴィータ

わかったよ…

俺達が念話を終えたころフェイト達が戻ってきた。

戻ってきてすぐクロノが俺にデバイスを突きつける

「貴様、何者だ！連中の仲間か!？」

「仲間では無い、家族だ。」

「仲間だろう家族だろうがどうでもいい！なぜ！僕達を攻撃した!？」

クロノ…何者かと聞いておいてどうでもいいは無いだろう…急に攻撃されて頭に血が上っているのか？

しかし、頭に血が上って判断が鈍っているなら都合がいい、このま

ま挑発してさらに怒らせるか…

「何故？理由は単純。家族に武器を向けている奴がいたんだ、家族を助けるために手を出すのは当然だろう？」

「僕達は時空管理局だ！！」

「時空管理局は人の家族に危害を加えても許される組織なのか？だとしたら随分腐った組織だな…」

「貴様ああ！！」

「クロノ、落ち着いて……」

完全にキレたクロノを何とか宥めようとするフェイトを見ながら俺は神威をクロノに向ける

「そんな糞ガキにはお仕置きが必要だな？」

「僕はもう14だ！」

「そうかい、ちなみに俺は21だ。年上にはキッチリ敬意を払うもんだ!」

俺はそう言いながらクロノに接近し神威を真つ向から振りおろす

「くっ!」

《ラウンドシールド》

クロノはシールドで防いだが槍の勢いは殺せずそのままビルに吹き飛ばされていく

「うわあああああ!?!」

「クロノ!?!」

「よそ見をしている暇があるのか?」

「っ!?!」

俺はすぐに動揺しているフェイトに肉薄し、神威に魔力を込める。

すると、神威の穂先に電気が集まっていく……

「電気の魔力変換!？」

「崩・纏・牙・撃!」
ほってんがげき

驚いているフェイトを余所に俺は神威を横薙ぎに振るう

《プロテクション》

バルディッシュが咄嗟にプロテクションを展開したが、咄嗟のため構成が甘かったプロテクションはあっさり破れ、バルディッシュの柄の部分に大きな亀裂ができていた。

しかも、衝撃がフェイトを襲い、フェイトはそのままクロノとは逆の方向へ落ちていった

シグナム、今落ちていった少女の方を任せるぞ

ああ…しかし蓮、お前って結構強かったのだな…

そうでもない、今回は俺が反則したようなものだ。

実際俺は元の世界でフェイト達とは数百回以上模擬戦をしていたのだ。

今のフェイトとは戦闘経験の差が違う。

クロノも経験は豊富だが俺はクロノとも模擬戦していたしな…クロノの癖や行動パターンを覚えていても不思議じゃない。

それにしても、元の世界のクロノはいつも忙しい忙しいって言うていたくせに結構模擬戦に付き合ってくれたな……

?…よく分かんがあつちの黒髪の魔導師は任せるぞ。

ああ…ところでヴィータはどうした？さっきから姿が見えないけど……

ヴィータならさっき相手の守護獣らしい奴らを発見したからってザフィーラと共にそちらへ飛んでいった。今頃は戦闘中だろう…

相手の守護獣らしい奴と言ったらアルフか？

なるほど…フェイトがやられても出てこないと思つたらヴィータ達とやりあっていたのか

分かった。シグナム、そっちを頼むぞ

ああ

シグナムは一言そう言うとフェイトが落ちた方へ飛んでいった

ちょうどその時、クロノが戻ってきた。

「はあ…はあ…はあ…」

ビルに叩きつけられたのか所々バリアジャケットが破れ、薄汚れていたクロノ自身も肩で息をしているようだ

「ようやく戻ってきたか…それじゃあ、第2ラウンドと行くか？」

俺はクロノに神威を突きつけてそう言った

EP8・・・激突！〜戦地に降り立つ暁の主〜（後書き）

作者「どうだったでしょうか!？」

はやて「わたしの出番が少ない!」

なのは「そうだよ! 私なんて初登場なのに会話が少ないよう……」

ヴィータ「つつかあたしの戦闘シーンなんて丸々カットだぞ……」

シャマル「私だって!」

ザフィーラ「俺なんか一言もしゃべってない……」

蓮「どうなんだ? 作者、なんか言うこと無いのか? ん?」

作者「すみませんでしたー!! 私めにはコレ限界なんです!」

蓮「だそうだ。みんな、こんなダメ作者を許してやってくれ」

作者「ダメ作者……」

蓮「あ? なんか言いたそうだな? 俺のデバイスも登場したからそいつでお仕置きしてもいいんだぞ?」

はやて「まあまあ蓮兄いその辺にしたらってや。」

蓮「いいのか? はやて?」

はやて「だってこれ以上読者のみなさんに作者さんのダメっぷりを見てもらうわけにはいかんやん。」

作者「はやての言葉が一番殺傷力がある…」

なのは「そう言えば作者さん。今回出てきた蓮さんのデバイスの説明明しなくていいの？」

作者「デバイスの説明はクロノたちとの戦闘が終わってからでいいだろ。その頃には蓮のデバイスのモードは全部登場するから」

フェイト「槍のモードだけじゃないんだ…」

シグナム「本編では蓮はテストアロツサ達と随分模擬戦したらしいな」

蓮「某運命のブラウニーさんと一緒だな、ランクも低いし、後の話で言うかもしれないけど俺には戦闘のセンスが無かったから、ひたすら模擬戦なんかで経験を積むしかなかったんだよ」

ヴィータ「なるほどな…」

はやて「そう言えば作者さんが新しい企画？を発表するらしいで！」

蓮「そうなのか？」

作者「はい。簡単に行ってしまうえばこの作品の主人公八神蓮とその妹のハヤテさんが他の作者のキャラたちとトークしようという企画です。」

はやて「私じゃなくて蓮兄いの実の妹の方が出るんやな…」

蓮「らしいので、もしその企画に出してもいいという作者さんはト
ークに出演させるキャラの名前と作品名をこのダメ作者の感想のと
ころに送ってください。」

はやて「あと作者さんの文才の都合上、他の作者様の出演させるキ
ャラは1話につき2〜3人くらいが限界なのでご了承ください。」

はやて「お待ちしています。」

作者「次回はクロノと蓮の第2ラウンド蓮のデバイスの第2第3の
モードが遂に!!！」

蓮「感想、ご指摘お待ちしております」

なのは「はやて・フェイト」「次回もお楽しみに!!」「」

EP9・・・圧倒く蓮の實力く（前書き）

作者「ようやく更新だあ〜〜〜」

蓮「遅いわ!」

はやて「それではどうぞ〜」

10/25誤字を修正及び内容を一部修正しました。

EP9・・・圧倒する蓮の實力

（蓮side）

「第2ラウンドだと？貴様…ふざけているのか!？」

「別にふざけてなんかいない。俺はさつさと皆を連れて帰りたい、でもおまえは俺を捕まえたい。だからお前は俺の邪魔をする、お前が俺の邪魔をするかもしれないからお前を倒す。どうだ？第2ラウンドをやるには十分な理由だろう?？」

「確かに貴様の言いたいことはわかった…けど、その人を小馬鹿にしたような物言いが僕は気に入らない!」

クロノが俺にデバイスを突きつける。

しかし、気に入らないって理由は無いんじゃないか？クロノ…

どうやら先程の挑発とビルに叩きつけられたのが効いているのだろう。

……クロノってこんなに単純な奴だったか?…まあいいか。

「何だ？管理局ってのは気に入らないから相手にデバイスを向けるのか？」

「さっきから聞いていれば管理局を侮辱して……」

「管理局だけじゃない。単純に俺は組織が信用できないだけだ。特に管理局が一番怪しそうなんで……」

実際、俺の世界では管理局は怪しいどころか完全に腐りきっていたが……この世界の管理局はどうなんだろうか……

もし俺の世界のように腐りきっていたらその時は……

俺が頭の片隅で考えを巡らせているとクロノが怒りの感情をこれでもかと言つほど露わにしていた

「管理局が怪しいだと？」

「そつだ……これ以上お前と問答をしても意味が無い。さつさとお前を倒して家に帰らなければならぬから……」

「貴様はどこまでも僕をバカにして！」

「事実だ。さて、どうするんだ？俺を捕まえるんだろ？」

「言われなくても！！」

そう言うとクロノは飛んで俺から距離を置いた

なるほどな…俺の神威の形状を見てクロノは俺のデバイスを近距離型のアームドデバイスと判断し、距離を取った。

中長距離で攻撃し、俺が接近すればクロノお得意のバインドトラップが待っているって寸法か……

俺には砲天臥撃があるが恐らくクロノは単純な砲撃魔法だと思っているだろうから、さっきみたいに不意打ちで無い限り回避は容易だと思っっているのだろう。

…だがクロノ…憶測だけで戦うのは自殺行為だぞ……

「俺が近接戦闘型の騎士だと思った時点でお前はアウトだ……クロノ・ハラオウン。神威、形状変更。形状『弓』^{きゅう}。」

《承知！形状『弓』！》

神威の音声の後、神威の形と俺の甲冑の形状が変わる。

右側の肩から下の服が消え、代わりに左肩に日本の鎧の形の甲冑が現れ右手から肘にかけて銀色の籠手が装着される。

そして左手には和弓と洋弓の中間くらいの大きさの朱色の弓が握られている。

「さて……撃ち抜いてやろう」

俺は弓をクロノに向け右手を弓に添えるようにすると、右手に魔力が集まり足元に魔法陣が浮かび上がる。

俺が弓を引くと魔力で構成された1本の矢が弓につがえられていた。

「なんだと!?!」

「さあ行け、燕よ……『飛翔燕弾』!!」

矢が放たれると矢は形を変え、鳥の……燕の形に変わり、すさまじい速さでクロノへ飛んでいく。

「なっ!早い!?!」

クロノは素早く自分の前にプロテクションを展開させるが……

パライイイインン

「何!？」

矢はそんなもの関係無いと言っているようにあっさりプロテクションを破り、矢はクロノに迫る。そして…

「爆ぜろ!」

キイイ……ドオオオオンンン!!

「うわあああああああ!!!!」

俺の言葉と共に矢は膨張し、クロノを巻き込んで爆発した。

クロノの周りを爆煙が覆い、クロノの姿が完全に隠れてしまった

「不味いな…クロノが全く見えない…爆発させたのがいけなかったか？」

俺は頭をクシャクシャと掻きながら、自嘲気味に呟く

《ブレイズキャノン！》

「！なにっ！？」

突然煙幕の中からデバイス特有の音声が聞こえたかと思うと俺に向かって砲撃魔法が放たれていた

「チィ！！神威！形状変更！形状『衣』！！」

《承知！！》

神威の言葉のすぐ後に俺は光に包まれた

.....

.....

.....

.....

.....

くクロノsideく

ズドオオオオンンン！！！！

僕の魔法があつた男に当たり、その周りが煙幕に包まれた

「はあ…はあ…直撃…これなら倒しているだろう…はあ…」

今はなつた魔法は僕の使える魔法で最も威力が高い。

いくらなんでもこれの直撃を食らつたんだ……

「相手が倒れたかどうかも確認しないで勝利を確信したようなセリフは死亡フラグだぞ？」

ゾクウツ！！！！

煙幕の中から声が聞こえた

大声では無かったが、その声は僕にはよく響いた。そして煙が晴れていく……

ウソだ！ウソだ！ウソだ！ウソだ！ウソだ！ウソだ！ウソだ！ウソだ！ウソだ！ウソだ！

僕は否定せずにはいられなかった…

だって直撃だぞ！？特に防御魔法を使った様子も無かった、なのに

……

「なんで…なんで無傷なんだ！？」

そこにはバリアジャケットの形が先程までの槍の時に似たものに変化していて、手にはさっきまでは持っていなかった布……プラチナのような色の長い布のような物で布の端には金色の大きな玉が付いた物を広げていた奴が何食わぬ顔で立っていた。

.....

.....

.....

.....

.....

蓮side

危なかったな…咄嗟に神威の防御形態である『衣』にしていなかったら、かなりのダメージを負っていたはずだ。

クロノはなのは達みたいに魔力が馬鹿みたいにあるわけじゃない。

確か、俺の世界のクロノは24くらいの時はAA+とAA-くらいだったか？それぐらいしかないのだ。

だがクロノの恐ろしいところはクロノの真面目で努力を惜しまない性格からくるお手本のような術式構成と無駄のない効率的な魔力の運用だ。

俺も魔力量が少なかったから、いかに効率よく魔力を運用するかをクロノに教えを請うたのだから…

今の砲撃もなのはデイバインバスターより魔力量は少なくせにその分、術式構成や魔力の密度が段違い。

それにトラップやフェイントが巧みなのだ。

今のクロノは頭に血が上って冷静な判断ができないから俺が有利に立ち廻ってはいるが、クロノが冷静だったらどうなっていたかは分からない……

はっきり言ってある意味なのはより相手にしたくない相手がクロノなのだ。

クロノが驚きを隠せないままデバイスを構え、言う

「どづいつことだ！？なんでシールドも張らずに無傷なんだ！？」

「なんでもなにもこの形態は防御専用だからだ」

「防御専用だと！？そんなものあるはずが……」

「無いと思っていたのはだれも思いつかなかったか思いついても誰も実践しなかったからだ。実際こうして防御に特化した形態があるのだから……さて、俺としてはこれから放つ攻撃で終わりにしたいものだな…神威、形状変更、形状『弓』」

《承知した。形状『弓』》

神威の音声の後、再び神威が弓の形態に変わる

「神威、カートリッジ・ロード……全魔力弾…展開！」

右手の籠手から薬莖が排出されると、自分の体から大量の魔力が放出されていく

それと同時に俺の周りに50を超える円錐状の魔力弾が形成されていく

俺がクロノに弓を向けると魔力弾も一斉にクロノに狙いを定める

「全魔力弾…一斉掃射！」

俺の掛け声と共に待機していた魔力弾が一斉にクロノに向かって飛んでいく

クロノはシールドを展開させるが、一斉に襲ってきた魔力弾にあっさり破壊され、再びクロノが爆煙に包まれる

「うわああああ…!!」

ズドオオオオオン!!

「ふう…終わったか…」

随分ダメージ負ってたし、これで落ちてるはずだ…

そう思ってクロノのいた場所から意識をそらした瞬間……

キィーン……バシィィィーン

「なに!？」

俺の体がバインドで縛られた

「はぁ…はぁ…やっと捕まえたぞ……」

声の方を見るともう破れていな部分が存在しないほどポロポロになったバリアジャケットに肩で息をしているクロノが俺を睨みつけていた

「さぁ、話を聞かせてもらおうか…とりあえず、お前をアースラに連行する。」

クロノが警戒しながら俺に近づいてくる

「クツクツクツ……」

「何がおかしい!？」

「たかがバインドで拘束した程度で俺を捕まえたつもりなのか?片腹痛いわ!！」

「なんだと!?!」

「俺を捕まえたければ、執務官二桁は連れて来い!?! スキルナンバ
リ^{リバースエイト}8 i 《分解》」

俺がそう呟くと俺を縛っていたバインドが一瞬にして魔力に戻る

「なっ!?!何をした!?!」

「俺が素直に教ええると思ってるのか? そら、通信が入ってるぞ? 出なくていいのか?」

「なに?!?! フェイトか? どうした?!?! なに!?!? なのはが!?!?」

クロノの会話を聞く限り、どうやらなのはがシャマルに蒐集されたようだ。

「どうした? 仲間何かあったんだろう? 仲間の元に行ったらどうだ?」

「お前を野放しにできるわけが無い!」

「しかし、このままでは埒が明かからないだろう？戦う前にも言ったが俺はさっさと帰りたいんだ……」

「……くっ……」

クロノは苦い顔をしてその場から去っていった

EP9・・・圧倒する蓮の実力（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

蓮「相変わらず遅いな」

作者「テンション任せな俺が10日以内にupしている事を誰か褒めてくれ……」

はやて「それで作者さん……」

作者「なんですか？はやてさん」

はやて「蓮兄いのデバイスの説明、前回（EP9あとがき）の時言ってたやろ？」

作者「ああ！そうだった、そうだった。」

蓮「忘れてたのか……」

作者「忘れてないよ。思い出せなかっただけ。」

はやて「忘れてたんやん……」

作者「それではいつてみよー！」

蓮「誤魔化した……」

作者「我が主人公のデバイス神威は槍、弓、布の3つの形態があ

ります」

はやて「槍、弓はありそうやけど、布は誰も思いつかんやろ……」

蓮「そうだな…防御だけなら盾でもいいんじゃないか？」

作者「それはありきたりだからさあ〜だから布。」

はやて「そんなんでいいん？」

作者「いいんですー！」

蓮「で…他のは？」

作者「槍形態は近接戦闘の形態且つ基本形態。もちろんカートリッジも搭載しています。主な技は『砲天臥撃』『崩纏牙撃』」

蓮「まあ、カートリッジは基本だな……技名は三国志の猛将…呂布奉先の武器の名前だな……」

作者「弓形態は中遠距離の形態ですね。主な技は『飛翔燕弾』」

はやて「なんて厨二WWW」

作者「じゃあ『魔弾』WWW」

蓮「ちょ！？俺のデバイスの技なのに勝手に変えるなよ！？」

作者・はやて「まあ、それはそれとして……」

蓮「流すなよ！」

はやて「けど、弓ってええの？ベルカって近距離一辺倒じゃないん？」

作者「ヴィータだって中距離攻撃するし、そんなこと言ったらシグナムのボーゲンフォームはどうすんの？」

はやて「あ、そうか…」

作者「とまあ、こんな感じかな…蓮本人が作ったのになんて廃スペースｗｗｗ」

はやて「え！？このデバイス蓮兄いがあったの！？」

蓮「ああ…そんな設定があったようななかったような……」

作者「あとがきで伏線張っちゃった…」

蓮「笑えねえ〜」

はやて「次回は両陣営の会話シーンやね…」

作者「そだな…」

蓮「感想、ご指摘お持ちしています。」

はやて「次回もお楽しみに〜」

閑話?やがみけ(特別編)(前書き)

ヴィータ「この物語はやがみけの日常を淡々と描くものです。過度な期待はしないでください。」

ヴィータ「あと、部屋は明るくして画面から1メートルくらいは離れて見やがってください。……これでいいの?はやて?」

はやて「バッチリや!あとでアイス買ってやるからな。」

ヴィータ「やった〜!」

作者「と言つ訳で?時事ネタであるハロウィンの話を急遽書きました。本編の続きを待っていた皆さま。申し訳ございません。それではどうぞ!」

閑話?やがみけく特別編く

特別編『やがみけのハロウィン』

く10月30日く

ヴィ「なあ、はやて……」

はや「ん?どないしたん、ヴィータ?」

ヴィ「このハロウィンって何?」

ヴィータがテレビ画面を指差して言う。

そこには何かのバラエティ番組の特集が映し出されていて、ちょうどハロウィンの特集が流れていた

はや「あゝそつか…:そう言えばそんな時期やな…:ハロウィンっていうのはな、毎年10月の31日に子供たちがお化けの格好をして、近所の家を1軒ずつ訪ねて「お菓子をくれないと悪戯するぞ!」って言うんよ。」

ヴィ「うん、うん」

はや「そんでな、その家の人はかぼちゃのお菓子を子供たちに振る舞うつてのがハロウィンなんよ。」

ヴィ「へえ〜」

はや「まあ、日本ではかぼちゃのお菓子以外のお菓子もくれるけどな。」

ヴィ「アイスとかもくれるのか!？」

はや「アイスは微妙やな……そうや! ヴィータ、私達2人でお化けの格好してみない?」

ヴィ「あたしとはやてが?なんで?そのハロウィンってのは明日なんだろ?」

はや「そ、だから今日の内にお化けの衣装を作るんよ。そんで明日蓮兄い達を驚かそうつて訳や!」

ヴィ「おお!面白そうだなそれ!」

はや「そうと決まったら早速実行や！もちろん蓮兄い達には内緒でな。」

ヴィ「おうー！」

・
・
・
・
・

・
・
・

・

～翌日…10月31日～

はや「よししゃ！行くで！ヴィーター！」

ヴィ「おう、はやて！けど、あたしの格好はいいとしてはやての服はどっから持ってきたんだ？」

現在ヴィータは古いシートで作った幽霊の格好…それに対してはやての格好は……

はや「昔、スーパーで買ったのを思い出してな、いや〜まだ着れて良かったわ〜」

黒いマントを羽織って、同じく黒のトンがり帽子。さらに手に持っているのは小さな20?くらいの杖の先に星がついた杖……所謂魔女……いや、魔女っ子のスタイルである。

ヴィ「なんか、どっかで見たことある格好な気がするんだけど……」

はや「気にしたら負けや！格好がどっかの文芸部でSOSな団員そっくりな格好でも気にしたら負けや！！」

ヴィ「そ、そう?」

はや「ほら！いくで！ヴィータ、蓮兄い達のところへ突撃や！」

ヴィ「お、おう！」

そうして二人はリビングに向かった

バンッ！！

はや「トリック・オア・トリート！お菓子をくれんと悪戯するでえ
！」

ヴィ「トリック・オア・トリート！お菓子をくれないと悪戯するぞ
！」

2人がリビングに突撃するとそこには蓮達がテレビを見ながらお茶
を飲んでいた。

蓮「おお！かわいらしい魔女とお化けが来たぞ。うーん…いたずら
されるのは困るからな……シャル買い置きのお菓子ってまだあっ
た？」

シャ「それがさっきシグナムと一緒に食べちゃいました……」

蓮「あちゃ〜」

はや・ヴィ「そんな〜〜！！！！」

蓮「冗談だよ。買い置きのお菓子は本当にシグナムとシャルが食
べちゃったけど、少し前に作ったかぼちゃのお菓子があるからそれ
を食べよう。シグナムその戸棚にあるから、取ってくれる？俺は

お茶入れるから。」

シグ「分かった。」

・
・
・

・
・

・

はや「はむはむ…おいしいな〜このお菓子。なあ、ヴィータ?」

ヴィ「もふもふ…ホントうまいよ、蓮!」

シャ「そうだったんですか〜今日はハロウィンって言うんですね…」

シグ「蓮が珍しく菓子を作っていたから不思議に思っていたが…こういうことだったのか…」

ザファイ「もふもふもふ…」（黙々とお菓子を食べている）

蓮「それにしてもはやてもヴィータも可愛かったぞ。」

はや「ほんま!?!」

ヴィ「そ、そうか?」

蓮「ああ、とっても可愛かったぞ。」

はや「///////// (顔を覆ってクネクネ悶えている)」

ヴィ「///////// (顔を真っ赤にして俯いている)」

シグ「蓮、お前は態とやってるのか?」

蓮「何を?」

シグ「いや、何でも無い。」

こうして今日も八神家は平和だった……

〜おまけ〜

なの。「トリック・オア・トリート！お菓子をくれないと悪戯しますよ！」

フェェト、トリック・オア・トリート……／＼／

桃子「あらあら、可愛い魔女さんと黒猫さんね。はい、お菓子をどうぞ。」

恭「着せたのは母さんだけだな……（ボソッ）」

桃子「恭也？何か言ったかしら？（ニッコリ）」

恭「いえ！何でもありません！！！」

桃子「そう？あ、リンディさんも呼んで「ようかしら？楽しくなりそうだね。うふふふ……あ、恭也〜カメラ持ってきてえ〜！」

恭「あ、ああ……取ってくる……」

高町家も平和だったようです。

閑話？やがみけ〜特別編〜（後書き）

作者「ハロウィン編いかがだったでしょうか？」

なのは「こんにちは〜」

フェイト「こんにちは……」

作者「今回はなのはさんとフェイトさんがあとがきに来ています。」

なのは「作者さん。なんで急にハロウィン？」

作者「世間がハロウィン、ハロウィン言ってるから突発的に……」

フェイト「そう言えば私達の衣装は何だったんですか？」

作者「なのはさんはやてとあんまり変わりはありません杖の先がハートの形で肩にユーノ（フェレット形態）を乗せてます。」

作者「フェイトさんは黒い服にネコミミと尻尾、首に鈴といった感じの衣装でした。」

フェイト「私、結構恥ずかしい格好してない？」

作者「気にしたら負けだと思いますよ？」

なのは「次こそは本編ですか？」

作者「そうだね〜」

フェイト「感想、ご意見お待ちしております。」

なのは・フェイト・作者「次回もお楽しみに〜!!」

EP10・・・戦いの後々それぞれの思い（前書き）

作者「やっと更新です。」

蓮「約束の10日を過ぎてるぞ」

作者「パソコンが拗ねまして……」

蓮「もういい、時間かかった割には短いし……」

作者「申し訳ない。」

蓮「それではどうぞ！」

11/11：誤字及び内容を一部修正

EP10・・・戦いの後、それぞれの思い

「なのはside」

「う、うん……」

目が覚めたら私はアースラの医務室のベッドの上で寝ていた。

パシユツ！

その時、扉が開き、フェイトちゃんが入ってきた

「なのは！もう大丈夫なの!？」

「うん。まだ少しククラするけど…大丈夫だよ。」

「よかったあ……」

私がベッドから体を起こして立ち上がろうとすると足がもつれてフラついてしまった。

「なのは!?!」

咄嗟にフェイトちゃんが私に駆け寄って私を支えてくれた

「なのは、大丈夫?」

「にははは…ゴメンね、フェイトちゃん。」

パシユッ

その時、クロノ君、ユーノ君、エイミィさん、リンディさん、アルフさんが入ってきた。

「なのはちゃん、もう起き上がっても大丈夫なの?」

「すみませんリンディさん、まだちょっとフラフラします……」

「そう……じゃあ予定通りここで会議しましょうか」

「ふえ？」

そう言つとりンディさんはウィンドウを周りに開き始めた

「母さん……じゃない。艦長！さっきの話、本気だったんですか！？」

「クロノ…私はいつだって本気よ？」

「艦……長……！！」

「まあ、あの二人はしばらく放っておいて、サクッと今回の戦闘の事を整理しようか。」

エイミーさんはクロノ君達をスルーしてウィンドウを操作し始めた

「良いのかい？エイミー……」

「いいんだよアルフ、あの二人はその内こっちに来るから」

「でも、エイミーさん。結界の所為でアースラはなにも記録できな

かっ たつて……」

「うん、フェイトちゃんの言うとおり、アースラはなにも記録できなかつたけど……レイジングハートとバルディッシュがその時の戦闘を記録してしてくれたの。」

「そうなんですか……レイジングハートが……（ありがとう。レイジングハート）」

私は心の中で傷ついてしまった自分の相棒とも言えるデバイスにお礼を言った

「まずはレイジングハートの記録からだね。」

ウィンドウの一つに私とあの赤い服の女の子との戦闘の様子が映し出された。

「確か、なのはちゃんはこの子にいきなり襲われたんだよね？」

「はい。話も聞いてもらえませんでした。」

その後映像は進んでいき、あの子のデバイスの形が変わったところ

でユーノ君が、

「これって、もしかして『カートリッジシステム』？」

「知ってるの？ユーノ君。」

「詳しくは知らないけど、確かベルカ式のデバイスに良く搭載されているデバイスだよ。」

ユーノ君の話によると弾丸のような形のカートリッジと呼ばれるものに儀式で魔力を圧縮してデバイスに装填。その圧縮された魔力を開放して一時的に魔力を爆発的に高めるシステムらしい。

「所でユーノ君、ベルカ式って何？」

「その昔ミッドと同規模の繁栄を築いたベルカという国の魔法体系だ。今ではベルカ式の使い手は少なくなってミッド式の魔法が主流になったが……」

「あ、クロノ君、もう艦長との鬼ごっこは良いの？」

「好きでやってたわけじゃない………続きを話すぞ。」

クロノ君、汗ダラダラなの……

「ミッド式と違って中遠距離をある程度度外視して、近距離に重点を置いた魔法が多いのもベルカ式魔法の特徴の一つだ。故にベルカの優れた術者は自分の事を騎士と呼んでいたらしい」

「そう言えば私と戦ったシグナムって人も言ってた。「自分はベルカの騎士だ」って」

「多分こいつ等が最近頻発している魔法生物襲撃の犯人だと思っている。襲われた魔法生物も今回ののは同様、リンカ コアにダメージを受けていたからな……」

「じゃあこの人もそうなのかな？」

そう言っただけでエイミーさんがウィンドウにある人物の映像を出した

神社の神主さんのような格好に狐？のお面をかぶって、槍をもったその人は手に持った槍でクロノ君を、その後すぐにフェイトちゃんを吹き飛ばしていた

「こいつがフェイトをふっ飛ばした奴だね!!」

「エイミーさん、この人は？」

「さっきのフェイトちゃんと戦っていた…シグナムだっけ？その人とほぼ同時期に現れた人だよ。僅かに拾えた音声から男だということしかわからなかったんだ。」

「それより気になったのは僕との戦闘のこの部分だ。」

クロノ君がウィンドウを操作してある場面を映し出した

「？この場面がどうしたんだい？クロノ」

「ああ…奴の足元だ。」

クロノ君に言われて私たちはこの狐の仮面の人の足元を見る

「なんだこの魔法陣…まるでミッドとベルカの魔法陣を足した様な形じゃないか……」

ユーノ君が言うように狐の仮面の人の足元には私やフェイトちゃん
が使う丸い魔法陣の中にあの赤い子が使っていた三角の魔法陣が回
転しながら浮かび上がっていた

「見たことない魔法陣ね、名づけるなら『ミッド混合ベルカ式』、
『ミッドとベルカのハイブリット魔法』って所かしら……」

リンディさんが画面を見つめながら呟いている。

「それにこの部分。」

クロノ君が次の場面を切り替える

「これは……魔法が消えてる？」

「そうだ、バインドブレイクかと思ったが、そう言った反応は無か
った。一体どうやったのか皆目見当もつかない」

クロノ君が顎に手を当てて唸っている

「とにかく警戒しておくのに越したことは無いわね……今回の事件
おそらく私達が担当になるはずだから。」

「そんなんですか？リンディさん。」

その言葉を聞きながら私はあの赤い子に今度こそお話を聞かせてもらおうと心に決めた。

.....

.....

.....

.....

.....

蓮 side

「このアホ!!」

ガンツ!!!

「痛つてえ~~~~~!!」

クロノ達がなのは救出などをしている間にシャマルと共にジャミング魔法を展開しながら撤退した後、俺は今回の戦闘の原因であるヴィータに拳骨を入れていた。

「あれほど魔導師は襲つたと口を酸っぱくして言っただろうが！」

「でもよお……」

「でもモストもあるか！？大方はやての体が心配で魔法生物より効率が良い魔導師を襲っただらうが……」

「うっ！」

ヴィータは考えを当てられて明後日の方を向いている

「気持ちは分からなくは無いが、厄介なことになったな……」

「ああ…我々の存在が管理局に知られてしまったな……」

「それだけじゃない。仮にはやての体を直してもはやてが管理局に捕まる。」

「どついつ事だよ蓮!？」

「簡単な話だヴィータ。今まで魔法生物のみを襲っていた時は、管理局は深刻な事件だと思わずに現場に来るのが遅かった。そのおかげで俺達は蒐集の証拠を隠滅することができた。これなら仮に管理局が出て来ても俺たちにたどりつくことも無かったし……たどりついたとしても決定的な証拠もないからいくらでも誤魔化しようがあった……しかし、今回俺以外の顔は割れ、ベル力式の魔法を使う魔導師だという事も知られた。恐らく近いうちに闇の書に辿り着くだろう。」

ここまで聞いてシャマルとザフィーラは何か気づいたようだ。

俺は言葉を続ける

「これではやてが治ってもはやては管理局に捕まる。以下の罪状が確定したな…『ロストロギアの不正所持』、『障害罪』、『公務執行妨害』その他諸々だな」

「なんでだよ!？はやては関係無いだろ!あたし達が勝手にやっただからよ!」

ヴィータが食ってかかる。分からののか?シグナムでも何となくだ

がわかってるぞ？

「いくら守護騎士が勝手にやっていた事でもそれを制御できなかった主も同罪だというのが管理局の考えだ。そもそもロストログアを持つだけで逮捕してくるのが管理局だ。そのロストログアを手に入れた経緯が偶然だろうとも、いた世界が管理外世界でもだ……」

ようやくヴィータが理解したようだが、納得できないようだ。

俺もそうだ、納得できん。

「では蓮、これからどうするのだ？」

ようやくザフィーラが口を開いた。……寡黙なのは良いけど、たまに喋らないと空気になるぞ？

「それをこれから言うんだ。皆聞いとけよ。」

「「「「……（ゴクッ） 生唾を飲み込む音」「」」」

「「これからは……」」

「「「これから？」「「「「

「……今まで通りで行く。」

「「「……は？」「「「「

皆キョトンとしている

「だから今までと変わらない。魔法生物を管理局に見つからないように蒐集。俺は緊急時以外ははやての護衛……ってどうした皆？」

「蓮さんが引つ張るからどんなこと言われるのか身構えていたら今まで変わらないと言われて頂垂れているんですよ！」

何故シャマル涙目なんだ？なぜシグナム達は頷いているんだ？

「仮に管理局の連中に出くわしたら撤退を優先で撤退が不可能な場合のみ交戦。これを基本に行動しよう」

「分かった。」

「じゃあ帰るぞ。絶対はやて怒ってるだろうな……」

「あははは……頑張ってください蓮さん」

シャマルが濁いた笑みを浮かべながら俺を慰める

こういう場合怒られるのはなぜか俺なのだ。

そしてはやては『お仕置き』と言う名の名目で俺に無茶振りしてくる

この前とはあるアニメに登場する主人公のコスプレさせられて写真を撮られまくった

「今回はなにさせられるんだろうか？」

「またコスプレじゃねえのか？」

ヴィータのそんなからかいの言葉をバックに俺はこれから待っているであろうお仕置きにげんなりしながら家へ向かった

EP10・・・戦いの後々それぞれの思い（後書き）

作者「……………」 所々焦げてた状態で床に転がされている

はやて「どうしたんこれ！？なんで作者さんがボロボロになってるん！？」

蓮「俺がやった……………」

はやて「蓮兄い！なんで!?!」

蓮「新企画のトーク小説でアホなことばかりやったからだ。」

はやて「じゃあいつか…前回送られた感想のお礼を……………」

蓮「怒離留様、フリスタ様、ZERO様感想ありがとうございます。」

はやて「さて、次回はやがみけをお送りします。」

蓮「感想、ご指摘お待ちしております。」

はやて「次回もお楽しみに〜！」

作者「おのれ…八神蓮この恨みは必ず……………」

蓮「まだ息があつたか…さあ、断罪の時間だ。」

作者「いやあああああああ!?!……………」

閑話 やがみけ くそのく (前書き)

蓮「おい作者。」

作者「なんだ蓮？」

蓮「本編はどうした？」

作者「この作品のはやての出番が少ないのではやて分を補充だ。」

蓮「その割にははやての出番少ないぞ。」

作者「本編よりは出てる。」

蓮「もう何も言うまい」

作者「それではどうぞー！」

11/17:タイトルを修正

閑話 やがみけくそのく

閑話 第2話

『とあるやがみけの日常く守護騎士と蓮の蒐集く』

今回はシグナム達の蒐集が開始された後の日常と蒐集の一部です

『闇の書の中』

はや「なあなあ、闇の書って何が書いてあるん？」

ある日の午後、はやてのこの一言が事の発端だった

シャ「えっとはやてちゃん、どついう意味ですか？」

はや「せやから闇の書って魔導書やん。」

シャ「そうですね。分類では魔導書で間違いありませんね」

はや「せやから闇の書には何が書いてあるかなって」

どうやらハヤテはシグナムやシャマルからの説明を忘れていているようだ

シグ 蓮。もしかしくなくても主はやては……

蓮 完全に説明を忘れているな

シャ じゃあもう一回説明します？

蓮 いや、俺達は蒐集を開始している。万が一説明し直した後、何かのはずみではやてが闇の書の中身を見たら……

ザファイ 我らのしている事がバレてしまう…

シグ それは不味いな……

蓮 この際ページが埋まつてる部分だけ見せて何とか誤魔化そう

ヴィ 何とかできるのか！？蓮

蓮　なんとかできるのかじゃない、何とかするんだ！

シャ　かつこいいです。蓮さん

蓮　寝めるなよ……読者が見てる　（ここまでの念話約3秒弱）

……じゃあ見てみるか？」

はちて「いいのー!？」

蓮「この際だし皆で見るか？シャマル間の書出して。」

シャ「わかりました。」

そう言ってシャマルは闇の書を出す

はち「じゃ、見よか」

ぷら……

はち「……読めんなあ〜」

シグ「古代ベルカで使われていた文字ですから……」

シャ「はやてちゃんが完全に闇の書の主として覚醒したら読めますけど……」

はや「うーん…余所様に迷惑かけてまで読みたくないなあ……」

へら…へら…

はや「あれ？」

シャ「どうしたんです？はやてちゃん。」

はや「いや…なんかここから片仮名になっとるんやけど……」

蓮・シャ・シグ・ヴィ「……え？」「……」

皆はやてのもとに集まる

蓮「ホントだ…片仮名で書いてある」

シャ「なんて書いてあるんですか？」

蓮「読むぞ……デス。」

はや「まさかのF　！？なんでF　！？」

ヴィ「はやての持つてるゲームに出てくる魔法の名前じゃねえか……」

蓮「使ったら相手死ぬのか？……次は……ルーラ」

はや「ドラ　エ！？今度はドラ　エ！？」

蓮「使ったら家に一直線か？だとしたら便利だな……」

ヴィ「次は何だ！？」　ワクワクしている

蓮「次は……I am the bone of my sword
d・（体は剣でできている）……」

はや「ストーブッ!」

蓮「おおっ!どうしたはやて!？」

はや「あかん!それ以上言ったらあかん!」

蓮「そ、そうか…じゃあ次行くぞ…ドラグスレイブ竜波斬。」

はや「もうツッコまへんで…例え自称天才美少女魔導師の代名詞の呪文でもツッコまへんで…」

蓮「次は…これは魔法なのか？」

はや「なんて書いてあったん？」

蓮「…びびるびるびるびるびーって書いてある…」

はや「どっかに金棒にしか見えないバットを持った天使でもいるんか？」

蓮「これはもう呪文でも何でもないだろ…『粉碎!玉碎!大喝采!」

「! っ て……」

はや「完全に某社長のセリフやな……」

…… 10分後……

蓮「しかしなんでこんなことになってるんだ?」

シャ「バグかしら?」

ヴィ「でもそう簡単にバグるもんなのか?」

蓮「それが電子機器ってのは簡単に壊れたりバグったりするもんなんだよ……コーヒーとかコーラ零したりするだけでダメになることあるし……ん? どうしたはやて引き攣った顔して……」

はや「いや……何でもあらへんよ!」

蓮「はやて、心当たりあるのか?」

はや「あらへんあらへんよ!」

蓮「怒らないから」

はや「さっきテーブルに置きっぱなしだった闇の書にコーラぶちまけました。」

シャ「何やってるんですか！はやてちゃん！」

はや「わ〜ん！シャマルが怒った〜」

はやてはシャマルに10分ほど説教された後、シャマルは o r z 状態になってしまった

こうして闇に書に新しい魔法？が加わった？

『守護騎士〜ア マ タ マイに出会う〜』

〜とある無人世界〜

ヴィ「魔法生物いねえなあ〜そっちはどうだ？シグナム」

シグ「いや…見当たらないな…シヤマル達は…」シグナム「ヴィー
たちゃ〜ん!」どうした?シヤマル」

シヤマルがシグナムのもとに飛んできた

シヤ「あ、あそこ見てください!」

シヤマルが指をさした方向には大きな生物がいた

口から生えた巨大な牙らしきものが特徴のその生物は歩き方は象の
ようにゆっくりとしていたが、大きさが半端じゃなかった…その
生物から見ればシグナム達は虫のように見えるくらいの大きさだった

シグ「なんだあの大きさは!?!」

ヴィ「なんかどっかで見たことあるような気がすんだけど……」

シグ「本当かヴィーター!どこで見た!?!」

ヴィ「はやての持ってるゲーム」

シグ・シャ」「……」「

シグ「…そのゲームだとあの生き物はどんな感じだった？」

ヴィ「はやてがキャラの経験値集めで戦ってた」

シャ「もしあの生物がそのゲームの生物と同じだったら、蒐集した
らかなりページを稼げそうね。」

シグ「なるほど…確かめてみる価値はありそうだな…ヴィータ、主
はやてはどのようにしてあの生物を倒していた？」

ヴィ「確か……転ばせて、この前間の書のバグで出てきたデスって
魔法で倒していた」

シャ「あの魔法ですか？」

シグ「と言うよりどうやってあれを転ばせるのだ？下手したら私達、
潰されるぞ？」

ヴィ・シャ」「……」「

ヴィ「と、とりあえずやってみようぜ！」 ヤケクソ気味「

シャ「そ、そうですね！危なくなったら逃げましょう！そうしまし
ようー！！」 冷や汗ダラダラ「

シグ「よし！逝くぞおー！」 字が違う「

ヴィ・シャ「おおー！！」 ツッコまない「

.....

わー わー きゃーきゃー！ 駆けよ隼！ ギガント・シユラーク
！！

よし転んだぞ！ シヤマル、殺れえ！！

デス！デス！ デスう！

シヤマルまだか！？ 魔法が出ません！ なんだと！？

うわ！起き上がったぞ、どうすんだよ！？ なんか怒ってません？

戦略的撤退！ わああああ！！ キヤアアアアアア！

.....

シグ「ぜい…ぜい…大丈夫か？二人とも…」

ヴィ「これが大丈夫に見えんのか？」

シャ「…死ぬかと思いました…」

ヴィ「ていうか、なんでデス使えねえんだよ…！」

バシツ！！ 闇の書を地面に叩きつける音

シグ「やはりバグで出てきたからか？」

シャ「かもしれませんか…」

ヴィ「使えねえ…」

シグ「となると他の呪文らしきものを使えないのか？」

ヴィ「……………」

シグ「……………」

シャ「……………」

ヴィ「出ねえじゃねえかあ！！！！」

バン！！ 闇の書を地面にこれでもかと叩きつける音

シャ「ヴィータちゃん、落ち着いて……………」

ヴィ「なんだよ！？あたし赤っ恥晒しただけじゃねえか！周りから見たらあたし痛い人じゃねえか！！」

シグ「落ち着け、ヴィータ」

ヴィ「もついや…こんな生活…………生まれ変わったらオケラになりた
い……………」

シャ「ああ！ヴィータちゃんが一気にネガティブに！」

シグ「帰ろう！すぐに帰って忘れるんだ！」

~~~~~八神家~~~~~

ザフィ「なるほど…それでヴィータがあんなのか……」

シャ「そうなんです……」

蓮「しかしまさかFみたいな世界があるとは……世の中広いのか狭いのかよく分からなくなるな……」

シグ「それよりも蓮、ヴィータを何とかできないのか？」

ヴィ「大体、今時ロリキャラなんて在り来たりなんだよ……StS
だってあたし以外にもロリキャラいっぱい居るしさ……はあ……あたし
っていららない子なのかな……」

はや「ヴィータ！しっかりして！いつものヴィータに戻ってええええ
！！！」

蓮「あればっかりはどうにもならないな……」

シグ「そうか……」

その後ヴィータが元に戻ったのは2時間後の話であった……

閑話 やがみけ くそのく (後書き)

作者「いかがだったでしょうか？」

蓮「ツッコむ所がありすぎてどこからツッコんでいいのかからん」

作者「まずは感想のお礼から……」

蓮「ZERO様、感想ありがとうございます。……少な！一人かよ！？」

作者「いいんだ… たった一人でもこの作品を呼んで感想を書いてくれる人がいるんだから…… それだけで私は嬉しいです」

はやて「所で作者さん、闇の書のデスとかルーラが使えんのはなぜなん？」

作者「いきなり話題を変えるね君は… 使えない理由は使えたらリインフォースに使われてお前達終わりじゃん… って理由から。」

蓮「確かに……」

はやて「次回はどうなるん？ やっぱり本編？」

作者「もう一回やがみけやります。」

蓮「もう一回？」

作者「今度ははやて、蓮中心のヤツを……」

蓮「まあ期待せずに待つか…」

作者「お前、俺のこと嫌いだろ？」

蓮「感想、ご指摘お待ちしております。」

はやて「次回もお楽しみに〜！」

作者「無視すんなよ！」

閑話 やがみけ くそのく (前書き)

シャマル「健康のため部屋を明るくして、画面から離れてみてください。お願いしまーす。……はやてちゃんこつですか？」

はやて「バッチリや！シャマル」

蓮「これは何のネタだ？」

はやて「今日の5の2ネタ」

蓮「さいですか……」

はやて「それでほいほい……」

閑話 やがみけくそのく

閑話 第3話

『やがみけくはやてと蓮のほのぼのな日常』

このお話ははやてと蓮のほのぼのとした数日間の様子です。

『はやてVS蓮?』

ノリのいいBGMが流れている八神家のリビング

そのリビングのテーブルにははやてと蓮が見合った状態で座りお互いを鋭い眼差しで見つめ……

はや「行くでえ!蓮兄い!」

蓮「来い、はやて!」

遊 王をしていた……

はや「レベル8のスターダスト・ドラゴンにレベル2のシンクロチ

コーナー、フォーミュラー・シンクロンをチューニング！」

はや「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！
アクセルシンクロオ！！」

はや「生来せよ！シューティング・スター・ドラゴン！」

蓮「相変わらずエースを出すのが早いな…はやては」

はや「ふっふーん 今回の勝負はもろたで！シューティング・スター・ドラゴンの効果発動や！1ターンに1度、自分のデッキを上から5枚確認して、その中のコーナーモンスターの数だけ攻撃できる！」

蓮「何度も思うんだが、反則臭いよな？その効果……」

はや「1枚目、コーナーモンスター、デブリドラゴン。2枚目、コーナーモンスター、クイック・シンクロン。3枚目コーナーモンスター、ジャンク・シンクロン。4枚目、コーナーモンスター、エフェクト・ヴェーラ。そして5枚目、コーナーモンスター、ドリルシンクロン！」

蓮「なんではやてはこう都合よく5枚のコーナーモンスターを引

くかな…」

はや「いくで！一回目も攻撃！蓮兄いのカラクリ將軍無零に攻撃！」

蓮「そう易々と通すと思うか？畏カードオープン！和睦の使者。このターン俺は戦闘ダメージを受けず、モンスターも戦闘では破壊されない」

はや「うう〜やっぱり通らんか…ターンエンドや。」

ここで2人の場の整理をしよう。

はやての場には攻撃力3300のシューティングスター・ドラゴンに伏せカード1枚。手札は0。ライフは2800

対して蓮の場には攻撃力2600のカラクリ將軍無零と守備力100のチューニングサポーター。魔法・畏ゾーンにはカラクリ解体新書が2つのカウンターを乗せた状態で場に出ている。手札は1枚。ライフは2900

蓮「俺のターン、ドロ。カラクリ解体新書を墓地に送り、乗っているカウンターの数だけデッキからカードをドロする。」

蓮「解体新書の乗っているカウンターは2。よって、2枚ドロ。」

蓮「さらに大嵐を発動。お互いの魔法・畏カードを破壊する。」

はや「ウチのミラーフォースが……！」

蓮「手札からチューニングサポーターを召喚。」

はや「何をやる気や？」

蓮「これで終わりじゃないよ。さらに手札からシンクロキャンセル発動。自分フィールド上のシンクロモンスターをエクストラデッキに戻し、墓地にシンクロ素材となったモンスターが存在するとき、そのモンスターを特殊召喚する。無零の素材となったダークリゾネーターとサイバードラゴンを特殊召喚。」

蓮「レベル3のダークリゾネーターにレベル5のサイバードラゴン、レベル1のチューニングサポーターをチューニング！」

はや「あれ？なんか、私終わった気がする……！」

蓮「凍てつく冷気が全てを凍らせ滅びが訪れる、凍てつく世界に顕

現せよ。シンクロ召喚！いでよ、氷結界の龍、トリシューラ！」

はや「うそ！？蓮兄いなんで持ってたの！？」

蓮「この間ターミナルで当たった。トリシューラの効果発動。相手の墓地・フィールド・手札から1枚ずつカードを除外する。と言っても

はやてに手札は無いが……」

はや「ここでトリシューラは無いで……orz」

蓮「トリシューラの効果ではやての墓地のスターダスト・ドラゴン、フィールドからシューティング・スター・ドラゴンを除外して、トリシューラではやてに直接攻撃！コキュー スプレス！」

はや「デジ ン技！？最近蓮兄いネタ走りすぎじゃない！？」

そんなことを叫びながら、はやてのライフは0になった

.....

.....

はや「うう…今度こそ勝てると思ってたのに…」

蓮「あんな罰ゲームが待ってると思うと負けの訳にはいかないからな…」

はや「ええやん女装の二つや二つ」

蓮「いいわけあるか！」

はや「そんなに怒らんといてよ。……似合っと思っのに」ボンッ
…」

蓮「なんか言った？はやて」(ジト目)

はや「なんも言ってへんよ！今度はスブラで勝負や！」

蓮「罰ゲームは当然ないよな？」

はや「さすがにもうせんよぉ」

蓮「ほんとか？」

はや「ほんま、ほんま」

そう言いながら二人はゲームが置いてあるリビングのテレビの方へ向かった

『はやて&蓮、アニメを見る』

はや「と言う訳で〜アニメを見ます!」

蓮「何がと言う訳だ、何が」

はや「詳しくは『閑話 やがみけ』を読んでもください。」

蓮「なんの話をしている?」

はや「宣伝。」

蓮「はっきり言つな」

はや「そんなことより、アニメを見るんや!」

蓮「わかったから。何を見るんだ?」

はや「まずはこれかな?」

タイトル『とら あんぐる ー』

蓮「待て、それはダメだ。」

はや「なんで?」

蓮「とにかくダメだ。」

はや「なんやよく分からんけど…じゃあこれで!」

タイトル『天元 破グレン ガン』

・・・アニメ鑑賞中・・・

『俺のドリルは…天を突くドリルだあ！！』

はや「やっぱりええな〜グレン ガンは」

蓮「熱血系はテンションあがるなあ〜」

はや「結構ご都合主義やけどな…」

蓮「大抵の熱血物はそういうものだし割りきっちゃえば？」

はや「そうする。」

・・・鑑賞終わり・・・

蓮「飛ばしながらとはいえ、1クール一気見はつらいな」

はや「そうやね…シグナム達も帰ってこんしな」

蓮「(まだ蒐集してんのか…)で、どつする?まだ夕食には早いけど……」

はや「もう一作見よう!今度は何かつまめるもの用意して」

蓮「そうだな…次は何を見るんだ?」

はや「次はこれや!」

タイトル『ガン ム〇〇』

・・・アニメ鑑賞中・・・

『狙い……撃つぜー!』

はや「うう…ロック オンが…ロック ンがあ〜(TOT)」

蓮「死亡フラグ立ちまくりだったからな」

はや「なんで蓮兄いはそんなに冷めとるんや!? ツクオン死んで

もうたんやで!？」

蓮「いや、だってアニメだし……」

はや「そのアニメのキャラに喜び、泣くことができるのが真のオタクってもんやで!」

蓮「俺はアニメは見るがオタクじゃないし……」

はや「すずかちゃんはすごいで! Anime Beatsの最終話で一緒に号泣したで!」

蓮「……そのすずかちゃんと俺は会ったことは無いけど……凄い子だな……いろんな意味で」

はや「蓮兄いにはオタクとは、アニメとは何なのかきっちり教える必要があるな……」(なんかオーラ出てる)

蓮「待てはやて、そろそろ夕食だし、シグナム達も帰ってくるし……」(若干後ずさってる)

はや「夕食より蓮兄いにアニメの真髓を教えるのが先や……シグナム

達が帰ってきたらまとめて恐育（誤字にあらず）するから「」（笑顔なのに目が笑ってない）

その後帰って着た守護騎士共々徹夜でアニメを見させられはやて以外のメンバーは（精神的に）瀕死に追い込まれたのであった。

閑話 やがみけ くそのく (後書き)

作者「イーッヤッフ~~~~!!」

はやて「作者さんが壊れた!」

蓮「ついに精神が逝ったか…」

作者「ホントに酷いね君は…前の話を更新した後すぐマク スを見てテンションがMAXなだけです。」

蓮「救いようが無いな…話も短いし…まずは感想のお礼から…」

作者「ZERO様、怒離留様、マーボー様、感想ありがとうございます!」

はやて「でも珍しいなあ…やがみけ連続は初めてじゃない?」

作者「はやて分補給のためです。ちなみにはやてと蓮の決闘のBG MはClear Mindです。」

はやて「ちなみに私達のデッキは?」

作者「はやてがネタ用の遊星のコピーデッキ、蓮がカラクリデッキ。」

蓮「所で作者よ…このタイミングではやて分を補給したってことはこの先はやての出番が減るってことか?」

はや「うそ！？嘘やる作者さん！嘘だと言ってよバー　イー！！」

作者「俺はバー　イーじゃないし、ザ　でガ　ダムに挑まないから
……」

蓮「グダグダだな…次回は本編か？」

作者「そうだね、蓮と魔王の初邂逅だな…」

はやて「じゃあ今回はこれにて…感想、ご指摘お待ちしております。」

蓮「次回もお楽しみに！」

EP11・・・出会いと暁の主と不屈の心を持つ少女（前書き）

作者「やっと更新どうあ~~~~!!!!!!!!」

蓮「うっさい！大人しくしてろ！」

はやて「でもどうしてこんななに遅くなったん？」

作者「それはあとがきにて…それではどうぞ！」

EP11・・・出会いと暁の主と不屈の心を持つ少女

（蓮side）

「蓮兄いゝ買い物付き合ってくれへん？」

冬に入り、空が暗くなるのが早くなってきたある日、はやてが膝に
買い物袋を抱えたはやてがそう言ってきた

「ん？夕食の買いだしか？」

「そつやで！シャマルと行くつもりだったんやけど皆出かけてるし…
…」

「（はやてのために蒐集するのは良いがもうちょっとはやてと一緒に
居てやれよ……1回なのは流O H A N A S I した方がい
いかな……）…わかった、じゃあいくか。」

「…」

満面の笑顔のはやて、俺ははやての車椅子を押しながらそんなこと

を考えていた

スーパーにて

「それで？今日はどうする？」

「うーん…今日は寒いからあったかいお鍋にしようかな？」

「鍋か…それでいくか。どんな鍋にするかな…よせ鍋とか、石狩鍋とかいろいろあるしな…」

「キムチ鍋とかカレー鍋とかも美味しそうやない？」

はやてが食材を見ながら聞いてくる

「でもヴィータが辛い物苦手だからなあ…ここは無難によせ鍋にするか？」

「そうやね、そうしよっか。」

そう言っただけで俺とはやては食材を選んでいった。

.....

.....

.....

.....

.....

く八神家く

「遅いな〜皆……」

鍋の用意も出来上がり、後はシグナム達の帰りを待つばかりだと言
うのにいまだにシグナム達が帰ってこない……

時計を見て鍋を見た後、はやての表情がわずかに暗くなる。どうや
ら家族が離れていっつてると思ってるらしい……

ホントにこういうところは世界が変わっても変わらないな……

「まったく趣味などに夢中になるのはいいが、ちゃんと夕食の時
間には帰ってきてほしいものだな……」

因みに家を開ける理由にシグナムは剣道場で指南、ヴィータとザフイーラは老人会の人たちとゲートボール、シヤマルは近所のご婦人方とお茶会と言う事になつてゐる

「そうやね……」

「でも、その内元通りになる。ずっとこんな日が続くわけじゃないんだから……」

「蓮兄い…そうやね！皆今は趣味に夢中になつてただけやもんね！」

はやてに笑顔が戻つたようだ

「しかし、遅くなるなら念話が電話の一本くらい… 蓮…聞こえてるか？ シグナム？」

「シグナムから念話？」

「そうらしい… なんだシグナム？随分蒐集に熱心じゃないか？

すまない時間を意識していなかった…それよりもヴィータ達が管

理局の結界に閉じ込められた。できれば救援に来てほしい

ちっ…管理局め、面倒事ばかり持ち込みやがって…分かったすぐ行く。5分もあればそっちに着く

すまない……

謝罪ははやてに言え、シグナム達の帰りが遅くて寂しがつている

ああ…

そこでシグナムからの念話が消える

「シグナムはなんて言ってたん？」

「迎えに来てほしいそうだ。まったく迎えを呼ぶくらいなら明るいうちに帰ってくればいいのに…」

「そつやね……蓮兄いどこに電話しとるん？」

「ちょっとね、もしもし？あ、ノエルさん？蓮です、どうもこんばん

んわ実はですね……」

電話を終えた俺は受話器を置き、コートを羽織る

「電話の相手ってノエルさん？」

「そう、俺達の帰りが遅かったら、すずかちゃんの家で夕食を食べ
ていいかって……」

「そっか…すずかちゃんもびっくりやるっな…」

「そういうわけだ。ごめんな、はやく」

「そう思っんやったら早く帰ってきてきな？」

「そっだな…善処するよ」

「行ってらっしゃい、蓮兄い。」

はやてに見送られて俺はシグナムのもとに向かった

蓮と戦っていた魔導師が魔法を展開していた

「ステインガーブレイド！エクスキューション・シフト！」

あの魔導師がデバイスを振り下ろすと周りに展開された剣の形をした魔力弾が一斉にあたし達に向かってくる

あたしが咄嗟に防御しようとした時……

「ちっ！」

ザフィーラがあたしの前に出てシールドを張った

ドガガガガガガガガ！！！！

「やったか？」

あの黒髪の魔導師がそんなことを言っているが甘え……

煙が晴れると、無傷のあたしと右肩に目力弾が突き刺さっているザフィーラが居た

「ザフィーラ！」

「問題ない……この程度：ダメージの内に入らん！」

そう言いながらザフィーラは刺さった魔力弾を引き抜く

「さすが、ザフィーラ！」

黒髪の魔導師はあたしとザフィーラを睨みつけていたけど急に視線をあたし達から外した

あたし達もそつちを向くと見た先のビルの上に魔法陣が現れ、そこにあの白い魔導師と金色の髪の魔導師が居た。

そのふたりから少し離れた所にもう一人、あの時金色の髪の魔導師と一緒に白い魔導師をかばった少年が立っていた

「ッ！アイツ等！」

あたしとザフィーラが身構えた時、白い魔導師と金色の髪の魔導師が待機状態のデバイスを取り出して……

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

「セーット・アップ！！」

2人が叫ぶと2人の周りが光に包まれ、光が収まるとバリアジャケツトを着てデバイスを持った2人が立っていた

見たところ変わったところは……あれは！？

「あいつ等のデバイス！？まさか！」

黒髪の魔導師もあの白い魔導師の隣のビルに降り立つ

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて。」

「闇の書の完成を目指してる理由を！」

金色の髪 of 魔導師と白い魔導師がなんて事を言ってくるけど、お前から管理局にそんな事を話してなんになるってんだ？

「あのさ、ベルカの諺にこういのがあんだよ……」

ザフィーラがこっちをチラッと見ている

「『和平の使者なら槍は持たない』」

「「？」」

2人の魔導師は首をかしげている。……なんでか知んねえけどザフィーラが呆れた顔をしている

あたしはデバイスを突きつけて

「話し合いに来たのに武器を持ってくる奴が居るかバカってことだよ！バーカ！」

「なあ！い、いきなり有無を言わずに襲ってきた子がそれを言う！？」

なんか白い魔導師の方が突っかかってきた。けどなんか「子」って言われるのが子供扱いされてる感じがしてムカつくな……なんだよ、

ザフィーラそんな憐れんだ目であたしを見て…

「…ヴィータ、それはことわざではなく小話のオチだ」

……え？もしかしてやっちゃった？あたし……

「うつせ！どうでもいいんだよ、そういう細かい事はノノ」

今のあたしの顔は少し赤くなってるの違うないそうに違うない

私が心の中で恥ずかしさに悶えていたその時…

ズガーーン！！

空の結界一部が壊れて見慣れたピンクの魔力光と黒ツばい紫色の魔力光が見えた

「シグナムと蓮か……シグナムは予想していたがまさか蓮まで来るとは……今シグナムからシャマルも直に合流するらしいと念話があった」

「ああ……一気にあたしらが有利だ。」

あたしはニヤツと笑った

.....

.....

.....

.....

.....

〔蓮side〕

シグナムと合流した俺は今ヴィータ達が閉じ込められているであろう結界の真上に来ていた

「捕縛結界……しかも強層型か……管理局め、面倒な結界を張って……」

「どうする蓮？私が破るか？」

《私と主なら問題ありません。》

シグナムがレヴァンティンを構えている。レヴァンティンもシグナムの言葉に応える

俺はシグナムの前に出て、

「いや、俺がやる。神威、カートリッジロード。」

《承知、薬莖排出》

俺は槍形態の神威を構えると神威の柄尻の部分からカートリッジが1本排出される。その後、穂先に眩いばかりの電気が集まる

「崩・纏・牙・撃！」

俺は神威を振りおろしながら結界に突っ込んだ

ズガーン！！

結界が破壊され、俺とシグナムがビルに降り立つ

「！！？シグナム…！」

フェイトがシグナムを見て驚いたような声を上げ、

「あいつは！？あの時の！」

クロノは俺を見て敵意の籠った目で睨みつける

とその時……

「うりゃあああああああ！！！！」

バキッ！！

「グアッ！」

「「「なっ！？」」「」

俺の背後から声が聞こえたかと思い振り返ったし瞬間、オレンジの髪に犬耳をはやした女性：アルフの蹴りが俺の仮面に当たり、俺は仰け反った

「」…のおー！」

俺が半ば反射的に神威を横薙ぎに振るう、しかし、アルフはそれを飛んでかわし、フェイトの横に降り立った

「見たかい！フェイトを傷つけた報いだ！」

アルフは人差し指を俺に突きつけてそう言い放った…流石フェイト
LOVEな使い魔だ……

ピシ…ピシピシ…

その時仮面に罅が入り……

パリーン……

割れた…

「チツ…まさか奇襲した俺が逆に奇襲されるとは……世の中わからんものだな……」

「それがお前の素顔か……」

クロノがデバイスを突きつけて聞く

「その通りだ。改めてはじめましてだ、管理局の方々……俺の名はロ
ータス。もちろん偽名だが……シグナム達も俺の事はこう呼べよ？」

「あの……堂々と偽名と言っていていいんですか？」

フェイトが右手を上げて聞いてくる

「別にかまわないしな……」

「あの……ロータスさん？」

「なんだ？君は……えーっと……」

なのはも手を上げて聞いてくる……なんだ？此処は小学校か？

俺は初対面な振りをしてなのはの名前を聞く

「なのは、高町なのはです！」

「では高町嬢、なんだ？」

「あの、どうしてロータスさん達は闇の書の完成を目指してるんですか？」

「…知ってどうする？」

「できるなら手伝いがしたいです！」

本当に頭にバカが付くぐらいお人よしな奴だ

「お断りさせてもらおう。」

「どうしてですか？」

「俺は管理局を信用していない。高町嬢が正規の管理局員なのか民間協力者なのかはしらんが、少なくとも管理局の執務官と一緒に居る奴の提案を受け入れる気はない。それに……」

一度言葉を区切り……

「お前の隣で敵意むき出しの奴が2人もいたら説得力が無い。」

俺の言葉を聞いてなのはが左右を見るとアルフとクロノがそれぞれ臨戦態勢に入っていた

「そう言う事だ。さて、戦るか？執務官殿？」

俺は神威をクロノに向ける

「言われなくても!!」

クロノもデバイスを俺に向ける

「ユーノ君！手出さないでね！私、あの子と一対一だから！」

「チッ！」

なのはヴィータを見つめてそう言ったヴィータ自身はあまり乗り気じゃないようだが…

「ならば私はテストロッサとやるつ。」

「わかりました。」

シグナムがレヴァンティンをフェイトに突きつける。フェイトもシグナムの言葉に頷き、バルディッシュを構える。

「ならあたしは使い魔同士やらせてもらつた！」

「ベルカでは主に使える獣を使い魔とは呼ばん！」

「じゃあなんだつてのさ!?!」

「主の剣、そして盾になる獣……守護獣だ！」

「同じようなもんじゃなかよ!?!」

アルフとザフィーラもお互いを睨み合い、拳を構えた

そしてお互いの敵に向かって、空へ飛んだ。

EP11・・・出会いと暁の主と不屈の心を持つ少女（後書き）

蓮「さて…言い訳を聞こうか？」

作者「言います！言いますから、神威を喉元に着きつけなさい！」

はやて「結局、なんで遅れたん？」

作者「最初の1週間くらいは私の心の神様のまきいづみ様の名前を書き間違えたショックで……」

蓮「完全にお前の自業自得だな……」

はやて「残りは？」

作者「大学のテストなどリアルが忙しかったから。今回の話も時間の合間合間にチマチマ書いてようやく完成した。」

蓮「ふーん」

作者「興味なしですか…そうですか…」

蓮「では、感想のお礼を…」

作者「無視かよ…ZERO様、マーボー様、希竜刹那様。感想ありがとうございます。」

蓮「お待たせしてすみませんでした。」

はやて「所で、作者さん。話が変わるけど、今回の話で気になるところがあつたんやけど聞いていい？」

作者「いいですよ。なんですか？」

はやて「いつ蓮兄いはすずかちゃん達と交流を持ったん？」

作者「この作品の時間ではやがみけその3と今回のEP12の間ですね。その内またやがみけでその様子を書くから。」

はやて「じゃあ次は蓮兄いの崩纏牙撃って確かEP8でカートリッジなしで使ってたけど…」

作者「これは蓮さんに答えてもらいましょう。」

蓮「お前が答えても問題ないだろう…崩纏牙撃はカートリッジなしでも問題なく放てる。カートリッジを使うと単純に威力が上がる。管理局の結界の強度が分からなかったから念を押してカートリッジを使った。」

はやて「そうなんかあ〜」

作者「こんなものかな？」

蓮「それじゃ今回はこの辺で…」

はやて「感想、ご指摘お待ちしています。」

作者「『夜天を受け継ぐもの〜皆でトークしまshow〜』のコラボの応募も受け付けています！」

蓮「『夜天を受け継ぐもの』皆でトークしまshow!』は俺とハヤテが応募のあった作品の主人公達とフリートークをすると言った感じの作品です。このダメ作者の感想のところは作品名とキャラの名前を書いてくれればOKです。」

はやて「待ってまーす!」

作者「それでは皆さん…!」

はやて・蓮「次回もお楽しみに〜!」

EP12・・・再戦〜執務官対暁の主〜(前書き)

作者「難産でした。出来も微妙です…orz」

蓮「おいおい…大丈夫なのか？」

作者「それではどうぞ〜！」

EP12・・・再戦〜執務官対暁の主〜

蓮side

「くらえええ!!」

《ブレイズキャノン!》

「砲・天・臥・撃!」

ズガーン!

俺の砲天臥撃とクロノのブレイズキャノンがぶつかり、爆発が起きる

「今だ! バインド!」

爆発で起きた煙からクロノが飛びだし、俺の脚にバインドをかける

「この程度で!」

俺はバインドを破るために足のバインドに魔力を流す

「止められるとは思ってないさ！ただお前の動きを止められればいいんだ！」

《ブレイズキャノン！》

クロノが再びブレイズキャノンを放つ

少し不味いな…バインドを外そうとすれば防御が間に合わず、砲撃を食らう。

かといって砲撃を防げば動けないところをクロノが追撃をかけるだろう

バインドも砲撃も魔力の密度が高いから両方同時は難しい

俺がとるべき行動は……

「…スキル発動《鈍化》」

俺の左目に反転した4の数字が浮かび上がる

するとクロノのブレイズキャノンの速度が落ちる

「何!？」

突然攻撃が遅くなったことに驚くクロノ

俺はその間にバインドを破壊しクロノの背後に回り、神威を振りおろす

クロノはすぐに振り返ってデバイスで受け止める

既に俺はスキルを解除したのでクロノの砲撃は元のスピードに戻り、ビルに当たって消えた

「お前! いったい何をした!？」

神威を受けとめながらクロノが叫ぶ

「それを俺が言つと思つか? おらあ!！」

神威を振りぬきクロノを吹き飛ばす

「お前の目的は何だ!?! なぜ闇の書の完成を目指す!?!」

クロノが魔力弾を放ちながら聞いてくる。さっきの話を聞いていたのか？

「何故お前に言わなければいけないのかわからんが、強いて言うなら生きるためだ。」

「なに！？どういう事だ！？」

クロノが驚いたような声を上げる。まだ無限書庫で調べていないのか？

ロクな情報もなしに事件の調査をするって…大丈夫なのか？管理局…

「闇の書についてなんにも調べていないのか？闇の書の持ち主は一定期間蒐集を行わないと自身のリンク カアから大量の魔力を吸われて、最悪死亡するんだぞ？」

もっともこの例ははやての様にリンク カアが未成熟な場合による場合が多いが…

「なんだと！？」

「俺もそれを知ったのは守護騎士から聞いたからだが……さて、闇の書の完成を目指す理由を話したが何かご感想は、執務官殿？」

「まさか闇の書にそんな機能が……しかし！だからと言って魔法生物や魔導師を襲って蒐集していい理由にはならない！」

「確かにな……では聞こう。俺達が仮に武器を納めそちらに投降した場合、お前達はどうする？」

「決まっている！管理局で裁判を受けて、しかるべき処分を受けるんだ！」

「……で？」

「何？」

「その後どうするつもりなんだ？さっきも言ったが、闇の書の主は一定期間蒐集しないと命にかかわるんだが？」

「それは……しかし、闇の書を完成させるわけには……」

クロノが質問に答えられなくなり口籠る

闇の書は完成させたくない。しかし、蒐集しないと闇の書の主が死んでしまい闇の書が再び転移してしまう可能性がある。

「し、しかし！闇の書はロストロギアなんだ！管理局はそれを管理しなければならぬ！」

「では、ロストロギアを持っているものは？」

「管理局にはロストロギア不正所持罪と言う法令がある！持っている人物を逮捕しなければならない！」

俺の神威とクロノのデバイスがギリギリと鏝迫り合う

「なら、さらに聞こう。そのロストロギアを偶然、例えば闇の書のようなランダムに資質を持つ者の前に転移してきた場合も犯罪者扱いなのか？」

今回のはやてがそれだ。

はやての持っている闇の書ははやてが物心つく前に転移してきたもの好きでもっているわけではないのに犯罪者呼ばわりとは…ちゃんち

やらおかしな話である。

「それは……」

「はあ……もう良い……」

「何？うわぁ！」

俺はクロノをビルの屋上へ叩きつける

俺は神威を弓形態にして

「これ以上無駄なやり取りをしている暇もない…神威、カートリッジロード」

《承知、薬莖排出》

神威が弓に変わり、右手の籠手から3発の薬莖が排出される

今のクロノには不愉快しか感じない。

最初は管理局はああだ、こつだと言っておきながら、こちらが少し疑問をぶつただけでこの様か…

振り下ろした瞬間クロノを囲っていた魔力弾が一斉に降り注いだ

「う、ぐ…うわあああああああ！…！」

クロノはシールドを張るが百を優に超える魔力弾の前には意味を成さず、魔力弾がクロノを飲み込んだ

「クロノ君！？」

「オラァ！」

「クロノ！？」

「余所見とは余裕そうだな？テストロッサ」

クロノが倒れた時なのはとフェイトがクロノの方を見るが、その瞬間にヴィータがなのはを、シグナムがフェイトを弾き飛ばした

この調子なら早くここから逃げられそうだな…

シャマル。今どこに居る？

俺はシャマルに念話をつなげる

蓮さんですか？今、結界の中です。どうしました？もしかしてヴ
イーたちちゃん達に何かありました！？？

いや、今のところこちらが優勢だ。だが……

だが、なんですか？

はやてが心配だ。さっさと帰りたい。この結界破壊できるか？

え？理由ってそれですか？

当たり前だ。何を言っている？それでどうなんだ…破壊できるの
か？できないのか？

俺を誰だと思ってる？はやての義兄あにだぞ？

…もう良いです。結果だけいえば破壊は可能です。けど、結界の

外で局員が結界の維持に魔力を注いでるの…シグナムのファルケンか、ヴィータちゃんのギガントクラスの威力が無いと…

「面倒な…なら俺がやる。」

「できるんですか!？」

「できるから提案してるんだ。シャマルはシグナム達に連絡を…
…ッ!！」

突然背後に気配を感じ、振り返ると仮面をつけた男の振り上げた踵が顔前に迫っていた

「ドゴォ！」

俺が咄嗟に避けるとビルの床にわずかに罅が入った…どういう威力しているんだ？

俺は改めて男を見ると記憶に引っかかるものがあった

「こいつ…どこかで見たことがあるような…」

「誰だ？お前は？」

「お前は邪魔だ。ここで消えてもらおう。」

そう言うと男は迷わず俺に殴りかかってきた

俺は後ろに飛んで男と距離を開ける

「神威、形状……」

「デバイスを変形させる暇など与えん！」

男は俺の顔めがけて、蹴りを放つ

「チィ！」

男の蹴りを俺は弓形態の神威で受け流す。その後、神威から魔力弾が放たれる

しかし、録に狙いをつけていない魔力弾は男に避けられる

「はぁ……！」

「あまり…調子に乗るなあ！」

ジャキン！ズバア！

「何!？」

男は慌てて距離を開ける。

当然だ、突然俺の右手の籠手から刃が出て来て顔を斬りつけられたのだから

男の仮面に一本の傷ができる

「隠し武装か……」

仮面で分からないが、恐らく今の男の顔はひどく怒りと苛立ちで歪んでいるだろう

「中遠距離の武装を考えた時点で今回のようなケースが考えられな
いわけがないだろう…」

俺の神威の形状『弓』には二つの形態が存在する

一つが普段使っている弓形態。そしてもう一つが今回のように形状を変えられない状態で近距離戦闘を強いられたときに使用する『仕込み剣+盾』の形態だ。

今、俺の右手の籠手から約30？ほどの長さの刃が手の甲の部分から出ていて、左手の弓はしなる部分…リムが上下半分折りたたまれ、リムの部分から肘にかけて魔力でできた菱形の盾が出現している。

「チツ！」

男は舌打ちをするとビルを飛び降りた

俺は駆け寄り、ビルの下を見たが男の姿は無かった

《主、僅かにですが魔力反応が、おそらく転移系の魔法で逃げたのかと…》

「そうか…しかしあの男どこかで…ブツブツ……」

《主、シャルル殿から念話が入っていますが、出ないのですか？》

「ん？そうか、すまない神威」

《いえ…》

で、なんだ？シャマル…

なんだじゃありませんよ！急に念話が切れたから心配しましたよ！

それはすまない。色々あったんだ。じゃあ結界を壊すぞ？シグナム達は？

もう連絡済みです。

「そうか…やるぞ、神威。形状変更、形状『槍』」

《承知！形状『槍』》

神威が槍形態に変わる

「カートリッジロード…」

《葉莢排出！》

神威の声の後にカートリッジが柄尻から4発排出される

その瞬間文字通り紫電が神威を覆う

俺は神威を上空の結界に向け……

「貫き焦がせ！雷・霆^{ケラウノス}！」

神威を放った。

完全に雷と化した神威は結界を破壊した後、旋回し、俺の手元に戻ってきた

結界を破壊した、脱出するぞ！

応！

その言葉と共に俺達はその場を脱出した

.....

.....

.....

.....

.

（リンディ side）

「艦長、なのはちゃん達の回収、完了しました。」

「……苦労様、エイミー。被害状況はどう？」

「なのはちゃん達は問題ないです。けど、クロノ君が……全身打撲で全治3日だそうです」

なのはさん達は無事みたいね、けどクロノは当然ね。あんな攻撃を受けたんじゃ……むしろその程度で済んだのが幸いと喜ぶべきかしら……

「あと、ロータスと名乗った人の魔力計測に浸かった計器が全壊です。」

ロータスと言う男の人のデータを取るために使っていた測定機は最後の雷の様な魔法ですべてダメになってしまった

それまでに得たデータの結果…魔力量はなのはさんやフェイトさんの約2倍、ランクは推定SS。

厄介以外の何物でもない

おまけにレアスキルらしき能力も確認されている

今回の事件本当に厄介だわ……

これからの事と待ってるであろう大量の書類の事を考えながら、ク
ロノの寝ている病室へむかった

.....

.....

.....

.....

.....

蓮side

「…仮面の男？」

あの場から脱出した後、転移を繰り返して管理局を振り切りようやく海鳴に戻ってきてシグ

ナム達に俺が結界を破壊する前に仮面の男に襲われた事を話した

「ああ…何故かは知らないがいきなり襲われた。シャマルとの念話が切れたのもそのせいだ」

「ああ！あの時念話を通じなかったのはその所為なんですね！」

「しかし…管理局の目を掻い潜って蓮に奇襲をかけるとは何者だ？」

「何言ってるんだ、ザフィーラ？そんなのあいつらと同じ管理局員じゃねえのか？」

確かにヴィータの言うとおり俺を狙ってきたのを考えても管理局側の人間と見ても何ら違和感はないが、どうも俺の直感と言っべきものがそれを否定する

こんなことならハヤテやクロノに無理を言っても闇の書事件の詳細を聞いておくべきだった

今更そんな事を思っても意味は無いんだが…

俺がそんなことを考えていた時シグナムが口を開いた

「しかし、管理局の目も厳しくなってきたな…その仮面の男の事も
ある。これからは探索範囲を広げた方がいいか？」

「あたしは構わねえ。」

「私もです。」

「構わない…」

シグナムの提案をヴィータ、シャマル、ザフィーラの順で頷く

「俺は引き続きはやての護衛だ。後、皆収集も大事だとは思っがち
やんと夕食には帰って来い。はやてが心配してたぞ？」

「」「」「」「」「」

シグナム達がバツの悪そうな顔をする

「さて、それじゃ帰るぞ。多分はやてはすすかちゃんの家だ」

「なんでわかるんですか、蓮さん？」

「月村家に今夜俺達の帰りが遅かったらはやてを家に呼んでくれて言うてある。はやてにもちゃんと言ってる」

「そうだったんですか…」

「そう言う訳だから行くぞ。」

そうして俺達ははやてが待っているであろう月村家に向かった

EP12・・・再戦！執務官対暁の主（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

蓮「微妙だな…」

ハヤテ「微妙やな…」

はやて「微妙や…」

作者「ひどい…そう言えば今回はハヤテさんの方が来てるんですね？Wはやて？」

ハヤテ「偶に出ないと忘れられそうやからな！」

作者「そうですか…」

はやて「ほう…これが並行世界の私か…」

ハヤテ「そうやで、もう一人のウチ。」

蓮「何処かの王様の主人格みたいな言い方すんなよ…それにあとがき（ここ）に二人とも出して大丈夫なのか？」

ハヤテ「大丈夫やで蓮兄い！あとがき（ここ）は基本フリーダムやから！（^-^）b」

蓮「そうか…じゃあいいか…まずは感想のお礼から。」

作者「ZERO様、HAL様。感想ありがとうございます。」

ハヤテ「おおきにな〜ノシ」

はやて「ところで蓮兄い、蓮兄いのデバイスってまだ形態あつたんやな？」

蓮「ああ、あれか…あれは元々なかった形態らしいんだが、作者が今回の話の流れ上必要になったから急遽作つたらしい」

作者「蓮がクロノと場とつてるから原作のクロノ蹴飛ばされイベントが無いからね…仮面さんには蓮の相手をしてもらいました」

蓮「仮面さんって…普通に猫姉妹でよくないか？」

作者「気分！」

蓮「胸張つて言つな！」

はやて「後、最後辺りに使つた蓮兄いのあの技なんなん？」

蓮「雷霆の事か？」

はやて「そうそう。あの技だけ英語読みやつたし…」

ハヤテ「それはあの技の命名がウチやからや！」

蓮「なのはのスターライトブレイカ みたいな技作れないかな〜と思つてハヤテと一緒に考えたんだよ。神威をほとんど雷化させて投げるからはやてがギリシャ神話のゼウスの雷霆から取つて『雷霆』ケラウノス」

ってつけたんだよ。」

はやて「なるほど〜」

ハヤテ「ところで蓮兄い、次の話はなんなん？」

蓮「作者曰くやがみけだそうだ。この話を挟まないで次の話にどうしても次の話に行けないらしい…」

はやて「それじゃあ今回はこの辺で!」

ハヤテ「感想、ご指摘お待ちしております。」

蓮「『夜天を受け継ぐもの〜皆でトークしまshow〜』の「コラボの応募も受け付けています!」

はやて「『夜天を受け継ぐもの〜皆でトークしまshow〜』は蓮兄いとハヤテが応募のあった作品の主人公達とフリートークをすると言った感じの作品です。この作者さんの感想のところに作品名とキャラの名前を書いてくれればOKです。」

ハヤテ「待つてまーす!」

作者「それでは皆さん…」

はやて・蓮「次回もお楽しみに〜!」

ハヤテ「見てくれないと暴れちゃうぞ」

はやて「スレイヤーズ乙(^ . ^)b」

作者「俺空氣...orz」

祝！ユニーク20000突破記念、今までのあらすじ！（前書き）

はやて「みゃー！みゃー！みゃんこーlogyで人類みゃ？とれびあ
くん」

蓮「なんだ、はやてその歌？」

作者「涼宮ハ ヒちゃんの 鬱のOP、『いままでのあらすじ』だ
る。」

蓮「タイトルが『今までのあらすじ』だからか…」

作者「先程アクセスを見たらユニークが20000を突破していた
ので記念に急遽書きました。」

蓮「今までの話を振り返りながら作者と俺が補足を入れる形になる。
」

作者「それではどうぞ」

はやて「冥土冥土メイドのみやげ〜 そりゃもう Shanngr
-liaのそっくりさん」

蓮「まだ歌ってたのか、はやて!？」

祝！ユニーク20000突破記念、今までのあらすじ！

はや「……と言う事でまずはプロローグから！」

蓮「いきなり俺が大量の死体の真ん中で涙を流しているシーンから入ったな……」

はや「この時、ミッドチルダが第0番世界になってるな」確か原作は第1番じゃなかったっけ？」

蓮「原作言うな。」

作者「安心しろ、蓮。此処は今までの本編のあとがきと同じでフリーダムだ。」

蓮「OK、OK理解した。要するに何でもありませんな……じゃあ作者、補足説明を頼む。」

作者「切り替え早いね……ミッドが第0なのは、蓮の世界は原作の世界ではなく、原作『リリカルなのは』の並行世界だという伏線？的な意味がありますね……」

はや「この話は闇の書事件を簡単に説明しているんやね…」

蓮「事件の中身は原作と同じだな…」

作者「このあたりは原作と違わなくてもいいと思って」

はや「なんか最後の方で並行世界の私が殺されてるんやけど……」

ハヤ「そうなんよ……！」

はや「うおう！？並行世界の私が来たあ！」

ハヤ「どうも、八神ハヤテです。これからはウチも話に参加するで
！」

作者「ハイ、次行ってみよう次はプロローグその2ですな。」

蓮「ここでシグナム達が合流、その後はやての世界に転移するんだ
つたな…」

ハヤ「しかもこの話の中で周りの死体の中になのはちゃん達が居るのが発覚、うわっ…：グロ…」

はや「確かにな〜ウチもバ オとかDMCとかするけど、ちょっと…」

ハヤ「なのはちゃん達が洗脳された経緯は？」

作者「ネタバレにつながるから内緒。同様になぜ蓮がはやてを手にかけたのかも内緒です。」

蓮「その後シグナム達を書の中に入れて夜天の書スキルで改変して転移と言う流れになるんだな」

ハヤ「スキル名は《革変》…これってどう読むの？」

作者「読みはそのまま《革変》かくへん〜》スキルを使うと蓮の左目に反転した数字の6が紅く浮かび上がります。」

はや「ん？6ってことは少なくともスキルは6個以上あるってこと？」

作者「そうです。何個あるかは秘密です。けど、30個も40個もありません。」

蓮「20個って言わない辺り、20個はあるな？」

作者「……………」

ハヤ「凶星やつたな？」

作者「さあ！次行ってみよー！！」

蓮「誤魔化した…」

はや「誤魔化せてないけどな」

ハヤ「まあここは流していこうか…次は…短いな…と言うかこれサブタイトルEP2になってるけど実質これがEP1ちゃうん？」

作者「まあEP2は蓮がはやてのいる世界に転移した事と転移魔法の説明の話だから…ちなみに転移魔法の説明は私の独自解釈です。サブタイトルについては書きなおそうか思案中。」

蓮「この時の暁の書は本当にぎこちないしゃべりだった…」

ハヤ「さあ次行ってみよか！」

蓮「次はEP3。俺とはやての出会いの話だな。」

はや「展開が強引やけどな…」

作者「すいません……」

蓮「この時にはやての笑顔は怖かった……」

はや「蓮兄い…どういう事？」 真っ黒いオーラが出てる

ハヤ「確かにこれは怖い……」

作者「オラガクブルしてきたぞ！」

蓮「……次行くか……」

ハヤ「次はEP4、並行世界のウチの誕生日の準備の話やな」

作者「何気に蓮犯罪者ww」

蓮「バレなきゃいいんだよ!」

はや「…蓮兄い?」 ドス黒いオーラが出てる

蓮「すいません。もうしません。」

ハヤ「蓮兄い弱っ!?!」

作者「翠屋で桃子さんと邂逅…しかし魔砲使いとはエンカウントなし…」

蓮「そしてなのはがあとがきに登場。」

ハヤ「この辺りからあとがきがフリーダムになり始めとるな…」

はや「次!」

蓮「EP5。1日早いはやての誕生日パーティーとこの世界のシグナム達との出会いの話だな。」

ハヤ「並行世界のウチは羨ましいな〜ネックレスもらっとる。」

はや「ふっふ〜ん 羨ましいやろ?」

ハヤ「ウチの時は確か『1日何でも言う事を聞いてくれる』だったけ?」

はや「なんだとう!?!?」

作者「はやて…キャラが壊れてる」

蓮「その時ハヤテは何をお願いしたんだっけ?」

ハヤ「えーと…添い寝…やったな…」

はや「…ギリギリギリ…」

作者「はやての目から血の涙が!?!」

はや「なんて甘々なシチュエーション……羨ましすぎるぞお! 並行世界の私い!」

ハヤ「そう言うはやてだって蓮兄いに褒められて顔赤くして砂糖が吐けそうなシチュエーション……羨ましいぞお!」

蓮「…そろそろ先に進もうぜ?」

作者「そうだね…で、プレゼントをもらったあとハヤテはお風呂に入り、部屋に戻って寝ようとしたらシグナム達が出てきた…」

蓮「そんな感じだ。」

ハヤ「次行ってみよう次!」

はや「EP6はシグナム達と私、そして蓮兄いのお買い物の話やな。」

作者「買い物の前半は完全にはやてのターンな感じだな」

はや「ずっとウチのタアーン！」

ハヤ「しかも蓮兄い…ヴィータにぬいぐるみを渡すって…まさか！
ヴィータにフラグを!？」

蓮「それは無い。」

はや「即答…」

作者「で、次はEP7は家に帰った蓮はその夜シグナム達に尋問されるww」

蓮「あれはびつくりした…いきなり真剣な顔のシグナムに「蓮…話がある」って言われて連れて行かれないだから…」

ハヤ「確かこの時って蓮兄いリミッターつけてるんよね？」

蓮「Dランクまでな…理由は本編にちゃんと書いてある。」

はや「ちなみにこの小説の魔力ランクの解釈ってどうなってるん？」

作者「Dランクは魔力を持つてるな〜くらい。Cランクは何とか魔法が使えるくらいで、Bランクは何とか管理局員で使えるくらい。Aランクはこれくらいあるといいな〜って感じ、AAは管理局ではEースクラス。AAAはこいつTUEEEEE!ってレベル。Sはチート一歩前。SS以降はウホッ!良いチートな感じなイメージ。」

蓮「ひどいイメージだ……」

作者「だから、Dランクまで落とした蓮はシグナム達から見た蓮は「こいつ魔力持つてるな〜でもしよばいな〜」な感じに見える」

ハヤ「酷い言われようww」

はや「次はやがみけやね……」

ハヤ「これの元ネタは『みなみけ』やな」

蓮「EPとやがみけの違いは？」

作者「EPは物語が進行する。シリアス多め。対してやがみけは物語はあまり進まない。ギャグ一色な感じ。簡単にいえばEPがスト

レポート、やがみけは日常パート。」

はや「納得。」

ハヤ「しかしこっちのシャマルの料理は酷いな。虹色の煙が出るってww」

蓮「触れないでやれ…」

作者「さて、今回はここまで！」

はや「最後までいくんや無いの？」

作者「A、S編以降はユニークが30000超えたら書くつもりと思っ
」

蓮「そうか…とりあえず前回の感想のお礼から行くか？」

作者「そうだね。わざわざあとがき作ることもないし…」

はや「それじゃ…ZERO様、HAL様。感想ありがとうございます」

す。」

ハヤ「おおきに〜ノシ…なんかデジャヴ…」

作者「コピペじゃないよ？」

蓮「感想、ご指摘待ってます。」

ハヤ「『夜天を受け継ぐもの〜皆でトークしまshow〜』の
ラボの応募も受け付けています！」

作者「『夜天を受け継ぐもの〜皆でトークしまshow〜』は蓮
とハヤテが応募のあった作者の作品の主人公達とフリートークをす
ると言った感じの作品です。私の感想のところに応募する自分の作
品の名前とキャラの名前を書いてくれればOKです。」

蓮「待つてまーす！」

作者「それでは皆さん…」

はや・ハヤ「次回もお楽しみに〜！〜！」

ハヤ「次回も…まっまっ」

作者「そのネタ何人知ってるんだろう…」

閑話 やがみけ くその4く(前書き)

作者「ようやく更新です!」

はやて「おっそい!」

作者「すみません…!」

はやて「それではどしどし!」

1/9 誤字修正

閑話 やがみけ ～その4～

『やがみけ～はやてと蓮と時々ずかな日常』

このお話はやがみけその3～EP12の間の出来事です。

『お金の出所は？まさかのコラボ！？』

はや「あ、そうやそろそろお金下ろさんと…」

ある日の昼下がりに、はやてのその一言から始まった

蓮「じゃあ買い物に行く途中で銀行によるか？」

はや「そうやね、ほな行こうか蓮兄い。」

蓮とはやては買い物バックを車イスに掛けて、家を出た

蓮「そう言えば、はやてにお金を送ってくれてるのって誰だっけ？」

はや「蓮兄い忘れたん？ギル・グレアムおじさんだよ。」

蓮「ああ…そんな名前だったな…（なんだろう…なんか引つかかるなその名前…）」

そんな話をしている内に銀行についていた

はや「それじゃ蓮兄い、お金下ろしてくるな」

蓮「わかった、付いていかなくて大丈夫か？」

はや「大丈夫、大丈夫〜いつもやってるしな」

そう言っではやてはATMへ向かった。

数分もしないうちにATMの方からはやての声が聞こえた

はや「蓮兄い〜！ちよつと来てえ〜！」

蓮「どうした、はやて？」

はや「通帳の振り込まれた金額がおかしいんやけど……」

蓮「は？」

はやての言葉に首をかしげながら蓮は通帳を覗いた

蓮「……0が2〜3こ多くないか？」

はや「2〜3個どころじゃないよ！どうなっとなるんや、これ！？」

一月前の振り込まれた金額が約50万くらいなのに対して今回の額が約1億…ありえない金額である。

詳しく表示するなら156,804,000円

蓮「一体誰が……」
『P i P i P i P i P i P i !』
ん？メールだ。」

蓮の携帯が鳴り、蓮が携帯を開くと珍しく蓮の顔が引き攣っていた

蓮「……なるほど…原因がわかった。」

はや「どうしたん？蓮兄い…」

蓮「こいつを見てみる。」

はやては蓮に促され、携帯のメール画面を見る

『久しぶり、この前蓮達に親が居ないと言っていたので生活に困ってると思って少しですがお金を送ります。また一緒に狩りに行きましょう(^^)ノシ by シイル』

はや「誰や？シイルって…女？」

蓮「ちょっとした知り合いだ。ちなみにシイルは女じゃない男だ。中性的な顔だから女に間違われるらしいが…」

はや「ふーん…そのシイルさんがこのお金を？どんだけ金持ちやねん！？」

蓮「少なくとも1億5千万を少しって言うくらいの金は持つてるらしい……」

はや」「……」

蓮「……」

はや「とりあえず……お金下ろそっか……」

蓮「そうだな……」

とりあえずはやてと蓮は50万ほどお金を下ろし、帰路についた

その後通帳を見直したらシイルの振り込んだお金の下の欄にグレ
アム氏の今月分のお金がしっかり振り込まれていました

『月村家へ……』

蓮「でかいな……」

はや「でっかいやろ?」

今蓮とはやては大きな家…と言うより豪邸の門の前に居る表札？にはローマ字で『TUKIMURA』と書いてあった

ピンポン

はやてが慣れた手つきでインターホンを押す

そしてインターホンについているモニターに蓮にとっては懐かしい顔が映し出された

ノエル『お待ちしておりました。はやて様、蓮さま。すずかお嬢様がお待ちですよ。』

ノエルの声の後、門が開いていく

はや『さあ行くで！蓮兄い！』

蓮「分かったからそんなに引っ張るな…車いすから落ちるぞ？」

はや「へーきや、へーき！」

笑顔のはやてに引つ張られて蓮は月村家の門をくぐった……

『月村家でアニメ鑑賞……ここでもかよ!?!?』

はや「アニメを見るでえ〜〜〜〜!?!?!」

すずか「イエーイー!?!?!」

蓮（すずかのキャラが…壊れてる）

現在はやて、すずか、蓮はすずかの部屋にある50インチを超える大型テレビの前のソファーに座っている。

と言っても座っているのは蓮だけで、はやてとすずかは立ち上がってテンションが振り切れ寸前な状態である

因みに見るアニメはすずかが作ったくじ箱…通称『ご〜るでん・BOX』はやて命名』から1枚引き、そこに書かれたタイトルのアニメを見るのだ

はや「最初はこれや!?!?!」

はやてが引いたくじの紙には

『スク イド』

と書かれていた

『もつとだ!!もつと!!もつと輝けええええええ!!!!』

はや「やっぱりサン イズは熱血物やな…私このセリフ好きやねん。

」

すずか「わたしはクーガの兄貴さんの台詞が好きだな。『惚れが
いがある、残りの命を懸けるに値するほど!』って言われてみたい
……………」

はや「乙女やな。すずかちゃんは。」

蓮「この作品は名言やネタに使われる台詞が多いな……………」
と言っかサ
ン イズの作品すべてに言える事だけど……………」

はや「お前に足りないのはッ!情熱思想理想思考気品優雅さ勤勉さ
!そして何よりも……………速 さ が 足 り な い !」

蓮「なぜここでその台詞を言っつ?」

はや「このセリフがよくネタに使われるから……」

すずか「はやてちゃん、次見よう?」

はや「そやな、次は……これ!」

はやての引いたくじには……

『ヘルング』

それを見たすずかが一筋の冷や汗を流していた

『さあ行くぞ!歌い踊れアルハンブラ!!豚の様な悲鳴をあげる……』

はや「アーカードチートWWW」

すずか「あ、あははは……」

蓮「吸血鬼物のアニメは色々あるがこれは……」

はや「アンデルセン神父…若本ボイス似合いすぎwww」

その後『ヘルシング』を見終わった辺りでノエルに夕食の時間だと言われ、時計を見ると7時を過ぎていたのでシグナム達に電話（& 念話 はやてには内緒）で連絡をいれ、夕食をこちそうになった後、家に帰ったのであった……

閑話 やがみけ くその4く（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

蓮「おい、あの156、804、000円って金額どっから出した？」

作者「某借金執事の最初の借金の金額。」

はやて「そう言えば作者さん。怒離留さんとはいつリアルで友達になったん？でなきゃ小説内で怒離留さんのキャラを出すなんてせえへんやろ？」

作者「怒離留さんとは去年に二人でオフ会してその時意気投合、以来、時々会ってモン、ンで狩りに行くくらい仲が良くなりました。」

蓮「今回の話の中のアニメの選択理由は？」

作者「『スク イド』は単純に私が好きだから、『ヘルング』は次の話で分かる。」

蓮「そうかい……」

はやて「それじゃあ今回はこの辺で……」

蓮「感想、ご指摘お待ちしています。」

はやて「『夜天を受け継ぐもの』皆でトークしまshow!』の
コラボの応募も受け付けています!」

作者「『夜天を受け継ぐもの』皆でトークしまshow!』は八神蓮と八神ハヤテが応募のあった作品の主人公達とフリートークをすると言った感じの作品です。私の感想のところに作品名とキャラの名前を書いてくれればOKです。」

蓮「待つてます!」

作者「それでは皆さん…」

蓮「次回もお楽しみに〜!!」

はやて「ただしその頃には、あんたは八つ裂きになっているだろうけどな」

作者「刀語か!?!」

蓮「と言つか縁起悪い……」

EP13・・・明かされた秘密〜それでも私達は友達だよ〜（前書き）

作者「難産でした……」

はやて「今回はすずかちゃんのキャラ崩壊が顕著です。注意してください。」

EP13・・・明かされた秘密くそれでも私達は友達だよーく

くすずか sideく

コチ…コチ…コチ…コチ…

私の部屋の時計の音だけが静かに部屋に響く

私の目の前に居るはやてちゃんは唾然としたような顔で私をジッと見つめていた

「すずかちゃん、今の言葉もう一回行ってもらえる?」

はやてちゃんは信じられなかったのか私に聞き返してくる

「はやてちゃん…私はね…吸血鬼なんだよ……」

はやてちゃんにもう一度私の正体を聞かせる

どうしてこうなったんだろう……私はこうなる前…1時間ほど前ま

ではこんなことになるなんて思ってもみなかった…

・・・時は戻って1時間前・・・

「世の中には良い魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ…」

私とはやてちゃんはいつものように私の部屋でアニメを見ていた。

蓮さんはアルバイトがあるとかで朝から出かけている。

ここ最近はやてちゃんの親戚のシグナムさん達が朝からいないことが多かったらしく蓮さんも深夜のアルバイトのみに行っていたらしいんだけど…急に他のアルバイトの人が来られなくなり、仕方なく蓮さんが助っ人に行ったらしい…

それで蓮さんはノエルさんに電話をしてはやてちゃんを午後まで預かってほしいと言ったらしい。

予定では午後5時には蓮さんが迎えに来るらしい…

今の時間は午後1時…つまりあと4時間後には蓮さんが来るらしいんだって…お昼ごはんの時、ファリンさんが言った

けど…最近はやてちゃんは狙ったかのように吸血鬼が絡むアニメをくじで引くのはなんだろうか？

実際今見ているのも『魔法先生 ギマ!』だし…

「なあなあ、すずかちゃん…」

「どうしたのはやてちゃん?」

急にはやてちゃんが私の方を向いて声をかけてきた。

「すずかちゃんはさ、吸血鬼っていると思う?」

……この関西弁娘はなんでピンポイントでタイムリーな質問をするんだろ?」

あ、ネ ま見てたからか…

「ぶ、ぶどうだろ?」はやてちゃんはいると思っ?」

「すずかちゃん…なんで声が震えとるん?」

はやてちゃんの所為!とは口が裂けても言えない……

「ん〜どうやらうなあ…いてもいなくてもええ気がするけど…」

じゃあなんでそんな質問したの!?

「でも……」

え?何?まだ何かあるの?

「いたら会ってみたいなあ…とは思ってる。」

……そんなセリフ…実際に吸血鬼になったらそんなこと言えないよ…

でも…

「はやてちゃん…」

「ん?どないしたん?」

はやてちゃんなら…

「あのね……」

「なんや、すずかちゃん、改まって」

もしかしたら……

「私ね……」

こんな（吸血鬼の）私を受け入れてくれるかもしれない……

「私はね……はやてちゃんの言う吸血鬼って言う存在なんだよ……」

自分の中の小さな希望を信じて私は今まで親友の2人にすら明かさ
なかつた秘密をはやてちゃんに明かした……

.....

.....

.....

.....

・・・そして冒頭へ戻る・・・

お互いに黙っていつの間にか時計が2時30分になっている

はやてちゃんは何も言わない…

ちよつとだけ方が震えて気がするけど…

はやてちゃんは私の秘密を知ってどうするんだろう…

お姉ちゃんが言うには大抵の人は信じないか、化け物呼ばわりされて迫害されるって言うってた

お姉ちゃんの恋人の恭也さんはこの事を知った上でお姉ちゃんを受け入れ付き合ってるみたいだけど…

はやてちゃんはどうかんだろう…信じない？それとも…

嫌だ。はやてちゃんに化け物呼ばわりされるなんて嫌だ。はやてちゃんが離れていくななんて嫌だ。友達がいなくなるのは嫌だ！

1人になるのは嫌だ！嫌われるなんて嫌だ！

嫌だ！嫌だ！嫌だ！

怖い…はやてちゃんに嫌われるかもしれない…それに…

…もしかしたらはやてちゃんから話を聞いた蓮さんに嫌われるかもしれない…

私はあまり男の人と話をしない…

異性だからというのもあるけど、月村の名前の所為で良くお金に目がくらんだ人や月村を良く思わない人たちに誘拐されそうになるし、実際誘拐もされた…

その所為か私は男の人と極力関わらなくなった…誘拐しようとする人たちは皆男の人だったから…

でも、蓮さんは少し違った。月村という家の名前も気にせず、はやてちゃんの友達の子として、普通の女の子として接してくれた…

それが嬉しかった。

好きとかそう言うのではなく、普通…そう、普通の女の子として接してくれたのが嬉しかった。

それなのに…私の秘密をはやてちゃんから聞いてしまって離れていくかもしれない…嫌いになるかもしれない…

そう考えると私はたまたまなく怖くなる…このまま逃げ出したくないくらい…

「すずかちゃんは吸血鬼なんだよね？」

ビクッ!!

はやてちゃんが声をかけてきた瞬間、私は反射的に身体を強張らせてしまう……

「……………うん」

私は何とか声を絞り出し、かすれた声ではやてちゃんの言葉に頷いた

「じゃあ、すずかちゃんは……………」

はやてちゃんはいつもと変わらない速さで喋っているのに今の私にはひどく遅く感じてしまう……

嫌だ…嫌わないで……

「実は100歳超えてるとか？」

「……………は？」

はやてちゃんの質問の内容を理解できずに私の頭の中は真っ白になった……

「……えつとはやてちゃん？どついつ事？」

「いや、だから……すずかちゃん吸血鬼なんやろ？だから、アー！ドやエ ア ジェ ソみたいになをとつても見た目が変わらないのかと……」

「女の子に年齢を聞くのは失礼だとツッコミはあえてしないけど……私は普通にまだ9才だよ……」

「じゃあじゃあ！空想具現化ってできる？」

「えつと……無理。」

「死の河は？」

「無理。」

「じゃあ、無規律反転は？回る世界は？」

ノーサイドリバーすって何？メリーゴーアラウンドって何？多分吸血鬼ネタなんだろうけど私にはわからない…

「最期のネタが分からないけど、無理だと思う……」

「なんやねん！吸血鬼って何ができるんや!？」

… なんてはやてちゃん、怒ってるんだろう？

わからない…私にはわからないよ…

ハッ！そんなことよりも…

「はやてちゃんは私の事怖くないの？」

「怖い？すずかちゃんが？なんで？」

「だって私吸血鬼だよ？」

「空想具現化も無規律反転も拘束術式もぶち殺すぞヒューマンもで
きないのに？」

最後のだけおかしい!?

「で、でも私普通の人よりも運動神経いいよ!」

「蓮兄も運動神経メツチャいいで?」

「でも私血も飲むし!…輸血パックでだけど…」

「鉄分足りてないの?ホウレンソウを食べなさい!」

……もうヤダ、この関西娘…orz

話がかみ合ってるようでかみあってない……

「すずかちゃん、大丈夫?」

「…大丈夫じゃないけど大丈夫…じゃあはやてちゃんは私の事を嫌ったりしない?」

「当たり前やん!私とすずかちゃんは友達だよ!」

「はやてちゃん……」

「ん？どないしたん？すずかちゃん」

「蓮さんも私の秘密を聞いても今まで通りでいてくれるかな？」

「蓮兄い？うーん…蓮兄いの事だからあっさり受け入れるんとちゃ
う？」

「はやてちゃん軽すぎるよう……でも納得しそつ……」

蓮さんお姉ちゃんの作った警備システムやノエルさんの正体を知っ
てもあっさり受け入れたらしい……ってファリンさんが言ってた……

……なんでだろう…はやてちゃんがニヤニヤしてる

「どづしたの？はやてちゃん」

「すずかちゃんって蓮兄いのこと好きなん？」

私が蓮さんを？うーん……

「分かんない、どっちかって言うとお兄さんみたいなイメージの方が強いかも……」

「ふーん……ま、いつか…それじゃ蓮兄いが来るまでスマ　ラしよう！今度は負けへんで！」

「ふふっ、いいよまた私のスネークで倒してあげる……」

蓮さんが来たら私の秘密を打ち明けてみよう……そんなことを考えながら私とはやてちゃんはW　iの電源を入れた

EP13・・・明かされた秘密〜それでも私達は友達だよ〜（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

蓮「話の内容が強引だな…」

はやて「若干無理やり感がある…」

作者「なんでそんなに辛口なの？」

蓮「この作品を呼んでくれている読者の意見を代弁してんだよ。」

はやて「感謝してね」

作者「orz」

はやて「落ち込んでないで感想のお礼いくで！」

蓮「竜王さま、HALさま、ZEROさま、アーバレストさま、ダブルクエスチョンさま、ユタさま、TRさま、感想ありがとうございます！良かつたじゃないか作者！感想くれる人が増えたぞ！」

はやて「トークしまshow！の方の応募もいっぱい来てるで！」

作者「本当に嬉しい限りです。皆様ありがとうございます！」

蓮「所で作者、本編ではやての行っていたネタは何だ？」

作者「空想具現化は月姫、死の河はヘルシング、ノーサイドリパース無規律反転回る世メリーゴー

アラウンド

界は吸血奇譚ムーンタイズのネタだな……」

はやて「ムーンタイズ？」

作者「18歳以上の大きなお友達はドラクリウスでも可。」

蓮「ハヤテがやたらやれやれ言ってたやつか……」

はやて「持つてるんや…並行世界の私…所で作者さん、この話を書いた理由は？」

作者「すずかなのはにとってのフェイトの様な無二の親友の様な立場を確立するため……」

蓮「つまり原作でのなのはとフェイトのようにすずかとははやてが同じベクトルで……」

作者「それは無い。」

はやて「作者さん、次回は？」

作者「次回は時間が飛んではやてが倒れる。」

蓮「マジで!?!」

作者「マジです。」

はやて「じゃあ今回はこの辺で……」

蓮「感想、ご指摘お待ちしております!」

作者「『夜天を受け継ぐもの』皆でトークしまshow!』のラボの応募も受け付けています!」

蓮「『夜天を受け継ぐもの』皆でトークしまshow!』は俺こと八神蓮と八神ハヤテが応募のあった作品の主人公達とフリートークをすると言った感じの作品です。作者の感想のところに作品名とキャラの名前を書いてくれればOKです。」

はやて「待ってます!」

蓮「それでは皆さん!」

作者「次回もお楽しみに〜!!」

はやて「全てを破壊し、すべてをつなげ!」

作者「アニメかと思ったらまさかのディケイド!」

EP14・・・急変物語は加速する（前書き）

作者「今回は少し短めです。」

蓮「そうか…まあ作者だしな……」

作者「馬鹿にしてるよね？それ馬鹿にしてるんだよね!？」

蓮「それではどうぞ!」

EP14・・・急変く物語は加速するく

く蓮sideく

ガラガラ…

引き戸の戸を開け、部屋に入る

清潔さを感じさせる白を基調とした部屋、部屋には部屋と同じ白を基調としたベット、その近くには小さな棚付きの台がありその上に小さなテレビが置いてある

そのベットの中にはやてが安らかな寝息をたてて眠っている

そうついにはやてが倒れてしまったのだ。

その為俺はすぐに石田先生に連絡を入れ、はやてを病院に連れていったのだ

検査の後石田先生にはやての入院が言い渡された

石田先生は原因は良く分からないと言っていたが、俺には分かっていた

原因は闇の書だ……

はやてが倒れたのは闇の書の完成が近づき、その覚醒のためにさらにはやてから奪われる魔力の量が増えたためだと俺の世界のリインフォースが言っていたのを覚えている

先程石田先生にも下半身の麻痺が近づいていると聞かされた

自分の無力さに怒りがこみ上げてくる

はやての麻痺の原因を知っているのに自分ではどうしようにもできない……

マスター。

不意に暁の書から念話が発せられた

なんだ？

マスターのスキルの回復具合はいかがですか？

俺が元の世界で管理局の上層部に与えられた能力はこの世界に来るときに夜天の書を改変するときと超長距離転移魔法の影響で大半が使用不能、もしくは能力に制限が付いていた。

ちなみに暁の書には俺のスキルについては説明済みである

あまり良い方じゃない……使用可能なのは『王冠』の《強化》、『慈悲』の《治癒》、『峻巖』の《分析》、『無感動』の《鈍化》、

『色欲』の《幻惑》、『貪欲』の《分解》、『不安定』の《混乱》、
『物質主義』の《創造》どれもスキルのみで開放は無理だ……

正と逆の同時使用はどうですか？

まだ駄目だ。正と正、逆と逆の同時使用なら問題は無いんだがな

……

時期的にそろそろ楽観視できなくなってきましたし…最低でも『
醜悪』の《革変》のスキル解放、正逆の同時使用…これができない
と闇の書のバグを直せませんし…

最悪、《分解》ですべて消すしかないな……所でシグナム達の様
子はどうだ？

ここでもシグナム達とは暁の書の中に居るシグナム達の事だ

シグナム、シャマル、ザフィーラは全く問題ありません。身体、
精神共に安定しています。ヴィータも精神面では先の3名ほどでは
ありませんが安定しています。しかし……

リインフォースツヴァイか？…

病院内だと言うのに大声を上げるシグナム、ヴィータ、シャマルの頭をハリセンで引つ叩く

「痛ってえな蓮！叩くことねえじゃねえか！」

「ヴィータ、病院で騒ぐな、ほかの人に迷惑だろうが。」

幸いはやての病室は個室なので同室の人の迷惑というのは無いが隣の病室には迷惑になってるだろうな……

シグナムとシャマルは叩かれた頭をおさえている、シャマルに至っては涙目だ…そんなに強く叩いてはいないんだけど…

シャマル、お前達は石田先生から話は聞いているか？

いいえ、はやてちゃんが倒れたって聞いて真っすぐこっちに来ましたから……

なら、今から石田先生の診察の結果とはやてが倒れたことについての俺の意見を言う。

俺は念話でシャマルに診察の結果とはやてが倒れた原因を話した

闇の書が……この事をシグナム達には？

シグナムはともかくヴィータには石田先生の診察の結果だけ言ってくれ。ヴィータの事だ、暴走する可能性を否定できない。

ヴィータの事だはやての容体が悪化する前に！とか言っつて魔導師の方に手を出す可能性がある。

この前、別世界でシグナム達の前に現れたフェイトが例の仮面の男に蒐集されたらしいし……

ただでさえ管理局に犯罪者扱いされていると言っつのにこれ以上はやての罪が追加されてたまるか！

魔法生物を襲うより魔導師を襲う方が罪が重いのだから……

「う、うん？」

俺がそんなことを考えていた時、はやてが目を覚ました

「はやて！」

その瞬間、ヴィータがはやてに飛びついた

おいヴィータ、はやては病人だぞ？いきなり飛びつくなよ……

「はやてちゃん、大丈夫ですか？」

シヤマルも心配した顔ではやてに声をかける

「大丈夫やよ、まだちょっとクラクラするけどもう大丈夫や！」

「そうか、けど石田先生が様子を見るためにしばらく入院だそうだ。」

「え〜！入院！？蓮兄い、それ本当なん？」

「本当だ。今からはやての着替えなんかを家から持ってくる、着替え以外に持って来てほしいものはあるか？」

はやては顎に手を当ててうーんうーんと唸り、そして……

「ぱんにゃ！前に蓮兄いの作ったぱんにゃの人形持ってきて！」

ぱんにゃとはとある漫画に出てくる猫？の様な生物で何故か鳴き声が『うりゅ〜』という変な生き物である

以前はやてがその漫画を読んでいて「ぱんにゃのぬいぐるみが欲しいな〜」と言っていたので俺が作ったのを覚えている

ぬいぐるみが完成した後、通販でぬいぐるみが売っているのを見てorzになったのは今ではいい思い出だ。

俺がorz状態時にはやてが5〜6個買っていたのもいい思い出だと思う……

「それは普通のサイズの方だよな？キングじゃないよな？」

キングとは通販で売っていた巨大なぱんにゃのぬいぐるみで一般には『キングぱんにゃ』と呼ばれている。

大きさは普通のぱんにゃの約3〜4倍もあり頭？の部分には王冠が付いていると言う豪華なぬいぐるみである

はやてが値段を気にせずふたつ買ったのを覚えている。

「普通の方やよ〜キングはでっかくて持ってくるの大変やん。」

良かった。ここでキングの方って言われたら…結構でかいんだよキングは……

「わかった。じゃあ俺は先に家に戻るから……」

そう言って俺は病室を出た……

EP14・・・急変物語は加速する（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」

蓮「短い。」

作者「一言で簡潔にまとめられた」

ハヤテ「実際短いしな」

作者「今回は、蓮の実の妹のハヤテさんに来ていただきました。」

蓮「はやては入院中だしな……」

作者「まずは感想のお礼から！」

蓮「HALさま、ZEROさま、絡操人形さま、怒離留さま、TR
さま、アーバレストさま。感想ありがとうございます！」

ハヤテ「言いたいことがあるんやけど、言っていていい？」

作者「なに？」

ハヤテ「並行世界のウチどんだけぱんにゃ買ってんねん！」

蓮「普通サイズのぱんにゃが6つにキングぱんにゃがふたつだな……」

作者「確か普通サイズが約8000円でキングが完全受注で1つ約
15000円だったか？ちなみにぱんにゃについてはネットではぱん

にゃ、もしくはましろ色シンフォニーで検索すれば画像が出ると思う。」

ハヤテ「ウチも1個欲しい!」

蓮「わかった、わかった。今度作ってくるから……」

ハヤテ「絶対やで!」

蓮「わかったって……作者次回は?」

作者「未定。」

蓮「は?」

作者「やがみけを挟むか本編を書くか未定。」

ハヤテ「素直に本編書けばええやん?」

作者「ま、いつか今回はこの辺で!」

蓮「流すな!……感想、ご指摘お待ちしています!」

ハヤテ「『夜天を受け継ぐもの』皆でトークしまshow!』の
コラボの応募も受け付けてるで!」

作者「『夜天を受け継ぐもの』皆でトークしまshow!』は八
神蓮と八神ハヤテが応募のあった作品の主人公達とフリートークを
すると言った感じの作品です。私の感想のところに作品名とキャラ
の名前を書いてくれればOKです。」

蓮「待ってます！」

ハヤテ「それでは皆さん……」

作者「次回もお楽しみに……！！」

ハヤテ「次回もサービスサービスウ！」

蓮「エヴァンゲリオンか……」

作者「最近この締めにも慣れてきたな……」

閑話 やがみけ くその5く(前書き)

作者「お待たせしました。ようやく更新です。」

蓮「今回はあとがきでお知らせがあります」

はやて「それではどうぞ」

閑話 やがみけ ～その5～

『やがみけ～はやての入院生活～』

これはハヤテが入院した2週間の出来事である

『入院1日目』

蓮「はやて～着替えと頼まれたもの持ってきたぞ～！」

はや「あ、ありがと蓮兄い！持って来てもらったところ悪いんやけど他にも持って来てほしいものがあるんやけど、ええか？」

蓮「まあ俺も暇だからいいけど何？」

はや「ここに書いてあるからよろしく～」

蓮「……多くないか？」

はや「全然」

『入院2日目』

石田「はやてちゃんそろそろ検診の……何してるのはやてちゃん？」

はや「あ…石田先生。ちょっと退屈やったんで…」

石田「蓮さん？」

蓮「いや…はやてがどっしてもと…」

石田「だからってプラモデルを持ってくるんじゃないませ〜ん！」

はや「え〜〜〜！」

はやてのベッドの脇には『ガン ラ』の箱が4つ積み上がっていた

『入院4日目』

はや「よし！本体の素組みは終わり！仕上げと改造は退院してからやな！」

ヴィ「はやて〜！…ん？はやて、何作ってんの？」

はや「ガンブラ」

ヴィ「へえ〜これがねえ……でもはやて、同じ箱がいくつもあるのはなんで？」

はや「もちろんビットを全部動かせるようにするためやん。最終決戦ようにするからさらに4個動かせるようにせなあかんしな。」

ヴィ「??良くわかんねえ……」

はや「その内教えたるよ」

『入院6日目』

すずか「はやてちゃん、具合はどう？」

はや「あ、すずかちゃん！見ての通りや！」

すずか「何作ってるの？ガンπρα？」

はや「その通りや！今はアストレアF2作っとるんよ。」

すずか「フォン様の？」

はや「フォン？誰やそれ？」

すずか「あれ？はやてちゃん、OOの外伝は読んでないの？」

はや「あゝまだ読んでへんなあ……」

すずか「そうなの？じゃあ明日、私を持ってくるね！」

はや「ありがとう……」

『入院8日目』

蓮「はやて〜調子はどつだ?」

はや「…ああ蓮兄い…」

蓮「はやて!どうした!?!何があつた!?!」

はや「いや…何でもないんよ……そだ、蓮兄い……これ持って行ってくれへん?」

はやては1体のプラモデルを蓮に渡す

蓮「?良く分からないけど持って帰ればいいんだな?」

はや「うん。あ、あとウチの音楽プレーヤー持って来て!」

蓮「わかった。それとはやて、夜はちゃんと寝ろよ?さっき石田先生がぼやいていたぞ?」

はや「気をつけまーす。」

『入院11日目』

石田「さて……蓮さん、シャマルさん……はやてちゃん（アレ）……
どうにかありませんか？最近ずっとああなんです……」

シャ「あ、あははは……」

蓮「すいません、石田先生……」

石田、蓮、シャマルがはやての病室を覗くと分厚いカタログを凝視
しているはやてがいた

はや「やはり企業ブースから攻めるか？いやいや、新刊はすぐなく
なるからなあ……ブツブツ……」

石田「あんな調子なんです……」

シャ「あれ何やっているんですか？」

蓮「……あー（どう見ても冬コミの準備だろうな……）石田先生、大
丈夫ですよ、年末を過ぎれば元に戻りますから……」

石田「はあ…そうですね…あ、そろそろ時間ね…はやてちゃん！そろそろ診察よ〜！」

はや「最悪私がいけない可能性もあるからシグナム達にファンネルになってもらって…あ、は〜い！今行きま〜す！」

『入院12日目』

病院の一室…そこで人知れずある会議が行われていた

石田「ではこれより…第14回、八神はやて対策会議を始めます…
…まずは被害状況から…」

看護師A「現時点で新人の女性看護師4名が胸、お尻を触られたという報告が寄せられています。」

看護師B「他にはほかの子供の患者とどこから持ち出してきたのかは定かではない家庭用ゲーム機で遊んでいるという目撃情報が…」

看護師D「他の患者からは『本当に病人か？』という疑問の声も上がっています。」

石田「そう…今回は特にひどいわね…」

看護師C「親戚の方達がいると聞いたので少しはマシになるかと思
ったのですが…」

石田「変わらなかった…わね…」

看護師A「どうします?」

石田「引き続き見回りの強化を、新人の方達はあまり接触しないよ
う心掛けてください。」

看護師B「わかりました。」

石田「接触した場合は即座に一定の距離をとりなさい。あの子の間
合いに入ったら確実にやられるわ!」

看護師C「了解!」

石田「では…今日も1日頑張りましょう!…」

看護師一同「……はい！！」

という会議があったとかなかったとか……

『入院14日目 守護騎士達の話』

……何処かの無人世界……

シグ「主が倒れてからもう2週間か……」

ヴィ「はやて……大丈夫かな……」

シャ「はやてちゃんのためにも一刻も早く闇の書を完成させましょ
う！」

ヴィ「蒐集の最中で闇の書に変な呪文が出てこなければもう少し気
合が入るんだけどなあ」

ザファイ「確かにな……」

シャ「この前は『俺がガンダムだ!!』とか出てましたね…」

シグ「前に主が見ていた…あにめと言つのにそうだったのがあったな…あまり思い出したくないが…」

シャ「あれは大変でしたね…」（遠い目）

ヴィ「死ぬかと思った、精神的に…」

ザファイ「……………」

シャ「その割にはヴィータちゃんよくはやてちゃんと一緒にアニメ見てたじゃない？」（ニヤニヤ）

シグ「確か『ガオ イガー』見て影響されていたな？」（ニヤニヤ）

ヴィ「うっせ！いいじゃねえか別に…シャマルこそ年甲斐もなく『プリ ユア』見てたじゃねえか!!」

シャ「意外に面白くってつい…………ヴィータちゃん？年甲斐もなくなつてどういう事？」（笑顔なのに目が笑ってない）

閑話 やがみけ くその5く(後書き)

作者「いかがだったでしょうか？」

蓮「……」

ハヤテ「……」

作者「なんか言ってくれ!？」

蓮「まずは感想のお礼から行きます。」

作者「流すな!」

ハヤテ「HALさま、White Sealさま、アーバレストさま、フレイスさま、ZEROさま、サトツチさま!感想ありがとうございます!」

作者「ここでこの作品を呼んでいる皆様にお知らせがあります!」

蓮「なんだ?いきなり」

作者「しばらくの間、『夜天を受け継ぐもの』皆でトークしまsh
ow!」の応募を止めます!」

ハヤテ「ほんまに急やな?なんで?」

作者「応募数に対して執筆が追いつかないという何とも情けないという理由からです。」

蓮「本っ当に情けないな？」

作者「と言つ訳で現時点までに応募してくれている方を載せるまで応募をいったん停止させるということになったわけです。」

ハヤテ「皆さますみません……」

蓮「本当にな…それでは今回はこの辺で！」

作者「感想、ご指摘お待ちしております！」

ハヤテ「それでは皆さん……」

作者「次回もお楽しみに……！！」

ハヤテ「これで決まりだ！」

蓮「今度はW！？」

作者「オーズでも良い気がするけどな……」

EP15・・・涙ぐ俺達がいる（前書き）

蒼影「グダグダしてます。」

蓮「どうにもならなかったのか？」

蒼影「今の私にはこれがいいです…これよりいい会話を思いついたら書きなおすと思います」

蓮「…それではどうぞ。」

EP15・・・涙、俺達がいる

蓮 side

「はやて、体の具合は大丈夫か？」

俺がはやての病室で待っているとはやてが石田先生に連れられて病室に戻ってきた

いつもはシャマルか、ヴィータが付いているのだが蒐集で今はいない。

念話ではもうすぐこっちに来ると言っていた

「あ、蓮兄い来てたん？もしかして待ってた？」

「いや、大丈夫だ、はやて」

「それじゃ、はやてちゃん…私は他の患者さんの所へ行くから…」

そういつて石田先生は病室から出ていった

「はやて…本当に大丈夫か？」

俺ははやてをジッと見て言った

「大丈夫だよお〜さつきも言つたやん……」

はやては笑った顔で手を振りながら答える

俺ははやての肩を掴んで

「はやて…本当のことを言ってくれ」

真剣な顔でさらに聞いた…なぜなら俺には…

はやてが本当に大丈夫には見えなかった

薄れてきている記憶の中のはやてもあのとき…こんな表情かおだったか
ら…

「蓮兄い……」

はやては顔を伏せ…いまにも泣きそうな顔で言った

「蓮兄い…私…時々思うねん…本当に治るんやろかって…」

はやての言葉を俺は黙って聞く

「石田先生を信用してないってわけやなんいんや！けど…」

「…けど？」

「夜…時々考えてまうんよ…もし、足が治らんかったら…もし、そのまま死んでしまったらって…」

「はやて………」

「蓮兄いやシグナム達と会おう前やったらそれでもええと思ってたのに……なんで…やろ…今ではとて

も怖いんよ………」

はやての声に嗚咽が混じり始める

「私は……怖い……怖いよお……蓮兄い……」

はやては堪えきれず、泣き始めてしまった

ギョッ……

俺はいつの間にかはやてを抱きしめていた

「蓮……兄い……?」

はやてはいきなり抱き締められてキョトンとしている

「はやて……大丈夫だ。はやては死なないよ。」

「蓮兄い……でも……」

「そんなことにならないように俺やシグナム達が守ってやるから。はやては気にするな」

「蓮兄い……」

はやては涙を拭い

「ありがとう蓮兄い！少し元気出たよ。」

はやては笑顔でそう答えた

その時石田先生が部屋にやってきた

「蓮さん、そろそろ面会は…」

「ああ、もうそんな時間か…じゃあはやて、またくるよ。」

「うん！あつ、蓮兄い！あんなすずかちゃんがクリスマスイヴにお見舞いに来るって！」

イヴって言うと明後日か

「そうか、楽しみだな…」

「うん！」

はやての笑顔を見ながら病室の扉を閉めた…

.....

.....

.....

.....

.....

「はやてちゃんの麻痺なのですが……」

はやての病室からしばらく歩いたところで石田先生かそう切り出してきた

「やっぱり、麻痺の進行が進んでいるのですか？」

「はい、このままだと近いうちに麻痺が内臓まで届き、最悪の場合……」

石田先生がそこで顔を伏せてしまう

もう闇の書の浸食がそこまで来ているのか…

でも、その最悪の場合が起きないようにシグナム達が頑張っているのだから…

そうならないように、俺達がいるのだから…

「そうですか……」

俺はそのまま病院を後にした

EP15・・・涙ぐ俺達がいる（後書き）

蒼影「グダグダしてるなあ〜」

蓮「一気になのは達と会うところまで飛ばせばよかったんじゃない？」

蒼影「その前にこういった話を挟んだ方がいいかなと」

蓮「結局失敗したと？」

蒼影「申し訳ない…」

蓮「それでは感想のお礼から」

蒼影「ラグネルさま、HALさま、フレイスさま感想ありがとうございます。」

蓮「本当に感謝しています。」

蒼影「所でさあ…」

蓮「なんだ？」

蒼影「今回、このあとがきにゲストがいるんだけど…」

蓮「なんでそれを早く言わない!？」

蒼影「向こうでハヤテと話をしてるんだけど、呼んでいい？」

蓮「早くしろ！待たせるな！」

蒼影「わかった。ハヤテももう良いぞー」

ハヤテ「やっとかいな、随分待ったで！」

ユウキ「どうも。」

ティアナ「こんにちわ……」

ハヤテ「と言う訳でフレイスさまの所のユウキ君とティアナが来ました〜ドンドンパフパフ〜」

ティアナ「あはは……こっちはやて部隊長もとばしてますね……」

ユウキ「さっきまでずっとアニメの話が聞かされてたよ……」

蓮「ごめん……迷惑だった？」

ユウキ「そんなことは無い、ちょっと驚いただけだ」

ティアナ「私も、迷惑じゃないですし……」

蒼影「蓮〜〜！」

蓮「なんだ？こっちは勇気達と話してお前に構ってる暇は無いんだが？」

蒼影「『やがみけ』を別の小説扱いで投稿しようかと思ってるんだ

けど…どうする?」

蓮「なんで今聞く!?そして俺に聞くな!」

蒼影「ユウキ君達はどっ思う?」

ユウキ「いや…」

ティアナ「私達に振られても…どう答えたらいいのか…」

蒼影「じゃあ読んでる人達に聞く!もし良ければ感想の部分に意見を聞かせてください!」

蓮「おい!?!」

ユウキ「偉くフリーダムな作者だな…」

ハヤテ「いい加減にせい!ラグナロクブレイカ!」

蒼影「ちょ!おま!?!」

ピチユーン!!

ユウキ「おい、作者ピチユったけどいいのか?」

ハヤテ「気にせんでええよ。ここは色々常識を無視してるからその内復活するから!」

蓮「とりあえず…この辺で!」

ハヤテ「感想お待ちしています！…ユウキ君、ティアナ。ここ！ここ読んで！」

ティアナ「え？えつと……」

ユウキ・ティアナ「次回もこの小説でファイナルフュージョン承認……」

蓮「今度は勇者王か……」

EP16・・・聖夜〜覚醒した二つの書〜（前書き）

蒼影「こっちもよつやく更新だぜ！」

蓮「遅すぎるだろう…」

蒼影「すいません…その文いつもより長めに書きました…多分…」

蓮「それではどうぞ」

6 / 10 一部修正

EP16・・・聖夜〜覚醒した二つの書〜

〜蓮side〜

「そついえばはやて、今日だっけ？すずかちゃんがお見舞いに来るの？」

「あ〜そつやったわ！」

12月24日：いつものようにはやてのお見舞いに来ていた俺はふと、今日すずかちゃんが来る事を思い出した

「何時に来るか知ってるのか？」

「ううん…わからん…多分急にやってきて私を驚かそうとしてるんじゃない？」

「そつか…でもそろそろ3時すぎだぞ？」

俺が時計を見ると既に時刻は既に3時を30分を過ぎていた

その時…

「はやてちゃん、具合はどうですか？」

「はやて〜！」

「主、遅くなりました。」

シグナム達が病室に入ってきた

「あ、皆！今日はいつもより早いな〜どうしたん？」

「今日は偶々早く用事が終わりました…」

俺はシグナムに念話を送った

ザフィーラはどうした？家に居るのか？

ちなみにはやてがザフィーラがいない事を聞かないのはザフィーラが病院に来れないのを知っているからだ。

狼形態では言わずもがな、人間形態でも生えている耳と尻尾の所為で外を出歩けないからだ。

ザフィーラはまだ戻っていない、かなり遠くの世界へ行っているからな…それに主はやてはまだ家に戻らないからな…ザフィーラはギリギリまで蒐集を行っている…

そうか…

俺とシグナムが念話で会話をしているうちにはやてとヴィータの会話も終わったようなので

「はやて、俺は一旦家に戻るぞ？夕食の買い出しや、はやての着替えも持ってこなければならぬから」

「あゝそういえば前に着替え持ってきてもらってからもう1週間経つなあ」

「そういうわけだ、みんな、はやてを頼むぞ？」

「はい…」

「おう！」

シグナム達にそう言って俺は病室を出た

.....

.....

.....

.....

.....

はやての家に向かう途中俺は神威、暁の書とともに年輪で今後のことを相談していた

さて、もし俺の世界と同じようになるのなら今日あたり闇の書が覚醒してしまうな……

ならば主、なぜはやて嬢から離れたのですか？

神威の疑問はもっともだ。今日中にも闇の書が覚醒してしまう可能性があるのなら常にはやての傍に居たほうがいいはずなのだから……

確かにそうだな…俺が離れた理由はこうやって考えをまとめることと、もう一つ……

あの仮面の男のことですね？マスター…

そうだ、こうして一人で行動していれば向こうから接触してくるかもしれないからな…

シグナムの話だとフェイトと交戦したとき突然現れてフェイトのリンカーコアを抜き出したり、その少し前にはヴィータの前に現れて、なのはの砲撃から守ったりと俺から見れば意味のわからない行動の数々だ

俺はその真意を確かめるために時折こうして単独行動をしているわけだが…

現れるのでしょうか？

それはわからない…と言いたいところだがお出ましのようだ

神威の質問に答えていたとき、丁度俺の周りに閉鎖型の魔法結界が展開され、俺の目の前にあの仮面の男が現れた

「久しぶりの対面…だな？仲間たちが世話になったようだ…」

「……………」

「お前はいったい何なんだ？敵なのか？味方なのか？」

「……………」

見事なくらい反応がないな…その時

「お前は、私たちの計画の邪魔だ」

男がそう言った瞬間、俺は背後から衝撃を受けた

「なに！？」

倒れながら後ろを見るとそこにはもう一人、俺の前にいた男と瓜二つの男が立っていた

.....
.....
.....
.....
.....

くはやてside

はつきりいつて意味がわからなかった

そもそも今日は変や

今日、蓮兄いが帰った後、入れ替わるようにすずかちゃんたちが入ってきたから変やった

シグナム達がすずかちゃんの友達だと言っていたのはちやんとフ
イトちゃんを見てからシグナムたちの顔が怖くなって、なのはち
やんたちもシグナム達を見て気まずいような困ったような顔をして
いた

そのまま気まずそうな雰囲気の中みんな明日のクリスマスについて
しゃべっていた

すずかちゃんたちが帰った後、シグナム達も少し用があると行って

病室を出て行ってしまった

なかなかシグナム達が戻ってこないからもう寝てしまおうと思ったとき、急にわたしは浮遊感のような感覚を味わった瞬間、いつの間にか周りは私のいた病室ではなく病院の屋上だった

「え？ここって屋上？」

無意識にわたしは声に出していた。その時…

「はやてちゃん…」

急に名前を呼ばれてそっちを向くとそこには…

「なの…はちゃん？」

「わたしもいるよ、はやて」

「フェイトちゃんも…」

なのはちゃんとフェイトちゃんが杖を持って宙に浮いていた…テレビに出てくるような…それこそ魔法少女のような格好で…

そして二人の間にヴィータと蓮兄いが意識を失っているのかぐった
りした様子で浮いていたのだ

なのはちゃんたちの足元にはザフィーラが倒れていた

「ザフィーラ！ヴィータ！？蓮兄い！！？」

私はみんなに呼びかけるけど、全く反応しない

「はやてちゃんはね…病気なんだよ？」

不意になのはちゃんがわたしに声を掛けてきた

「闇の書の呪いっていう病気…」

フェイトちゃんが続くように話す

「その病気はね…もう治らないんだよ？」

「えっ？」

突然言われたことにわたしは一瞬思考が止まってしまった

「つまりね…はやてちゃんは死んじゃうんだよ…」

なのはちゃんの言葉を聞いて蓮兄いのあの言葉がよみがえる

『大丈夫…はやては死なないよ…』

あの言葉を思い出して私は首をブンブンと横に振った

「この人のこと思い出したの？なんだっけ？『はやては死なない』
だっけ？」

なぜなのはちゃんがその言葉を知っているのかわからないけど私は
なのはちゃんを睨みつけた

「怖いなあ、はやてちゃんは…まあこの人がはやてちゃんに何を言
ったかなんて私にはどうでもいいんだよね…でもさ、はやてちゃん
は死んじゃうんだし、この人たちも消しちゃっていいよね？はやて
ちゃんの後ろの二人の守護騎士みたいにさ？」

なのはちゃんに言われて後ろを向くとわたしは言葉を失った…

そこにはシグナムとシャマルの服だけが風に靡いてそこにあった

「愚かだよな？闇の書の本来の名前も忘れてるのに…自分たちも闇の書の呪いの一部だって言うのに…治りもしない病気を治そうとしてさ…だから、私たちが消しちゃった」

フェイトちゃんが三日月のような笑みを浮かべてそう言った

「だからさ、この人たちも消しちゃっていいよね？」

フェイトちゃんがそういうといつの間にか手に持っていた闇の書を
ヴィータ達に向けた

するとヴィータとザフィーラがうめき声をあげながら少しずつ光粒
のようになつて闇の書に吸い込まれていく

「なにしてるんや！やめてー！」

「やめてほしければ止めに気なよ？」と言って、もう終わっちゃっ
けどね…」

フェイトちゃんが言っている間にヴィータもザフィーラももう肩から下が消えていた

私は必死に動かない下半身に鞭を打つ思いで張って近づくと

「いや…いやや…なのはちゃん、フェイトちゃん…何でこんなことするんや…やめて…やめてよお…」

わたしは涙を流しながらなのはちゃんたちに懇願する

「駄目だよ…もうこれは決まったことなんだもの…」

なのはちゃんが言い終わると同時にヴィータとザフィーラは完全に消えてしまった

「あ…あぁ…」

わたしは言葉が出なかったするとフェイトちゃんが突然杖から黄色い鎌の形をした光の刃を出して、蓮兄いの前に立った

「じゃあ、この人も消しちゃおうか…」

フェイトちゃんがその鎌のような刃が出ている杖を振りかぶる

「いや…いやあ…お願いや…蓮兄い手を出さないで！わたしにできる事なら何でもするから！！」

わたしは必死に叫ぶ、その時なのはちゃんが口を開いた

「何でも？」

わたしは必死に首を振って肯定する

それを見たなのはちゃんがニタアと笑いながら

「じゃあ、この人が死ぬのを黙って見ててよ」

「いやあ…いやあ！お願いや！それだけはやめてええ！！」

「はやてちゃん…運命って…残酷だよね？」

フェイトちゃんがそう言って鎌を振り下ろし、蓮兄いを切り裂いた

わずかに霞む視界のまま顔を上げるとそこにはあの仮面の男たちが俺に背を向けて何かを話していた

「覚醒したな…」

「ああ…予想より覚醒が遅かったが、そのおかげで私たちはここまで距離を置くことができたんだ」

「ではやるか、私たちの…お父様の悲願を達成するために！」

そういつて男の一人が懐から一枚のカードらしきものを取り出す

男たちを見ていたとき俺の脳裏に昔の記憶がフラッシュバックのよう
うに蘇ってくる

なぜ忘れていたのか疑問に思うほど大事な記憶…俺がまだ11才の
ころ…ハヤテの闇の書が覚醒したあの日…

「そつだ…思い出した…」

俺の声が聞こえたのか、男たちが振り返る

「貴様！まだ生きていたのか！？」

「クソ！止めをー！！」

「思い出したよ……お前たちは……オレノ敵ダ！《拒絶》解放！」

瞬間、男たちが何かに拘束され、地面にたたきつけられる

それは手だった人の背ほどもある巨大な手……見た目は人間の腕というより悪魔の手と言ったほうがしっくりくる形の手だった

俺の周りを黒い霧のようなモノが包みその霧は俺に纏わり、漆黒のローブになった

「貴様……一体何を……！」

「ダメレ……」

自分の声かと疑うほど無機質な声……そのまま俺は仮面の男の前に立った

「ドウシテ、ワスレテイタノダロウ…オレノ世界デモ、オレハ、アンタタチニ…リンカーコアヲ吸ワレタジヤナイカ！」

「『俺の世界』？何を言っている！？」

「カンケイナイ。オマエタチニハ、悪夢ヲミセテヤル…」

俺は片手で男の頭を持ち上げる、もう一人の男も同様に反対の腕で持ち上げる

「スキルナンバー7リバースセブンi《幻惑》9リバースナインi《混乱》同時発動…」

俺がそういうと男たちは悲鳴を上げ始める

手を離すと男たちは首を振り乱しながら悲鳴を上げ続ける

すると男たちが光り、光が収まるとそこには猫の耳を頭にはやした2人の女性がいた

「ナルホド…使い魔ノタグイダッタノカ…ソレニシテモ、モウ意識ガ飛ンダノカ？情ケナイナ……」

俺はスキルを解除すると同時に俺に纏わりついてた黒いローブも消え去っていた

「はやて…覚醒したのか…早く行かないと」「待て!!」…何の用だ？執務官」

俺の背後にクロノが降りてきた

「ロツテ！アリア！なぜここに！？お前、二人に何をした!?!」

「質問に質問を返すのか？そんなことはどうでもいいか…話はそいつらに聞きな、最もしばらくは喋れないだろうけど…」

《混乱》で相手の精神を不安定にして《幻惑》で相手に悪夢を見せる

大抵の人物はトラウマ確定の技だ

「俺はお前に構ってる余裕はない。行くぞ、暁の書」

「はい、マスター」

俺の手に暁の書が現れる

「俺の杖と騎士甲冑を……」

「はい」

その声とともに俺の体に騎士甲冑が纏われる

騎士甲冑はハヤテの色違い…白のインナーに黒のジャケット

腰には長めのスカートのような布があり黒にところどころ白のラインが入ったズボンだ

そして背中には北欧神話に登場し、『怒りに燃えて蹲る者』の意味を持ち、『嘲笑する虐殺者』の異名を持つ蛇の名を冠した左右3対の真っ黒な蝙蝠を連想させる羽…ニーズヘッグが生えていた。

そして手にはハヤテの持っていたシュベルトクロイツよりも剣十字が鋭くなっているシュベルトクロイツ？が握られていた

「待ってる、はやて！」

クロノの制止の声を振り切り、俺は夜空を舞った

EP16・・・聖夜〜覚醒した二つの書〜（後書き）

蒼影「いかがだったでしょうか？」

蓮「なんとか猫姉妹性格悪すぎない？」

蒼影「いやあ…書いてるうちになぜかあぁなつてた。ロツテ、アリアフアンのみなさんすいません」

はやて「ところで質問があるんやけどいい？」

蒼影「なに？」

はやて「なんで、蓮兄い切りつけられてすぐ目が覚めなかったの？
なんで猫姉妹は蓮兄いを連れて離れたの？」

蒼影「最初の質問は切られたショックで一回蓮は心肺停止して意識が覚醒しなかったから。二つ目は軽いネタばれだけど、蓮は傷を負うとスキルの1つが自動で発動して自分を治癒してくれますそのおかげで何とか地獄の淵から戻ってこれたということ…」

蓮「地獄ってなんだ！？俺地獄行き決定してんか!？」

蒼影「さて次回はようやく蓮VS闇の書になります」

はやて「感想、ご指摘待ってます！」

蓮「無視すんな!」

はやて「次回もこんじょだこんじょ！」

蒼影「それネタ知ってる人いるのか？」

EP17・・・対決〜暁の書対闇の書〜(前書き)

蒼影「皆さんどうも。ようやく更新です」

蓮「遅れた理由を聞こう…」

蒼影「言い訳はしない!」

蓮「ならば逝ね!」

ぴちゅーん

EP17・・・対決！暁の書対闇の書！

「なのはside」

私とフェイトちゃんが何とかバインドとケージから出るとはやてちやんが姿が代わって銀髪に赤い目をした大人の女の人…闇の書さんが立っていた

「また…こうなってしまったか…主の願いをかなえよう…」

すると闇の書さんは右手を頭の上に掲げると右手に魔力が集まって黒い球体が現れた

「なのは、気をつけて、空間魔法が来る！」

フェイトちゃんがシールドを張り、私もプロテクションを展開する

「闇に沈…っ…っ！」

ヒュン…！！ドゴォ…！！

闇の書さんが魔法を発動させようとした時突然私の後ろからものす

「ごい速さで何かを通り過ぎ、闇の書さんの足元の近くに突き刺さった。」

それは杖だったその杖の先には剣のような形をした十字架がついていた

闇の書さんは驚いた顔をしている

「これは…シユベルトクロイツ!?なぜ!?!」

「今のお前には関係ないことじゃないか?管制人格」

声が聞こえて振り返ると、そこには闇の書さんのバリアジャケットを男の人用にした感じのバリアジャケットを纏って背中に6枚3対のコウモリのような翼をはやしたロータスさんが浮いていた

.....

.....

.....

.....

.....

〈蓮side〉

猫姉妹に悪夢を見せた後、全速力ではやてのもとに向かった

しかし、俺が来た頃にはすでにはやては管制人格に乗っ取られていた

「また…こうなってしまうたか…主の願いをかなえよう……」

管制人格はそう言うと手を上にかざし、『ディアボリックエミッシ
ョン』を放とうとする

「やらせるか！」

俺は手に持ったシュベルトクロイツ？を管制人格の足元に投擲する。

ヒュン！！！！ドゴオ！！！！

シュベルトクロイツ？は寸分変わらず管制人格の直前に突き刺さる

管制人格はありえないものを見たような顔をして

「これは…シユベルトクロイツ!?なぜ!？」

「今のお前には関係ないことじゃないか?管制人格」

俺はそう言いながら管制人格に近づく

「あ、あなたは……」

なのはが俺を見て何か言いたげな顔をする

「話は後だ。まずはこいつを何とかする」

俺は管制人格と向き合う

「主の兄よ……主の願いの邪魔をするのなら、容赦はせぬぞ?」

「はっ!主の願いを履き違えてるような奴が俺に勝てると思ってるのか?」

俺が手をかざすとシユベルトクロイツ?が地面から浮きあがり、俺の手に収まる

「闇に沈め……」

「絶望の淵に沈め……」

「「ディアボリックエミッション!!!」」

互いが放った空間魔法が相互干渉を起こし、大爆発が起きる。

「スレイプニール……羽ばたいて……」

管制人格はスレイプニールを展開し空中に舞い上がる

「スキルナンバー10リバーステン《創造》……ニーズヘッグ、高機動モード」

俺の言葉の後に左目に鏡に映したように反転した10の文字が浮かび上がり、シュベルトクロイツ?の剣十字の片側が光に包まれ、光が収まると

大鎌の刃が出現し、背中の翼も4枚2対になっていた

翼をはためかせ一気に管制人格との距離を詰め鎌を振り下ろす

「はあああああ!!」

「障壁…」

ガキイイイイイン!!

鎌がシールドに阻まれるのを確認した瞬間、俺は即座に下方へ旋回、下から切り上げる形で管制人格を切りつける

「っ!?!」

管制人格はそのまま後ろへ下がる形で回避

「穿て…ブラッディ・ダガー…」

すぐさま管制人格はダガーを展開し放ってくる。

「シールド!」

《はい、マスター》

管制人格が放ったダガーをシールドで全て受け止める

「…爆ぜる…」

ドドドドドドドーン！

瞬間、シールドに当たったダガーが次々と爆発していく

あたり一面が爆煙に包まれた

「でああああああ！」

俺はシュベルトクロイツ？の鎌の部分を消しその部分に再びスキルで魔力を結晶化させる結晶化が終わるとそこには分厚い斧のような刃、上部の剣十字の穂先の部分が倍近い長さの鋭い刃になっていた。その形状はまさに斧槍ハルベルトだった

「スキルナンバー1（ワン）《強化》！」

右目に数字の1が浮かび上がり、うっすらと俺の身体に光の膜が覆

われる。

スキルの名の通り、今俺の身体は魔力で強化されている

その強化された腕で斧槍を突き出す

「くっ!?!」

管制人格は煙の中から急に現れた攻撃に若干怯みながらも障壁で防ぐ

ガキイイインン!!

槍の穂先と障壁がぶつかり、甲高い音が鳴る

「防がれるなら、何度でもやっつてやる!」

すぐさま槍を引き突き出す。魔力で強化されたその動きはほんの瞬間であるが残像を生み出すほどの速度だった

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュ……

ガキキキキキキキキキイン!

「ぐ、うう……」

管制人格は呻きながらも障壁で防いでいく

「うおりゃあああ!!」

バリイイイン!

槍による突きから一転、斧での薙ぎ払いで障壁が砕け散る

管制人格はその衝撃を利用して一気に俺との距離をとる

「ダガー!」

管制人格が手を振り上げると今までの比ではない数のダガーが展開される

管制人格は手を振りおろすとダガーが一斉に俺に向かって放たれる

避け切れないと判断し、防御しようと俺が杖を構えたそのとき、

「デイベイイン…バスター！」

桃色の閃光がダガーをすべて消し飛ばした

「ロータスさん！」

見るとなのはがデバイスを構えてこっちを見ていた

「高町譲か？」

なのはに気を向けた際に管制人格が俺と間合いを詰める

「ちい！」

「プラズマ…スマツシャー!!!」

俺と管制人格との間に黄色い雷を帯びた魔力の奔流が通り抜けた

「なのはー！」

案の定フェイトが撃つたのか…

俺は管制人格が飛び退いたを見て暁の書を開く

「え！？それって…」

「闇の書！？」

構わず書かれている呪文を唱える

「貫け、不屈の閃光…デイバインバスター！」

管制人格に向けたシュベルトクロイツ？の先から黒に近い紫の閃光が放たれる

「ええ！？それ私の魔法！」

なのはが何か言っているが今は構っている余裕はない。続けて呪文を唱える

「進れ、雷の奔流…プラズマスマッシュャー！」

今度は雷を帯びた魔力砲が飛んでいく

「今度は私の魔法……」

管制人格はこれも大きく飛んで回避し、俺との距離をさらに開ける
そして、管制人格は闇の書を開き、手を前方へ向けた

「咎人達に……滅びの光を……」

あれは……スターライトブレイカーか!?

俺は一目散に管制人格のもとに向かう

「撃たせるかあああああ!?!」

俺が杖を振りかぶった瞬間……

ドカア!!

使い魔に何本も剣が突き刺さり、二体の使い魔は血を噴き出しながら落下していく…下は海なので運が良ければ助かるだろう

しかし…俺の前には開かれた闇の書…

「主の兄よ…安らかな夢の中で眠れ…」

管制人格がそう呟くと闇の書が光り始める

俺は咄嗟に暁の書をなのはに投げつけた

「高町嬢！そいつを持ってろ！失くすなよ！」

「ロータスさん!？」

なのはの声を聞いた後、俺の意識はそこで途絶えた

EP17・・・対決〜暁の書対闇の書〜（後書き）

ハヤテ「どうも皆さん、いかがだったでしょうか？今回はやても蓮兄も居ないし、作者もぴちゅられたのでウチ一人であとがきをやっていこうと思います」

シイル「と言う訳にもいかないので今回は俺もゲストで参加します」

ハヤテ「シイルさんおひさ〜」

シイル「おひさ〜」

ハヤテ「ではまず感想のお礼から……」

シイル「竜王&竜姫さま、HALさま、感想ありがとうございます！」

ハヤテ「しかしまさか蓮兄いがログアウトするとは……」

シイル「ネコ姉妹もログアウトしたな……」

ハヤテ「いいのかなあ？」

シイル「どうだろう…？そういうえば一個質問」

ハヤテ「何や？」

シイル「鴉の濡れ羽ってどういう意味？」

ハヤテ「ロシア語で絶望の果てって意味があるんよ。作者さんはこの技を作った時確実に戯言シリーズを読んだと思う」

シイル「そうですか…これからどうなるんだろうな…」

ハヤテ「ウチはわからん！」

シイル「この小説の感想、」指摘お待ちしています」

ハヤテ「今回は説明で戯言シリーズが出たのでこれのネタをシイルさんに行ってもらいます」

シイル「俺!？」

ハヤテ「ここに書いてあるのを読みあげればいいから！」

シイル「じゃあ…んんっ！殺して解して並べて揃えて晒してやんよ！」

ハヤテ「かつこいー！」

EP18・・・起動〜紅焰の騎士将〜(前書き)

蒼影「失踪はしてないぞぉー」

蒼影「よじやく書き上がりました。それではどじやく」

EP18・・・起動！紅焰の騎士将！

「なのはside」

ロータスさんが闇の書に吸い込まれた後、闇の書さんはまた手を掲げた

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ……」

その瞬間、闇の書さんの掲げた手に私と同じ桃色の魔力が集まってしまう

あれって、私のスターライトブレイカー!?

「あれって!?!」

私が声に出して言う前にフェイトちゃんが私を抱えて全速力で闇の書さんから離れ始めた

「フェイトちゃん…何もこんなに離れなくても…」

「あの魔法は防御の魔法を簡単に抜いてくる……それに、あのロー」

タスって人が必死に止めようとしていたから用心に越したことはない……」

そう言っつてフェイトちゃんはさらに速度を上げた

闇の書さんがご飯粒くらいの大きさに見えるまではなれたところでフェイトちゃんのデバイスのバルディッシュのコアが光った

《マスター、300ヤード先に一般人の反応がありました》

その言葉を聞いてフェイトちゃんは言われた方向へ飛んで行った

バルディッシュの言われた場所には二人の民間人が確かにいた

遠目で見ても私たちと同じくらいの女の子だった

私たちはその人たちに近づいて

「あの！ここは危ないので今すぐにここから逃げてください！」

フェイトちゃんがその子達に避難を促す言葉をかける

「え？なのはちゃん…フェイトちゃん…？」

「あなたたち……どうして……」

フェイトちゃんの声聞いて振り返ったその子達はすずかちゃんとアリサちゃんだった

私とフェイトちゃんを見て何かを言おうとしていたのだけど、その時……

「スターライト……ブレイカー……」

闇の書さんからスターライトブレイカーが放たれてしまいました

「なのは！」

フェイトちゃんがすずかちゃんたちにドーム型のバリアを展開しながら私に声をかけた

私はハツとしたようにフェイトちゃんたちの前に出てレイジングハートを構えた

フェイトちゃんもバルディッシュを構えた

《ワイドエリアプロテクション》

《ラウンドシールド》

フェイトちゃんの前には円形のシールドが、私の前にはいつもより大きな桃色のバリアが展開された

もうすぐそこに闇の書さんが放った桃色の閃光が大きな津波のように押し寄せてきていた

するとその時、レイジングハートにしまっていたロータスさんの闇の書？が勝手に出てきた

《強力な魔力攻撃を感知…》

《半径500メートル以内に主の生命反応なし…》

《主との魔力リンク…微弱…》

《緊急事態と判断し、暁の書内部の守護騎士プログラムを緊急起動》

《現在起動可能騎士…『こうえん紅焰』・『こうついで轟鎚』》

《守護騎士『紅焔の騎士将』を選択…起動》

そんな音声の後、私の目の前が光って、その光が徐々に人の形になっ
ていく…

濃いめの桃色と白のバリアジャケットに手に持った剣…そして、桃
色の髪を黄色いリボンで縛ったその姿は…

「シグ…ナム…」

フェイトちゃんがその人の名前を呟いていた

そう…そこにははやてちゃんの…闇の書の守護騎士、シグナムさん
が立っていた

シグナムさんは無言で自分のデバイス…レヴァンティンを構えると
レヴァンティンからカートリッジが3発飛び出た

「燃える…天の炎よ…」

シグナムさんの言葉の後、レヴァンティンから刃の周りの景色が歪
んで見えるほど、私も額から玉のような汗が出る程の温度のオレン
ジ色の炎が吹き出てきた

『ベドイトウंक』

レヴァンティンの音声の後、シグナムさんがレヴァンティンを振った

その瞬間、刃に纏われていた炎が闇の書さんのスターライトブレイカーにあたって…

切れた…

スターライトブレイカーは真っ二つに分かれて私の左右を通って行った

「……………」

私は言葉が出なかった

まさか、魔法を切ってしまうなんて

フェイトちゃんも同じ気持ちなのか唖然とした顔だった

「久しいな…いや、こちらでは初めてになるのか…高町、テスト口ッサ」

そう言いながらシグナムさんが私たちのほうへ振り返った

私たちの知っているシグナムさんと違って手甲などの金属の部分が
黄金色になっていて

瞳の色も太陽のような山吹色だった

その時、闇の書さんがこちらに近づいてきた

「お前は…なぜ守護騎士がここに…？」

闇の書さんは驚いた顔でシグナムさんにそう聞いた

「答える義理はないな……時間が無い、一気に終わらせる」

そう言ってシグナムさんはレヴァンティンを構え直した

闇の書さんはそれを見て無言で持っていた闇の書を開くと闇の書さ
んの手にもレヴァンティンが握られていた

「ふっ！」

シグナムさんは一息で闇の書さんとの間合いを詰めた

「はぁ」

シグナムさんはさっきの炎をレヴァンティンに纏わせて振り下ろした
闇の書さんもレヴァンティンで攻撃を受け止めた

けど、シグナムさん剣の熱で闇の書さんの持っていた剣が溶け始めた

「!?!?」

闇の書さんは慌てた様子でシグナムさんとの距離をとった

「...なのは!」

その光景に見入っていた私にフェイトちゃんが声をかけた

「アリサたちを避難させよう!エイミィに通信つなげる?」

「わかった、やってみるよ!」

私とフェイトちゃんがそういう会話をしていた時もシグナムさんと
闇の書さんの戦いは激しさを増していった

いや、シグナムさんの攻撃の激しさが増していった

シグナムさんが剣を振る度に闇の書さんが手に持った剣で受け止めていくけど

シグナムさんの剣に纏われている炎で闇の書さんの剣は溶け、砕けていく

遂に闇の書さんの持っていた剣の刃の部分が砕けて無くなってしまった

そんなとき不意にシグナムさんが口を開いた

「…くっ、もう限界か…」

そうだったシグナムさんを見ると、足の部分が光に変わって消え始めていた

「将よ、もしか魔力の供給が不足しているのか？」

「蓮が書を高町に預けている時点でこうなるのは予想していたのだが、ここまで限界が訪れるのが早いとはな…」

そういうシグナムさんは苦笑いを浮かべていた

「せめて、テストロッサ達が戦いやすいように奴を海の上まで押し出す！」

さつきとは打って変わって少し焦ったような顔でシグナムさんは剣を鞘に収めた

レヴァンティンからまた3発カートリッジが飛び出す

「焰龍…一閃!!」

シグナムさんは剣を鞘から抜き放つと

レヴァンティンは連結刃の状態になっていて刃には陽炎が見えるくらいに炎が灯っていた

シグナムさんの放った刃が龍のようにうねり、闇の書さんを襲う

「くう!!」

闇の書さんはバリアを張って攻撃を受け止めたけど勢いは止められずどんどん海の上まで押し出されていく

闇の書さんは海岸から数キロ離れた海の上でようやく止まった

シグナムさんの身体はもうすでに腰のあたりまで消えてしまっていた

「後は頼むぞ、テストロッサ、高町」

シグナムさんはそういうと光になって消えてしまった

「…なのは、行くっ」

「うん！」

私とフェイトちゃんはお互い頷いて闇の書さんの元へ飛び立った

EP18・・・起動〜紅焰の騎士将〜（後書き）

蒼影「いかがだったでしょうか？」

ハヤテ「安定の短さ」

蒼影「ひどい…」

ハヤテ「それじゃ、感想のお礼いこか」

蒼影「HAL様、鏡花水月様。感想ありがとうございます」

ハヤテ「ところでさ、蓮兄いのシグナム強くない？」

蒼影「その辺の理由は追々本編で説明します。あと、補足ですが蓮のいた世界ではアギトはいませんでしたので…」

ハヤテ「シグナムの二つ名が変わってるのは？」

蒼影「昔の没ネタの中から適当に炎にまつわるものを引っ張ってきました。本来は紅炎…日本だとプロミネンスのほうが分かりやすいと思います」

ハヤテ「『ベドイトウンク』ってなに？」

蒼影「ドイツ語でプロミネンスのことです。技としては紫電一閃の上位の技と違って構いません。ただ、威力と射程が段違いなだけです」

ハヤテ「『焔龍一閃』って何て読むん？」

蒼影「焔龍かりめういっせん一閃と読みます。要は火竜一閃の強化版と思ってください」

ハヤテ「そーなのかー」

蒼影「そーなのだー」

ハヤテ「今回はこの辺で、この小説の感想、ご指摘お待ちしています」

蒼影「次回この小説でファイナルフュージョン承認！」

ハヤテ「『リインフォース?』…これが勝利のカギや！」

EP19・・・夢中〜懐かしい顔〜（前書き）

蒼影「更新が遅れた分、文は長くなってると思います」

蓮「だといいな…」

蒼影「本編で出てくる闇の書、暁の書の説明は私の独自設定兼妄想です。注意してください」

蓮「それではどうぞ!」

EP19・・・夢中〜懐かしい顔〜

（蓮side）

闇の書に取り込まれ、意識を失っていた俺は突然光を感じて閉じていた瞼を開いた

目を開くとそこはさつきまでいた海鳴の景色ではなく、俺にとっては忘れることができない場所…俺の世界でハヤテが逝くのを看取った場所…

第0番世界ミッドチルダ郊外の丘だった

「そうか…闇の書が見せている夢か…」

「そつだよ…蓮くん…」

俺が一人呟くと後ろから聞き覚えのある声が聞こえた

振り返ると同じく見覚えのある女性がそこにいた

栗色の長髪をサイドポニーに纏めて、管理局の教導官の制服を着たその姿は忘れようがない

ナノハがそこにいた

「久しぶりだな…ナノハ」

「久しぶりだね、蓮くん」

俺とナノハは同じ台詞で言葉を交わした

「夢だものな…死んだはずのナノハが目の前にいても不思議じゃないな…」

「そうだね…夢なんだよ…」

そう言ってナノハが俺に歩み寄ってくる

1 m…40 cm

「夢…なんだよね…」

30?…20?…

そして俺とナノハの距離が0になる

「だからさ…蓮くん……」

ギュッ……

「一緒にいようよ…蓮くん」

ナノハが弱々しく俺を抱きしめる

「ナノハ……」

「もういいじゃない…私たちの世界でも蓮くん…あんなに苦しんだんだよ？もういいじゃない……」

ナノハの声に嗚咽が混じっていく

「ここに…ここに居ようよお……」

ナノハの手に力が込められていく

俺は、ナノハの肩に手を置いた

「ナノハ…それはできない…」

「どうして?」

「はやてを助けてやらなきゃならないからな……」

「本当の兄妹じゃないのに?」

「ナノハ、本気で聞いているのか?」

この言葉を言った時の俺はおそらくムツとした顔になっているだろう

「冗談だよ、相変わらずだね…蓮くんは」

「たとえ血が繋がっていなくてもはやてが俺を兄とってくれていいなら、俺も義兄として全力で答えるだけだから」

「蓮くんらしいよ……」

「そうか?...じゃあ、行ってくるよ。ナノハ」

「行ってらっしゃい！蓮くん」

ナノハが目尻の涙を拭いてそう言った

俺はその姿を見た後丘を後にした

.....

.....

.....

.....

・

↳ ナノハside

「行っちゃった.....」

蓮くんが見えなくなった後、私はポツリと呟いた

「最後まで私が本物だって気付いてくれなかったな…」

「そら仕方ないで？ ナノハちゃん」

私の言葉に答えるように声が聞こえた

そちらを見ると蓮くんの妹であるハヤテちゃんが笑顔で立っていた

「蓮兄いはうちらを闇の書が見せた幻だと思つとるもん…」

「蓮くんは私たちを体ごと暁の書に取り込ませたことを忘れてるのかな？」

「覚えていてもまさかここに現れるなんて思つてもいないやろ？ それに暁の書の特性とはいえ、まさか蓮兄いの中にいるうちらが暁の書に移っているなんて…」

「それもそうだね…あはは」

私とハヤテちゃんはお互い笑ってそういった

蓮くんの持っている『暁の書』…『夜天の書』と『闇の書』が『優れた魔法を蒐集し、保存する』のが目的のデバイスなら『暁の書』はさしずめ、『優れた魔導師のパーソナルデータと魔法を蒐集し、保存する』という目的のデバイスというのがしっくりくるだろうね

……

暁の書は魔導師のパーソナルデータ…つまりDNAを保存する

魔導師のDNAにはその魔導師の魔法のリンカーコアの情報や魔力変換資質、さらには魔力の波動パターンまで記憶しているらしい…

これによって優れた魔法とその使い手のデータがセットで暁の書内部に保存されることになるらしい

でも、そんなデータ保存して何か意味があるのだろうか？

魔法の研究用？

話が脱線したけど、私やハヤテちゃんは蓮くんの持っているスキルの一つ『吸収』で肉体ごと蓮くんの中に取り込まれた

そのあと、夜天の書を暁の書に作り替えた際、暁の書は自動的に主である蓮くんのパーソナルデータをコピーした

その時一緒に私たちのパーソナルデータも暁の書に移された（…）

ここで蓮くんと私たちの違いは蓮くんのパーソナルデータは『コピー&ペースト』に対して私たちの『カット&ペースト』というだ

けだ

で、そんな感じで暁の書の中にいたらどういう理屈なのか分からないけど急に体を引つ張られるような感覚に晒されて、気が付いたら見知った丘に蓮くんがいたってこと…

「さて、うちはこれでお暇するぞ…」

「?どこ行くの?ハヤテちゃん」

ハヤテちゃんがどこかへ歩いていこうとするのを私は呼びとめた

「ん?ちょっといつまでも寝とるこの世界のうちを叩き起してくる」

よく見るとハヤテちゃんの手にはいつの間にかハリセンが握られていた

「で、できるの?」

「さあ?でも、『暁の書』も『闇の書』も元は同じ『夜天の書』なんやから可能性はあるやろ?」

ハヤテちゃんは二カつと快活な笑顔でそう言った

「それじゃ行ってくるわ！」

「いつてらっしやい、ハヤテちゃん！」

私は蓮くんのとくと同じように笑顔で返した

「帰ってきたら蓮兄いとのお惚気話聞かせてもらっつでえ……八神ナノハちゃん？」

「にゃあああ!？」

最後にハヤテちゃんは爆弾みたいな言葉を残して行ってしまった……

.....

.....

.....

.....

・
〔蓮 side〕

ナノハと別れてしばらく歩くと急に周りは真っ暗に暗転した

俺は立ち止まって辺りを見回した

すると、暗闇の一角に見覚えのある薄い青色の光が見えた

俺はその方向へ歩いて近づく

そこにいたのは俺の予想の通り……

「こんなところで何をしているんだ？ リンフォース？」

リンフォース？ が膝を抱えて蹲っていた

「……なぜ、ここにいますか？」

リンフォースはほとんど抑揚のない…無感情な声でそう聞いた

「それは俺が聞きたいことだ、どうしてここにいる？ここは闇の書の見せる夢の中なのだろう？」

「何言ってるんですか？ここは暁の書の中の最深部…なんであなたが暁の書の中にアクセスしているのですか？」

「はあ？」

俺はリインフォースの言っていることが分からなかった…

暁の書の中？

そんなわけないだろう…

俺が考えを巡らせていると、リインフォースが立ち上がり辺りをキョロキョロと見回して…

「おかしいですね？よく見たら暁の書の中じゃありませんね…どういうことですか？説明してください。蓮さん」

「なに？今までのことが分からないだと？」

「はい、私は最深部で外部からの情報を完全に遮断していましたので、外で起こったことが一切分かりません。説明をお願いします」

「わかった。時間がないから簡潔に済ますぞ？」

「はい」

俺はリインフォースにこれまで起こったことを話した

リインフォースは始終黙ったままだった

俺が話し終わるとリインフォースが口を開いた

「それで、蓮さんはどうするんですか？」

「どうするって、ここを出るに決まっているだろう…できればリインにも協力してほしい……」

「いやです」

断られるとは思っていたが、まさか即答とは…

「一応、理由を聞いてもいいか？」

「理由？簡単なことじゃないですか、どうして……ハヤテちゃんを殺した本人にどうして協力しなきゃならないんですか……！」

リインフォースは今までの抑揚のない声とは打って変わって割れるような叫び声をあげる

「最初のうちはシグナム達が蓮さんは悪くない。悪いのは管理局の上層部の人たちだと言ってきましたが……結果的にハヤテちゃんを殺したのは蓮さんです！」

「なのに……蓮さんを恨むなど？蓮さんが新しい主だと？そんなバカな話、納得できるわけがないじゃないですか……！」

「拳句の果てにはその蓮さんに協力しろと！？ふざけるのも大概にして下さい……！」

今自身の中にあつたものを吐き出すように叫び声のように俺への恨み言を言い終わったリインフォースは肩で息をしながら俺を

睨んでいた

リインフォースの言うことはわかる

ハヤテが死ぬ原因は管理局だが、実際ハヤテの命を奪ったのは俺な

のだ

リインフォースが俺を恨むのも納得できる

だが、改めて言われると胸が痛くなる

「そつだな…確かに俺がリインに協力を申し出るのは虫がいい話だった…だから…」

俺は……

「済まなかった…そして、頼む…」

頭を下げることしかできなかった

「え？」

「俺が頭を下げて謝ってもリインは俺を許してくれないことは分かっている…でも、このままだとはやてを助けられないかもしれない！だから…」

「俺のことは恨んでくれて構わない！憎んでくれて構わない！でも…今回だけ…今回だけ力を貸してくれリイン！俺と…俺とユニゾン

してくれ！」

リインフォースは俺の姿に呆気にとれたような感じだった

「…ユニゾンしてくれって…蓮さんは何を言っているのかわかっているのですか？」

「わかっている。けれども、確実にはやてを救うために危険だなんて言ってもらえるか！」

「けど分かっているんですか？私と蓮さんの融合適正值は2割を切ってますよ！？どんなに良くても2割に届くのが精一杯です！まともな戦闘ができるとは思えないです！」

リインフォースの言う通り、俺とリインフォースの融合適正值はどう言い繕ってもいいとはいえない

俺の世界にあつたユニゾン適正值を測るシュミレーターで測った適正值の平均は約14〜16%…実際にユニゾンしたら文句の付け所もなく融合事故を起こすそうだ…

今の俺は元の世界の時とは中身が若干変化しているが恐らく今でも低いだろう……

しかし、リスクが高くてもユニゾンは不可欠だ

暁の書は元々夜天の書……つまり、本来、融合機とユニゾンして運用するのが前提としてしているデバイスなのだ

ユニゾンなしで使える暁の書の魔法は『ディアボリック・エミツシヨン』『ダイバインバスター』『プラスマスマツシャー』『アクセスルシューター』『プラスマランサー』の5つ

しかもどれも本来の7〜8割の威力しか発揮できない制限付き

俺のスキルもだいぶ回復しているが、念には念を入れておきたい

ちなみに、ハヤテとリインフォースの融合適正率は平均約95%キープ

シグナム、ヴィータも大体、60〜80くらいと振れ幅が大きいけど問題ないらしい

俺の世界では大体、適正率50%を切ると融合事故の危険があるらしい……

「それでもだ……たのむ！」

「………分かりました。はっきり言わせてもらえば、どうなっても知りませんか？」

「そんなことは重々承知しているさ」

「そうですねか…もういいです…とこるでここからどつやっって出るんですか？」

そう言っつてリインフォースは真つ暗な辺りを見回す

「予想なんだが、ここっつて闇の書と暁の書の『繋がつてる部分』なんじゃないのか？」

「？どついうことですか？蓮さん」

「いや、闇の書と暁の書は本来同じ夜天の書…しかも夜天の書は本来1つしか存在しなデバイスだ。その夜天の書である闇の書の中に暁の書の主の俺が取り込まれたこととリンクが繋がったんじゃないか…と思うんだが……」

「本当だとしたら、ずいぶんご都合主義ですね……」

リインフォースも呆れ顔のようだ

「本来世界に一つしかない『夜天の書』が二つあるという異常事態が起きているんだバグの一つや二つあるだろう…（闇の書のほうは

はやてがコーラぶちまけてるし…本気でバグってそうだ…」

「まあ、今回はご都合主義に感謝、ですね……とりあえず出られるかどうか調べてみます。蓮さん、手伝ってください」

「わかった」

その言葉と同時にリインフォースと俺の周りにいくつものウィンドウが展開されていく

ウィンドウには大量の文字の羅列がいくつも並んでいる

そのウィンドウが現れては消え、現れては消えていく

やがて、一つのウィンドウだけが残った

「まさか…蓮さんの予測が当たっているとは思ってませんでした」

「やはりバグか？」

「はい、夜天の書が2つ世界に存在するという異常を無くすために闇の書と暁の書が互いが互いに『同一の存在』だと認識してるようです……といってもお互いの書に小さな魔力的なラインが繋がっている程度ですけど……」

まさか、俺の予想が当たっていたとはな…本当にご都合だな…

それではやてを助けることができるなら全然構わないのだがな…

「それで、ここから抜けるにはどうすればいい？」

「どつやら今、私達がいる場所はその書同士のラインの中間に近い場所…という事になります」

二つの魔導書のラインの中間という事は

「最もラインの綻びやすいところという事か？」

「そういう事になりますね…」

「という事は…」

「ここで強力な魔法を使えば出られると思います！」

なんと言うか…分かりやすいな…魔法ぶっ放せばOKってか？

なんか子供のころ、ナノ八のことを一時期、魔砲少女（笑）とか言
つてた頃を思い出す…

そのあと、ナノ八に模擬戦挑まれてボコボコにされたんだっけ…

あれ…目から汗が…

「それじゃあ蓮さんお願いします。ユニゾンはここを出てからにし
ましょう、ここを出る前に融合事故は勘弁です」

「わかった…神威は…あるな、起きろ、神威。ここをぶち破る」

《委細承知》

神威のその言葉と共に俺の手に朱色の槍が握られる

「カートリッジ…フルロード…」

《全薬莢、排出》

神威からカートリッジが排出され、槍に紫電が纏われていく

「行くぞ！リインフォース！」

「はい！いつでも来いです！」

リインフォースが神威から溢れ出る魔力の奔流に飛ばされないように俺の服にしがみ付く

「貫き焦がせ！ケラウノス雷霆！！！」

俺は神威をただ前へ力の限り放った…

轟音…

すぐ近くで雷が落ちたような音と共に神威は稲妻となりただ前へ進んでいく

そして俺とリインフォースがいた暗闇の空間は罅割れ、砕けた

.....

・
・
・
・

・
・
・

・

「なのはside」

「はあ…はあ…」

「ふう…ふう…」

「……………」

ロータスさんの持っていた闇の書から出てきたシグナムさんが消えた後、私とフェイトちゃんは闇の書さんを追って海の上まで来た

闇の書さんの障壁が固く、私たちの魔法が全く通らなくて、ついに私はエイミィさんにフレイム強化が終わるまで使わないように言われていたフルドライブ…エクセリオン・モードを使った

フェイトちゃんもフルドライブのザンバーフォームを起動させて闇の書さんに挑んだけど、闇の書さんには殆どダメージを与えられないでいた

そうしていたらいきなり地面から火柱がいくつも噴き出してきた

「世界が崩壊を始めた…もう時間がない…」

「世界が…崩壊…？」

これが多分、ユートノ君やクロノ君が言っていた「完成した闇の書は蒐集した魔力を破壊に使い、世界を滅ぼした」ということなのだろう…

「もうすぐ私の意識も消えてしまう…その前に主の願いを…」

そういつて闇の書さんは再び手をかざして手に魔力を溜め始めた

「そんなことさせない！」

「私たちが止めてみせる！」

私とフェイトちゃんもデバイスを構えたその時…

バチリ…

音が聞こえた…まるで、火花が散るような音…

バチリ…バチバチ…

その音はだんだんと大きくなってきて…

バシヤアアアアンン！！

雷が落ちたような大きな音が辺りに響いたと思うと突然、なにもない空間から雷が闇の書さん（……）に向かって飛んで行った

その雷は黒っぽい紫色の雷だった

闇の書さんは突然出てきた雷に驚きながらもバリアでそれを防いだみたいだった

でも、雷の勢いが強かったのか大きく体勢を崩して雷を反らした

すると、雷はぐるっと大きく軌道を描きながら最初に雷が現れた場所に戻って行った

それを見たとき、私はある光景を思い出した

初めてレイジングハート・エクセリオンを起動させた日…

ロータスさんの素顔を見た日だ

あの時ヴィータちゃんたちが逃げる直前にロータスさんが放ったと
リンディさんが言っていた魔法によく似ている

ううん…似てるんじゃないかってそのものなんだ……

だって…

「よう、完成人格。素敵な夢をどうもありがとう…あんまりにも素
敵過ぎて逆に起きてしまったぜ…」

バチバチと小さな雷が走った朱い槍を持ったロータスさんが肩に妖
精？を乗せてそこにいたんだから

「いい加減、はやてを返してもらおうか？」

ロータスさんは槍を闇の書さんに向けてそう言った

「そうはいかない…これは主の願いなのだから…」

「寝言は寝てから言え、はやてが世界を滅ぼそうなんて願うわけね
えだろ」

「主は…」

「ああ、もういい」

闇の書さんが何か言いかけた時、ロータスさんがうんざりした顔で会話を切った

「お前とは話にならない。さっさとお前を張り倒してはやてを引っ張り出すことにする！リイン、やるぞ」

ロータスさんは肩に乗っていた妖精？に声をかけた

「わかりました、行きますよ！」

「いつでも来い！」

「「ユニゾン・イン！」」

ロータスさんと妖精？がそう叫ぶと辺りは光で真っ白になった

EP19・・・夢中〜懐かしい顔〜（後書き）

蓮「おい、作者」

蒼影「なんですか？」

蓮「なんだこれ？」

蒼影「何が？」

蓮「本編だよ！なんだあれ！いろいろ突っ込みを入れた部分があるんだけど！？とくにハヤテの最後のセリフ！」

蒼影「最初から考えていた。後悔も反省もしていない…ついでに異論も認めない！」

蓮「焦げる！崩纏牙撃！！」

蒼影「たわば！！」

ぴちゅ〜ん

蓮「さて、感想のお礼をするか…HALさま、勇往X邁進さま、感想ありがとうございます！」

蒼影「ありがとうございます！」

蓮「ところで作者よ」

蒼影「なに？」

蓮「とある読者から『蓮の言動と行動が矛盾してね？あとご都合主義ワロタWWW』みたいなメッセージをもらったそうじゃないか？
どついうことだ？」

蒼影「内容すげー要約してるけど…確かにもらいましたよ？」一回読み返してみたら？」
「的なことも書いてあったので読み返しましたよ…自分としては蓮の口調なんかがぶれてたけど、そんなに矛盾らしい矛盾は感じられなかった…それでも修正できるところは修正したけど…」

蓮「自分が感じないだけで、まだそういうのあるんじゃないかねえの？」

蒼影「もし矛盾を感じられたらお手数ですが、感想かメッセージで『第〓話のここがおかしくね？』みたいな感じで送ってくると助かります。ご都合主義に関してはタグに追加しよう…私の文才的に大なり小なりご都合がないとキツイ…できるだけご都合に頼らないようにするけど…」

蓮「そうしてくれ…今回はこの辺でいいな？」

蒼影「そだね…この小説の感想、ご指摘お待ちしています」

蓮「ではまた次回」

蒼影「夜天の空を飛翔せよ！八神蓮！」

蓮「SEEDか…」

EP20・・・融合、諸刃の切り札（前書き）

蒼影「今回は最初から最後までなのは視点です。それではどうぞ
」！

EP20・・・融合し諸刃の切り札

「なのはside」

「雪…？」

光が消えるとまず目に飛び込んできたのは雪…

さっきまで晴れていた海の上に突然真っ白な雪が降っていた

そのあと私はロータスさんに目を向けた

バリアジャケットは闇の書さんに取り込まれた時と同じ闇の書さんのバリアジャケットと同じようなデザイン…

ただ、色が白と黒だったのに白の部分が水色に変わっていた

それに、遠目ではよく見えないけど髪の色も水色になっているのが見える

闇の書さんがとても驚いた顔をしている

「まさか…融合機がいてユニゾンするとは……」

そしてロータスさんが持っていた杖が光ったかと思うと、杖の一部が氷の刃に変わっていて、まるで本で出てくる死神の鎌みたいだった。ロータスさんは鎌を振りかざして一直線に闇の書さんに突っ込んでいった

「せりゃあ！」

「くっ！？」

ロータスさんが振った鎌を闇の書さんがシールドで防いだここまで
はさつきロータスさんが闇の書さんに取り込まれる前と一緒にだ

『アイシクル・ランス！』

キーン！キーン！キーン！

そんな音と一緒にロータスさんの周りに氷でできた菱形の塊…まるで槍みたいなのが現われた

氷の槍はグルリと闇の書を囲むように現われると

「行け！」

ロータスさんの合図とともに一斉に闇の書さん目掛けて飛んで行った

「障壁！」

闇の書さんはすぐに自分の周りすべてにシールドを張った

ガキキキキン！

氷の槍はシールドに阻まれて碎けてしまった

槍に注意が向いている間にロータスさんは氷の刃の鎌で闇の書さんに斬りかかった

闇の書さんはシールドを張ったまま、真っ赤なナイフみたいな刃をいくつも呼び出した

「ブラッティ・ダガー」

闇の書さんがそう言うのと刃はロータスさん目掛けて飛んでいく

ロータスさんは急降下して海面スレスレを飛んで刃をかわしていく…

その時、ロータスさんの通った後の海面が凍りついていって闇の書

さんの刃がその氷を砕いていく

私とフェイトちゃんはその光景に見入ってしまった

なのは！フェイト！

その時ユーノくんから念話が入った

ユーノくん？アリサちゃんたちは大丈夫なの？

エイミイが大丈夫だって…そっちはどうなってるの？できるなら
こっちに映像を送ってくれる？

ユーノくん言われ、私はレイジング・ハートに頼んで今ロータスさ
んが戦っている映像をユーノくんに送った

なのは…この人はあの時の？

うん…どっしたの？ユーノくん

念話から聞こえるユーノくんの声が焦っているような感じだった

この人…融合事故を起こしてる！早く止めないと！

ユーノくんが声を荒げてそう言った

なんでも、融合機…ユニゾンデバイスっていうデバイスを使ったとき、使用者と融合機の適性が低いと融合事故っていうのが起こって使用者の命が危ないって……

映像を見て、この人…体の所々が凍ってる…普通のユニゾンならこういった現象は起こらないはずなんだ…

ユーノくんに言われて映像をよく見ると、服はもちろん、髪の毛、手、顔の一部まで凍っている…

早く止めないと！僕ももうすぐそっちに着くから！

わかったよ！フェイトちゃん！

わかった

フエイトちゃんが頷くのを見て私たちはロータスさんのもとに向か
った

.....

.....

.....

.....

.....

私たちが来たときロータスさんを囲むようにあの赤い刃が現れた時
だった……

「レイジング・ハート！」

《イエス、マスター》

私はすぐにレイジング・ハートを構えた

「エクセリオン……バスター！」

私の放った魔法はロータスさんを囲んでいた刃の一部を消し去った
ロータスさんは一瞬でその消し飛んだ場所から刃の囲いを突破した
その後を追うように刃が飛んでくる

「プラズマランサー!!!」

フェイトちゃんのプラズマランサーが刃を撃ち落としていく

その間にロータスさんが闇の書さんとの距離を詰め…

「らあ!!!」

手に持った杖を闇の書さんに向かって投げた

「!?!」

闇の書さんは突然飛んできた杖を手で弾いた

その間にロータスさんは手に魔力を集めた

見るとロータスさんの手は氷に覆われ鋭い氷の爪になっていた

「はああああ!!」

「くっ!」

闇の書さんがシールドを張るけど…

バリイイイン!!

ガラスが割れるような音と一緒に闇の書さんのシールドが砕けた

「これで!」

ロータスさんが氷の爪を闇の書さんに突き出そうとしたけど…

ギシッ……

「!?!」

私は驚いた

ロータスさんの右手から肩にかけて氷に覆われていた

その所為でロータスさんの手が動かなくなっていた……

「くそ…肝心な時に！」

ロータスさんがそう言った時…

「ふっ！」

闇の書さんの振り上げた足の爪先がロータスさんの顎に当たった

「があ！」

ロータスさんは闇の書さんのキックで仰け反ってしまっ…そんな中
闇の書さんは左手をロータスさんのお腹に当てて……

「貫け…不屈の閃光…デイバイン…バスター…」

闇の書さんがそう呟くと桃色の光は溢れた

デイベインバスターの直撃を受けてしまったロータスさんは桃色の閃光と一緒に海面へと吹き飛んでしまい、海面に激突した…

海面は大きな水柱を立てる…ロータスさんは上がってこなかった…

「そんな…」

「これで…主のねが…」

闇の書さんが何かを言いかけた時突然、闇の書さんの動きが止まった

EP20・・・融合〜諸刃の切り札〜（後書き）

蒼影「いかがだったでしょうか？」

蓮「俺また退場したぞ！？どうなってんだ！？」

蒼影「あのままだとはやてが起きる前に管制人格倒しそつな勢いだつたから」

蓮「ぐう……」

蒼影「それでは感想のお礼いきます」

蓮「勇往×邁進様、グラムサイト2様、HAL様、霧丸様！感想ありがとうございます！」

蒼影「勇往×邁進様からはトーク参加の旨をいただきました。機会ができたならメッセージのほうでお知らせします。グラムサイト2様からは『蓮の世界のナノハとハヤテは守護騎士になれるんじゃない？』という質問をいただきました…その発想はなかった…」

蓮「HAL様からは激励の言葉を、霧丸様からは内容のご指摘をいただきました。ありがとうございます！」

蒼影「次回は管制人格の内部…つまり、はやてsideの話です」

蓮「感想、ご指摘、質問お待ちしております！」

蒼影「それでは次回お会いしましょう！」

EP21・・・夢現くふたりのはやてく(前書き)

蒼影「難産なうえに自信がない…」

蓮「いつものことだろう?」

EP21・・・夢現くふたりのはやてく

くはやてsideく

眠い...

今、私が感じている感覚はそれだ

目の前もぼんやりとしか見えない...

「我が主.....」

まどろみの中、車椅子に座っていると誰かが私の前に立った

ぼんやりとされていてよく分からないけど、声からして女の人みたい
だけど...

「お眠りください、我が主...夢の中なら辛いことなどありません...」

女の人がそう語りかけてくる...

辛いこと...シグナム達が消えたこと...そして、蓮兄い目の前で...

思い出して目尻に涙が浮かんできた

「本当に…辛いことなんてないやろか……」

「はい…」

女の方は私が漏らした呟きにもちやんと答えてくれた

ならいいかなと思いつつ目を閉じたとき…

「……とつとと起きんかいワレえ〜〜!!」

スパーン!

突然私と同じ関西弁の声が聞こえたと同時に額に痛みが走った

「いだあ!」

眠気がすっかり吹っ飛んで額を両手で押さえた

「まったく…いつまで寝とるんや?ウチなのに情けないで!」

声の主を見て私は絶句した

声の主が私だったからだ

背は高くなっていて茶色のどこかの会社の制服のような服を着てハリセンを持っていたけど、間違いなく私だった

「あ…主…?」

女の人がもう一人の私を見てそう言った

「そう、ウチは八神ハヤテや！頭のほうに『並行世界の』ってのが付くけどな！」

パンパンとハリセンで肩をたたきながらもうひとりの私は答えた

「並行…世界…?」

「ところで、ええんか?ここで寝てしまっ…まだみんなアンタを助けようとしとんに…」

さっきまで笑っていたもう一人の私は急に真面目な顔で私を見てそ

う言った

「みん…な…?」

「そや」

「でも…みんなって誰が…」

私は身を少し乗り出してもう一人の私に聞いた

「なのはちゃんやフェイトちゃん…蓮兄いに決まってるやんか!」

もう一人の私は当然のように答えを返した

「え?でも蓮兄いは切られて……」

私は蓮兄いが切られたところを思い出してそう呟いた時

「アホやな〜蓮兄いは筋金入りのシスコンやで?斬られたくらいでくたばらんで!」

あはは〜と笑いながらも一人の私は答えた

いやいや、シスコンだろうがロリコンだろうが斬られたらまずいん
ちやうの？

「それで？どうするんや？蓮兄い達放つといて寝てまうんか？それ
とも起きて蓮兄いたちのところに行くんか？」

もう一人の私がハリセンを突き付けてそう聞いてきた

……そんなん決まってるやん！

「決まっとするやろ！いつまでも寝腐ってられへん！起きるで私は！」

「さっきまで寝ようとしてたやん？」

「それは蓮兄いが死んだと思つとたからや！生きとるんならこんな
真っ暗な辛気臭い場所なんかにいられへんわ！」

「なんでそんなに拘るん？あんだと蓮兄いとは本当の兄妹やないの
に？」

もう一人の私は顔を近づけてそう言った

私はもう一人の私の胸倉を掴んで叫んだ

「本当の兄妹やないからって嘗めるなや！確かに私と蓮兄いは血は繋がってない…でも家族には違いない！そやる！？あんたも私と同じなら同じ考えのはずや！どうなんや！？八神ハヤテえ！？」

私は普段出したことないくらい大きな声で叫んだ

自分と同じ八神はやて（ハヤテ）なのに…ひとりぼっちで誰よりも『家族』としての繋がりを大切に思っている自分自身からそれ（家族）を否定するような言葉に私は怒りを抑えることができなかったから…

私ともう一人の私はお互いの目を見たまま動かない

何秒過ぎた頃か、もう一人の私が口の端を釣り上げて

「くふふふ…あははは！やっぱり並行世界とはいえウチはウチやなあ！」

笑い出した

「なにがおかしんや！？」

「くくく……いや、実にウチらしいと思ってな……ごめんな？あんたを試すような物言いをもつて」

もう一人の私は1分位笑っていて、ようやく気がすんだのか目じりの涙を指ですくいながらもう一人の私が口を開いた

「家族には違いな……そやね、それが聞きたかったんや」

「なんでや？」

「蓮兄いがウチをあんたを大切に思うように、ウチも蓮兄いを大切に思つとるんや並行世界とはいえ、ウチ自身とはいえ、蓮兄いの妹を名乗っているあんたがどう思っているのか確かめずにはいられんかった……世界が違えば性格が違うなんてよくある話やしな……漫画でもそつやろ？」

「確かにそつやな……」

「だから確かめたんや。ウチと似たような考え方、性格で助かったわ！安心して蓮兄いを任せられそつや！」

そう言ってもう一人の私は踵を返した

「ちょっと待ち！さっきから言ってる『並行世界』ってどういって
とや！？蓮兄いも並行世界の人なんか！？」

私は慌ててもう一人の私を呼びとめる

もう一人の私は振り返って口を開いた

「それについては蓮兄いに直接聞いたほうがええで？それじゃ、ウ
チは行くわ。蓮兄いによろしく言っというてや！」

「ちょ！？」

私の制止も聞かずにもう一人の私は暗闇の中に消えていった

「……主……」

もう一人の私が消えるのと同時にあの女の人が私に近づき、声を掛
けてきた

「ん？そっいえばお姉さんは誰なん？」

私が聞くと女の人はどこか物悲しそうな顔で答えた

「私は…この闇の書の管制人格です…」

その言葉の後、管制人格さんから話を聞いた

長い年月で歪んでしまった闇の書…夜天の書のこと…

心ない歴代の闇の書の主に酷く扱われるシグナム達のこと…

闇の書が暴走しそのたびに世界が消えていく様を見続けた管制人格
さんのこと…

一頻り話し終えた管制人格さんを見ながら私は口を開いた

「なあ、ここから出るにはどうすればいいん？」

「主…何を言っているのですか？もう暴走は始まっています…今外
に出たところでどうにも…」

「さっきの話聞いていたやろ？蓮兄い達が頑張ってるのにこんな真
つ暗なところでのんびりしてられへんねん！」

「しかし……」

「あ、そうや！外に出る前にやることがあったわ！」

「はい？なんですか？」

「あなたの名前や！いつまでも管制人格って呼ぶのもあれやろ？だから、あなたに名前を付けるのが何より先かなと思って……ダメ？」

「いえ……その……」

私は私と目線が同じになるように膝立ちしている管制人格さんの頬に手を添える

「もう、闇の書とか呪われた魔導書なんて言わせん位素敵な名前を付けたるな？」

「はい……」

「夜天の書の主がその名を持って汝に新たな名を贈る……皆を強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リイン……フォース……」

「リイン…フォー…ス……」

管制人格さん…リインフォースが涙を名がて途切れ途切れに自分の名前を口にする

「リイン…止める方法はないん？」

「無理です…防御プログラムが止まりません…」

「そっか…まあ何とかするしかないなあ…じゃあここから出る方法は？」

「既に防御プログラム以外は主の権限下にあります…防御プログラムが表に出ているせいで管理者権限が使えません…」

リインフォースの言葉を聞いて私は「んー」と考えて…

「外に声って伝えられる？」

「可能ですが…どうするのですか？」

保護者、八神はやてです！」

声の主ははやてちゃんだった

「はやてちゃん!？」

『え?なのはちゃん!?!本当に?』

はやてちゃんは私の声を聞いて驚いたような声を上げた

「うん、そうだよ。色々あって闇の書さんと戦ってるの!」

闇の書さんは錆びついたブリキの人形のように手足を動かし始めた

『じゅめん、なのはちゃん…何とかしてその子、止められんかな?』

「え?」

『闇の書のコントロール自体は何とか取り戻したんやけど…その子が表にいると管理者権限が使えへんねん…今表に出ると自動行動の防御プログラムが何とかできれば私が管理者権限で何とかするから

「！」

はやてちゃんが言い終わった後ユーノ君が念話で私に声を掛けてきた

なのは！フェイト！今の話が本当なら今から僕が言うことをなのはができればはやてを外に出すことができる！

どんな方法でもいいから、目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして！

全力全開で！手加減なしで！

ユーノ君の説明を聞いて私をデバイスを構えた

「さすがユーノ君！わかりやすい説明ありがとう！！」

《全くその通りです》

「うん…そつだね！」

フェイトちゃんもデバイスを構えて、レイジング・ハートもコアを

点滅させて私の言葉に答えた

『なのはちゃん！蓮兄いは！？』

「蓮兄い…？」

『白い髪の男の方は居らんかった！？』

「それってロータスさん？ロータスさんはさっき…」

私はロータスさんが沈んだ海面に視線を向けた

『うそ…うそやる……蓮兄iiiiiiiiiiii！！』

はやてちゃんが叫んだとき……

ドバアアアアアアン！！！！

海に大きな水柱が上がった

「『氷蔦の鳥籠【Ivy Eiss Vogelk?fig】!』!」

その声とともに鳥籠は完成した

「高町嬢! テスタロッサ嬢! 今だ! 撃て!」

ロータスさんが大声でそう言ったけど、ロータスさんも一緒に撃つてしまうことに私もフェイトちゃんも戸惑ってしまった

「でも!」

「早く撃て! そんなに長く抑えてられない!」

ロータスさんの言葉の通りに闇の書さんはロータスさんの手を振り解こうとしている

「でもそんなことしたらあなたまで!」

フェイトちゃんがそういった瞬間…

「大事な妹とついでに世界の命運とやらがかかってるんだ！さっさと撃てえ！なのはあ！フェイトお！」

その言葉で私たちは同時に魔法を放った

「エクセリオンバスター…フォースバースト！」

「撃ち抜け！雷神！ジェット…ザンバー！」

私の桃色の閃光とフェイトちゃんの黄色の剣がロータスさんと闇の書さんに当たり、大爆発を起こした

EP21・・・夢現〜ふたりのはやて〜（後書き）

はやて「私！復活！私！復活！」

蒼影「まだだから！？次だから！」

蓮「俺の技名は厨二くさい…」

蒼影「大丈夫！あれリインとユニゾン専用技だから」

蓮「この後リインとのユニゾン予定は？」

蒼影「ない」

はやて「…え？」

蒼影「ユニゾン予定はない！某スーパーなロボットの大战のZで出てくる緑川さんが声優のユニットみたいに1回限りです」

はやて「スポットすぎる…」

蓮「もういいや、感想のお礼いくぞ」

はやて「グラムサイト2様、HAL様。感想ありがとうございます
「！」

蒼影「次回は蓮とはやての再開とできればフルボッコまで行けたら
と思っています」

はやて「皆さんからの感想、」ご指摘お待ちしております！」

蓮「それでは次回！」

はやて「……………ネタが思い浮かばない……………私にネタを分けてくれえ！」

蒼影「結局ネタやっってるよね……………」

EP22・・・集結！暁の守護騎士（前書き）

蒼影「いつもより早く仕上がったZ E！」

蓮「作りが雑になってないといいな？」

蒼影「本文で蓮が言っている例は私が思っているアルカンシエルのイメージです。どれも発射されるとヤバいものだというイメージが伝わればokです」

EP22・・・集結！暁の守護騎士！

「なのはside」

爆発の煙の中からロータスさんが出てきた

バリアジャケットはボロボロで所々から血が出ている…

隣にはあの妖精みたいな子もいる…傷は見当たらないけど、肩で息をして辛そうだった

「ロータスさん！」

「…………自分で撃って言うておいてあれだが、本気で死を覚悟した…………」

「死ぬ前に塵になるかと思いました…………」

この二人…いきなり酷いの…非殺傷設定だから死ぬはずないもん！

「そつだ！はやては！？」

「そうです！はやてちゃんは！？」

……無視とか…スルーとかやめてほしいの……

「なのは、大丈夫？」

フェイトちゃんが私を気遣って声を掛けてくれるけど、私の気持ちは沈んでいく一方だった

とその時、さつき闇の書さんとロータスさんがいた場所に光る球体が出てきた

そしてその球体が光ると三角の魔法陣が浮かびの周りに4つの赤、桃、緑、青の光が出てきて光が集まり、人の形になっていった

「我ら、夜天の主の元に集いし騎士」

とシグナムさんが

「主ある限り、我らの魂尽きることはなし」

と緑の服の女のひと…確か……シャルさんがそう言って

「この身に命ある限り、我らは御身のもとにあり」

青い服装の耳を生やした男の人が

「我らの主、夜天の王、八神はやての名のもとに」

最後にヴィータちゃんがそう言った時……

真ん中の光の球が弾けた

そこにはロータスさんのバリアジャケットと白黒の色が逆転したデザインのバリアジャケットを着て

ロータスさんと同じ杖を持ち黒い羽根を生やした白い髪のはやてちゃんがいいた

ロータスさんと妖精さん？ははやてちゃんの元へ静かに飛んで行った

.....

.....

.....

•••

•

〔蓮 side〕

俺がリンと共にはやての所に行くとヴィータが泣きながらはやてに抱きついていた

「はやて……」

俺が声をかけるとはやては俺のほうを向き俺の姿を見て泣きそうな顔で……

「蓮兄い……そんなに傷だらけになって……」

「済まない……はやて」

はやては俺のバリアジャケットの裾を力なく握った

「最後のほうだけやけど、蓮兄いが私のこと助けようとしてたのを見てたから……そんなに強く言えない……けど、これだけは言わせて……」

…」

はやては目じりに涙を溜めながら俺を見ていった

「あんまり無茶せんといてえな……」

「ああ…済まなかった…よく戻ってきた…お帰り、はやて」

弱弱しく言うはやてに俺はその言葉とただ頭を優しくなでてやることしかできなかった…

「…ただいま、蓮兄い…」

はやてが目には涙を浮かべたまま懸命に笑顔でそう言った時、なのはたちもこちらにやってきた

「なのはちゃん達もごめんな、うちの子たちが迷惑かけてもつて…」

なのはたちは気にしていないと言いながら首を横に振っていた

「水を差すようで済まない。時空管理局執務管、クロノ・ハラオウ

ンだ。時間がない、簡潔に説明したい」

そう言っつてクロノは説明を始めた

俺たちの足元にある黒い球体…闇の書の防御プログラムがあと十数分足らずで暴走するそうだ

クロノ達、管理局が提示したプランは二つ

一つ、強力な氷結系の魔法で停止、封印する

二つ、アースラに搭載されたアルカンシエルで消滅させる

クロノはこの二つ以外で有効なプランはないか俺たち八神家に聞いてきた

「所でロータスさん、アルカンシエルってなんですか？」

……どうしてそこで俺に聞く？高町なのは……

「…蓮…それが俺の本名だ、これからは蓮でいい。質問の答えだが、『放射能の出ない核ミサイル』、『メ オウ攻撃』、『範囲の広い縮 砲』、みたいなものだと思っつてくれて構わない。とりあえず地上、海上で放てば地形が簡単に変わる魔導砲と言っつたほうが分かりやすいか？」

「『メイ ウ攻撃』と『縮 砲』は分かる人しか分からないんじゃないん？」

はやての言うようになのはたちはその二つは理解できなかったようだ

「でも、撃つたら大変なものだってことはわかったのでそれを撃つのは反対です！」

「同じく！」

とそんな感じのやり取りの後、遅れてやってきたアルフが『ズバツとぶつ飛ばす』発言でなのはたちはあるプラン？を思いついたようだ…それが……

『みんなで全力攻撃して、露出した防御プログラムのコアを宇宙に転送してアルカンシエルで蒸発させる』

……なんともゴリ押しなプランだった…

しかも、これが計算上一番有効だというから呆れてものが言えなくなる…

「……プランが決まったことなので、戦闘準備と行こうか…高町嬢、俺の書を返してくれるか？」

「え？は、はい！」

なのはは慌ててデバイスから暁の書を取り出し、俺に手渡してきた

「スキルのはうはどうなってる？」

《『王冠』、『知恵』、『慈悲』、『峻厳』、『基盤』、『無神論』、
『拒絶』、『醜悪』、『貪欲』、『物質主義』が完全開放可能で
す》

《スキルのみでしたら全ナンバー可能になりました。正逆同時開放はスキルのみでしたら可能です》

「解放原因は？」

《ユニゾンにより瀕死に近い状態まで行きましたから…そのシヨックでしょうか…》

「……そうか…」

死にかけて能力開放か…少 ジャ プでもあるまいし……

けど、正逆同時開放ができるようになったのはありがたい…これで闇の書を修正できる

そのためにはまず目の前の敵を倒さないとな…

「行くぞ…ナンバー4（フォー）《慈悲》解放…」

俺の眩きとともに俺を光が包む

光が収まると、俺の服装は白い狼の毛皮をあしらった軽鎧に身を包み、俺の周りを白い狼が四匹座っていた

「蓮兄い…それ…」

はやてが俺を指差して聞いてきた

「説明は後回しだ。とにかくみんなの治療が先だ…『癒しよ（？）？
？ ？ ？ ？ ？ ？』」

俺がそういうと周りの狼が吠え、なのはたちの周りを順番に駆け回る

すると狼に駆け回られたなのはたちの傷が瞬く間に消えていく

最後に狼たちは俺の周りを回り、俺の傷を癒して消えた

それと同時に俺の纏っていた鎧も消える

「今は…何なんだ、蓮」

シグナムが俺に聞いてきた、おそらく今の治療行為に魔力反応を感じなかったからだろう。疑問は当然だ、いきなり魔法とは似ても似つかない不思議な力を身内が使ったら疑問に思うだろう…

「シグナム、はやてにも言ったが説明は後だ『皆！防御プログラムの周りに無数の魔力反応を確認したよ！気をつけて！』……なんだ？」

オープンで念話が全員に届けられ、一斉に防御プログラムの方を見る

そこには見た目だけでいえば、話に聞く『悪魔』のような姿をしたナニカだった

共通点は山羊を思わせる頭部くらいか…

小型のものから大型のものまで様々だ

どれも、剣や盾、大鎚や槍を持っている

その『悪魔もどき』の数はざっと見ただけでも千は超えているだろう。しかも今もお、その数は増え続けている

「なんだ！あれは!？」

クロノが焦った様子で声を上げた

「おそらく、こちらが攻撃しようとしているのを察知して生み出した護衛のようなものだろう……数が多いな……クロノ」

「なんだ!？」

「プラン変更だ。俺『達』がやつらを止めるからお前たちは防御プログラムを頼む」

「無茶だ！一人であの数は……」

クロノが俺を止めようとするのを俺は制して言った

「誰も俺『一人』とは言っていない……」

そう言つて俺は呼び出したシュベルトクロイツ？を前に突き出し、
暁の書を天に掲げた

「集え、我が騎士たちよ！夜天の主の盟約の元、我に力を貸し給え
！暁の守護騎士たちよ！」

俺の言葉の後、俺の周りに赤、桃、緑、青の魔法陣が浮かび上がり、
四つの人影が現れた

「我等、暁の主と共に駆ける騎士……」

炎の魔剣の名を冠する剣を構えたシグナムが…

「主の盟約ある限り、我等の忠義は尽きることは無し……」

指輪の代わりに菱形の宝石が上下に二つ付いたグローブを両手に付
けたシャマルが…

「この身に命と誇りがある限り、我等は御身と共に在り……」

はやての方の『あつち』のザフィーラより色の暗い青いバリアジャ
ケットに身を包んだザフィーラが…

「我らが主…夜天の王、八神ハヤテと暁の王、八神蓮の名の元に…」

自分の身長と同じくらいの大きさの頭部をもったハンマー…グラ
フ・アイゼンを肩に担いだヴィータが…

「……暁の守護騎士！盟約の元、参上いたしました！ご指示を、
我が主！」「」「」

今ここに暁の守護騎士は集った

皆、はやての守護騎士と騎士甲冑のデザインこそ一緒だが、甲冑の
金属の部分が黄金色に輝いており、瞳の色も山吹色になつて

いた

はやて達はシグナム達の登場に啞然としている

そんな中、『こつち』のシグナムが口を開いた

「久しいな、蓮」

「ああ、こうして直接話すのは久しぶりだな…シグナム」

「そうだな…それで、私たちを呼んだ理由を聞こうか？」

「あれを見て察してくれ…」

俺は防御プログラムを指差した

「…なるほど…で、私たちは周りの雑魚の掃討か？」

シグナムがちらりと未だに増え続けている『悪魔もどき』見て言った

「『こちら』の初陣にしては物足りないとは思つが、あんなのでも闇の書の一部だ…放って置くとは何が起きるかわからない、殲滅するぞ…シャマルとザフィーラは向こうのサポート班の護衛を頼む……」

「わかりました。久々の戦い…腕が鳴ります」

シグナムはレヴァンティンを持つ手に力を込めてそう答えた

「任せろ兄貴！」

ヴィータがグラーフアイゼンを肩に担いで頷く

「任せてください！蓮さん」

「任せろ…蓮」

シヤマルとザフィーラもそう答えてユーノ達の方へ飛んで行った

その時、防御プログラムを覆っていた闇の球体の周りから球体と同じ闇色の細い柱が現れ始めた

その後、球体が弾け、中から異形と呼べる姿をした防御プログラムが現れた

「ちっ…もう暴走が始まったか！周りはこっちがやる！はやてたちは本体を頼むぞ！」

はやてたちの返事を聞く前に俺とシグナム達は防御プログラムの方へと飛翔した

EP22・・・集結〜暁の守護騎士（後書き）

蒼影「グラムサイト2様、勇往X邁進様、小説大好きっ子様、HA様！感想ありがとうございます！」

はやて「蓮兄いのシスコンについてのコメントが多かったなあ〜」

蓮「そういう風に書いたのだから当然の反応なんだけどな…ところで作者よ、暁の騎士たちの見た目の変化はどこだ？」

蒼影「共通の変化はバリアジャケットの色合いが若干暗色系に変更、金属パーツが銀色から金色に、目の色が山吹色に変化。個人での変更はヴィータのアイゼンが常時ギガントフォルムに、シャマルのクラーヴイントが指輪型からキャロと同じグローブタイプに変更といった感じです」

はやて「たびたび出てる『王冠』とか『峻巖』ってなに？」

蒼影「わかる人はすぐにわかりますがユダヤ教のカバラ…生命の樹から来ています。それ関係でヘブライ語使いましたし……」

蓮「今回はフルボッコ回か……」

蒼影「派手になるように頑張ります……」

はやて「感想、ご指摘待ってます！」

蓮「それでは次回！」

はやて「リリース！」

蒼影「カードキャプター乙…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6570n/>

リリカルなのは～夜天を受け継ぐもの～

2011年12月8日15時03分発行